
IS vs DT 咎人よ龍であれ(仮)

マダオ万歳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS vs DT 咎人よ龍であれ（仮）

【Nコード】

N6106V

【作者名】

マダオ万歳

【あらすじ】

かつて偽りの神から世界を護った咎人たちがいた。彼等はこれからの未来を創っていく者たちとそれを支える者たちのためにその命を散らせていった。そして、自らが犯した罪を地獄で償うはずだった。しかし、その内の一人が女神と名乗る少女からイレギュラーの始末を頼まれISの世界に行くことになった。少年はその身に救えなかった者たちと自分と共に戦って死んでいった英霊たちとの約束を刻み龍の鎧を纏いイレギュラーと戦う。もう、二度と大切なものを奪われないために。

旅立ち（前書き）

ここにお越しくださってありがとうございます。

初めまして、作者のマダオ万歳です。

こういった二次元創作を書くのはこれが初めてです。
処女作です。駄文です。

それでもいいという方は見ていただければ幸いです。
では、どうぞー！！

旅立ち

ボロボロになった少年を抱きながら泣いている少年がいた。少年たちの周りには、瓦礫の山が続いている。

side???

「聖火・・・、すまない・・・。」

ボロボロになった少年を抱き泣きながら友の名を俺は言った。

「光秀、最期くらい笑ってくれよ・・・。」

聖火という少年は、血まみれの手を俺の頬に伸ばした。

「光秀、俺の頼み、聞いてくれないか・・・。」

聖火の手を自分の手で握りしめながら俺は静かに頷いた。聖火の体のダメージを見てもう助からないと悟ったからだ。

「これからの世界を創っていく子供たちとそれを支えていく者たちを導いてやってくれないか。」

聖火は今にも消えそうな声で言った。

「・・・わかった、俺が必ず導いてみせる。そして、聖火や先に逝った者たちのことを絶対に忘れない。そして、この世界を復興させてみせるよ。」

俺は泣きながら、けれど笑顔で聖火に言った。この時の俺にはそう
言ってやるのが精いっぱいだった。聖火はふっと安心したような笑
みを浮かべた。

（やっぱり、死なせたくない！！！）

分かってる、分かっているのだが……。さまざまな思いが胸
の内からこみあげてくる。

「光秀……………」

聖火が俺にまた話しかけてきた。

「これが俺の最後の言葉だろう。だから君に伝えたいことがある……
……………」

聖火も自分の死を悟っていた。俺は今にも自分の頬から落ちそん
な聖火の冷たい手を強く握りしめた。

「光秀、最期まで俺のダチで、親友でいてくれてありがとう。本当
に……………」

ありがとう

そう言い終わると聖火は眠るように静かに目を閉じた。そして聖火の手は俺の手をすり抜け静かに地についた。

「聖火――――！！！！！！」

俺はあらん限りの声を泣きながら朝陽で染まる東京の空に向かって叫んだ。そして、俺の叫びは瓦礫の山とかした東京に響き渡った。この日、人類に全てを奪われそれでも護りたいもののために命を懸けた俺の親友、聖火・バジル・オーガは俺の腕の中で天に召されて逝った。

side 光秀 end

side 聖火

俺は死ぬのか・・・、薄れいく意識の中で俺は思った。

（これで約束は果たしたよ、今そっちに逝くよ・・・・・・
音）

そして愛した者の姿を思いながら俺の意識はそこで途切れていった。

聖火・・・・・・、死なないで・・・・・・。

どうしてだろう、琴音の声が聞こえる。無理だよ琴音……、もう俺はってなんで俺心の中で考えられるんだ。

そして、俺は目を開けた……………。

(「ここ、どこだ……………」)

第一印象はそう真つ白だ。俺は首を傾けて周囲を見渡してみる。どこまでも白い空間が続いている。

(でもおかしい。俺は確かにあいつとの戦いで最期月を吹っ飛ばして死んだはずじゃ……………))

直ぐに冷静になれる自分がすごいと一瞬思ってしまった。むくりと体を起こして立ち上がり俺は屈伸をした。

(何故か分からないが、生きているらしいな。ま、一応あれやってみるか…………))

俺はそう思うと自分の手でほつぺたをつねった。 痛い…………。

(うん、間違いなく、生きてるな。)

そして自分の恰好を確認している。さっきまでボロボロだった体は傷が塞がっていた。そして、服は黒い服で戦いの後破れていたが治っている。

(服はいつも戦いで着るときのジャケットだが何故こいつらがある?))

腰に差してある折れた筈の自分の愛刀 曇龍 と足のポケットにしまっている二丁のハンドキャノンを見ながら思った。さらに自分のジャケットがボロボロの状態ではなく新品のようになってる。

気が付いたのですね・・・

・・・

後ろから聞こえる声に思わず曇龍に手をかけ身構えながら後ろを向いた。そこには、女の人がいた。そう、例えるなら女神のような才一ラを放っている人が・・・

(こいつは、いったい・・・)

・・・)

そう思いながら女性をにらみつける。

「大丈夫です。こちらに敵意はありません。どうか怒りをお沈めください。」

そう静かな目で俺を見つめながら言った。さすがに丸腰の奴に殺す気は起らず手を刀から外したが警戒怠らずそのままその女性をにらみ続けた。さつきから、何で喋らないのかって、それは今俺の喉は焼き切れているからだよ。月をブツ飛ばすときに放った一撃で完全に喉が死滅しているからなんだ。光秀と話せたのも最後の力を振り絞ってようやくさせたのだから・・・。

「今のあなたでは喋ることができないので頷きで答えてください。」

女性はそう言ったので俺はその人の言うとおりにした。どのみちここがどこだか知りたいからだ。

「私は、信じられないでしょうが女神です。」

おいおい、まじで俺の予想が当たっちゃったよ。

「あなたに折り入って頼みがあります。聖火・バジル・オーガさん。どうか聞いてもらえないでしょうか？」

唐突だな……。何故俺のことを知っているのかはあとにしてとりあえず聞いてみよう。俺は首を縦にふった。

「ここは、あの世の一步手前にある場所です、あなたに頼みたい事というのは……………」

世界を救って欲しいのです。

8

(……………)

俺は自分のことを女神と名乗る奴を睨み続けたまま黙ってその女の話聞いた。

「証拠が欲しいのはわかりますが申し訳ございません。今私のことを女神と証明することはできません。しかしあなたの服や得物などが元通りになっただけで信じてもらえないでしょうか？」

たしかに、死んでさほど時間が経ってないのに体のダメージや服や折れた筈の曇龍が元通りになっただけはおかしい。それに、一番はあいつの目だ。静かだが、優しく偽りのないまっすぐな瞳。俺はこ

いつを信じてみることにした。俺は静かに頷いた。

「ありがとうございます。友好の証としてこれを受けとってください。」

そう言うと、手の中に何かの機械を持ち俺の前に差し出した。俺は一瞬ためらったが受け取った。

「それを腕に巻きつけてください。」

俺は言われるがままにその機械を自分の腕に当ててみたら、機械がブレスレッドのように腕に巻きついた。

「なんだこれって、喋れるようになってるな。」

そうその機械から俺の声が機械的な声だが流れていたのだ。

「声帯か何かか……。とりあえず礼を言う。ありがとうございます。」

「いえ、こちらもお願ひする身ですから……。」

しかし、改めて見るとこの人背が小さいな。150くらいかな……。それで髪は小麦色のロングヘアーだ。

「背のことは気にしないでください。」

そう頬を膨らませながら女神は言う。怒らせちゃったかな……。とにかく自己紹介だな。

「知っていると思うが自己紹介だ。聖火・バジル・オーガだ。」

「私はあらゆる世界を管理する女神、アドニアと名乗っておきましよう。」

「偽名か・・・？」

「いえ、もともと私には名前がないので用意しておいたコードネームです。」

「そうか・・・。よろしく。」

俺は手を彼女の前に差し出した。

「信じてくれるのですか。」

彼女は俺にそう聞いてきた。

「たしかに、あんたのことをまだ完全に信じた訳じゃない。でも、あんたの瞳は人を騙そうとしているやつと違って、それにはもう死んでいる。けれど、役目があつてここに呼ばれたのだとどこかで感じているからかな。」

俺は笑顔で彼女にそう言った。

「ありがとうございます。それでは、これからよろしくお願いします、聖火さん。」

そう言い終わり俺たちは握手をかわした。

「それで、あなたは俺に何を望むのですか？世界を救って欲しいと

「いづのはどづいづことですか？」

「今から説明するので聞いてください。」

そう言い終わると彼女は一旦間を置き話始めた。

「あなたに言った世界を救って欲しいと言うのは私が管理する世界のことなんです。」

俺の世界とは違う、つまりパラレルワールドか……。

「この世界ではIS、通称インフィニット・ストラトスという、アーマードスーツが存在します。」

「このスーツは制圧力、火力、機動力、防御力共に今までの兵器を葛藤するものです。」

なるほど、俺の世界のDT（ドラゴン・タクティカル以下DT）と似たようなものか……。

「しかし、この兵器には欠陥があつて男性には使用することができない。つまり女性しか起動することができないのです。」

「そのせいで女尊男卑が確立男性は翼をもちがれ不満が溜りいつ戦争が起つてもおかしくない世界です。」

なるほどな、たしかにISの登場で世界のバランスが崩れた世界そんな状態じゃ、戦争が起きてもおかしくないな。

「そしてこの兵器は第4世代まで開発されています。さらに形態を

変えることができ第一、第二形態があります。」

聞けば聞くほど凄い兵器だと思ってしまった。

「そして、この世界にとあるイレギュラーが発生したのです。」

「イレギュラー？」

「はい、そのイレギュラーはまだ身元はわかりませんがあなたの世界の兵器を持っています。」

「ひとつと、DTかそれともZT（ジユラシック・タクティカル以下ZT）か？」

たしかにその二つなら男性でも操縦することができるから戦争の火種にはなるだろう。

「いえ、そのどちらでもありません……。」

「では、どういったものなんだ？」

そう聞くとアドニアは顔を暗くしてしまった。

俺の世界の兵器でDTやZTはなく、なおかつ世界のバランスを変えれる兵器……。

「まさかとは思っけど、その兵器は……、キールなのか……。」

アドニアは俺の問いに黙って頷いた。

「嘘だろ……」

「そう、あなたの世界で使われ、ユーラシア大陸とアフリカ大陸を地獄に変えたウイルス。生き物を殺すことで極上の快楽を得ることができそのせいで殺すことしか考えられなくなりさらに一度死ぬとキメラとなり人の身から化け物に変える悪魔の兵器。」

「そうこの兵器のせいで俺の世界は滅亡寸前まで追い込まれたからである。400億以上いた人口はその数を50億までに減らしたのである。俺の世界で自らを神と名乗ったものが人類を滅ぼし自らの世界を創るために作った兵器……」

「ISではあの兵器に太刀打ちできません。」

「だから俺にそいつの始末をしるって訳か……」

「そう俺が言つとアドニアは俺に向かって頭を下げた。」

「無理を言っているのは承知の上です。ですが、どうかお願いします。あの世界にいる人々を生き物を護つてあげてくださいませんか、お願いしますっ！」

泣きながらアドニアは必至に言ってきた。俺は少しの空白の後彼女に言った。

「わかった、引き受けよう……」

俺の答えに彼女は頭を上げ信じられないような目で俺をみた。

「たしかにあの兵器とは、もう戦いたくない。あの兵器で多くの仲間を失った。」

「けれど、だからこそ俺のような思いを他の誰かにさせたくないんだ。」

「キールに感染した仲間を討つのはもう俺だけで十分だ。愛する者を目の前で失うのは俺だけで十分だ。」

そして、おれは震えているアドニアの手を両手で優しくもち言った。

「俺に出来ることがあるなら力になろう。」

アドニアはそれを聞くと笑顔でお礼を言った。

「ありがとうございます。そう言っていただけでとてもうれしいです。」

するとアドニアの手が光出したのだ。とても暖かい光だ……。

「あなたに力を授けます。受け取ってください。」

すると俺の後ろに全高40メートルくらいで恰好は昔の侍のようで黒いマントを付け頭は龍で鬼のような二本の角を付けている物体があった。

「デイストラクションか……。」

そう。それは、かつて自分が使っていた機体、創生破壊神である霊獣神の死骸と古代のオーバーテクノロジーを融合させて創られた霊

龍神器。サイボーグの「ディストラクション」だ。

「そう、私たちと同じ神という存在。それとあなたの世界でかつてあなた自身が封印した『龍の巢』を託します。」

龍の巢・・・、まさかあれまで用意できるのか・・・。

「すまない、そこまで用意してもらって・・・。しかし、どうやって龍の巢を・・・。」

「あなたの封印した場所から転移させます。」

「もう何でもありだな・・・。」

ため息交じりでアドニアに言うと苦笑いで返した。

「そういうば、何で俺の名を知ってたんだ？」

「あなたの世界で死んでいった英霊たちが教えてくれました・・・。」

「そうか・・・。」

俺はどこか遠くを見るような声でそう言った。

「時間です。今からあなたを転生させます。」

そう彼女が言うと扉が俺たちの前に現れた。

「転生したら俺は何処にいるんだ？」

「日本の山中です。大丈夫です。人が普段近寄らない場所ですから。」

心配だ……。どや顔をして胸をはっているアドニアを見て思ってしまった。

「龍の巢はステルスモードで日本の海溝に沈めてあります。座標をデストラクションにインプットしておきます。」

「ありがとう。」

そう言うと俺はデストラクションに乗ろうとしたのだが、急にデストラクションが光粒子となって蒼色の勾玉になったのだ。

「これは……。」

「ISの待機状態です。あなたが念じればISとして装着できます。また、通常の大きさではあまりにも大きすぎるのでISサイズにしてあります。あなたが望めば元の大きさに戻すことも可能です。」

「わかった……。」

そう言い終わると俺は勾玉を首に下げ扉に向かって歩きだした。

「あゝ、最後に頼みがある。」

俺はアドニアの方を振り向いた。

「わたしにできることがあれば……。」

「俺の世界で人類のために命を散らせていった英霊たちに鎮魂歌を奏でてやってくれないか。」

「わかりました。必ず……。」

それを聞くと俺はドアノブに手をかけた。

「あっ、もう一つあった方がいいか……。」

「なんででしょう。」

「御上 琴音という女性に伝えてほしい。そっちに逝くのはもう少しかかるからすまないが待ってくれてな……。」

アドニアは黙って頷いた。

「ありがとう、それじゃあ……。」

行ってきます

そう言うと俺は扉を開けドアの光の中へと歩いて行った。

side 聖火end

Sideアドニア

「頼みましたよ。聖火・バジル・オーガ。黒き破壊の龍神さん……」

すると後ろから青色のショートヘアの女性が歩いてきて。

「良かったのですか？あの人に会わずにいて……」

私がそう言うと女性は言った。

「今会えば彼も私も絶対に我慢できなくなる。だからこそまたここに帰ってきたときに、笑顔でおかえりって言いますから……」

「いい女性をお持ちになったのですね、聖火さんは……」

「アドニアさん、聖火のことを頼みます。」

「もちろんですよ、御上 琴音さん。」

そうして私たち二人は共に笑みをこぼした。

この物語は正義に全てを奪われた龍を纏いし咎人が異界で紡ぐ優しき物語。彼は命を懸けて人類を護るだろう。

それは、救えなかった多くの命と彼と共に戦ってその命を散らせていった英霊たちとの約束を胸にきざみつけているからだ。

だからこそ、人は知るであろう。戦いとは何か、力とはなにかを・
・・・。

さあ始めよう。傷ついた咎人はいかにして世界を救うのか共に見守ろう・
・・・。

旅立ち（後書き）

いかがだったでしょうか。

指摘などじゃんじゃん言ってもらえれば幸いです。

感想などで書いてください。

これからもこの作品とダメ作者を暖かい目で見てください。

次は主人公と主人公機体と龍の巣について書こうと思います。

では、次の更新でお会いしましょう。

それでは！！

設定集1 随時更新中(前書き)

いろいろな設定集です。

長いです。

すいません。

では、ごじょー！

設定集1 随時更新中

設定1

聖火・バジル・オーガ

性別 男

身長 177cm

体重 67kg

目の色 赤

髪 黒のショートヘア

歳 15歳（本当は21歳）

履歴

本作の主人公、かつて偽りの神との激しい戦闘の末倒し自らもその代償に死ぬはずであったが女神の頼みにより転生することに。

性格は至って温和であるが一度戦うと決めたらとことん強い。喉が焼き切れているため女神からもらったアイテムにより言葉を辛うじて話せている。また、目が靈龍神器に長い間乗っていたので龍と同じような目になっているため普段はサングラスをかけている。またその影響で胴体視力や反射神経、肉体自身が強化されており生身でISと戦える。

過去に、多くの仲間を失っており正義や力を美化している者を嫌っているが滅多に口に出さない。その分多くのことを経験している

ため一夏たちの悩みの相談役になったりしてはいるが時々DSになったりもする。一夏たちのドタバタに巻き込まれる苦労人である。基本的に初対面の人や目上の人には敬語を使っている。学園に入学する際にアドニアに頼んで15歳の時の体にしてもらっているが身長や体重は変化せず少しだけ同年代の男子より大人びた感じになっている。

日本刀 曇龍

永久の鋼という特殊な物質でできている。ISなどと互角に渡り合うことができる。

ハンドキャノン 風天、雷天

永久の鋼でできたハンドキャノン、威力が凄まじく聖火以外には扱えない。

オリジナル機体

靈龍神器 ディストラクション

近接戦に長けている。全体的には幕末頃の侍の恰好に黒いマントを付けたような姿をしており所々に青いラインが入ってる。顔は龍で所々に機械の部分がある。コアには靈獣神の心臓がそのまま使われている。かつて靈獣神と呼ばれた龍の死骸と古代に滅んだオーバーテクノロジーを融合させて造られたサイボーグ。コックピットは

なく、霊龍神器の適合者は直接、霊龍神器と融合する、獣魂一体のためダメージが搭乗者に直接反映される。また、「始まりの焔」という特殊スキルを持つているが内容は現時点では明かせない。長い間搭乗していると、だんだんと人間としての理性を失っていき、最後には暴走を起こしてしまふ。鎧や武装には「永久の鋼」を使用しているため通常的手段では倒すことができないが「永久の鋼」同士や「龍神の鋼」で何回か切りつけていければ破壊することも可能だが霊龍神器の持つ特殊スキルによって事実上は止めることは出来ても撃墜することはできない。

近接ブレード 曇龍

曇龍がそのまま大きくなったもの。

重火器

ハンドキャノン 風天、雷天

上記と同じだが弾がレールガンになっている。

単一使用 死者の日

まだ秘密です。あえて言えるとすれば幻術っぽいものです。

特殊能力 イカロスの翼

背中に白い骨が左右に三本ずつ生えそこから青い炎の翼ができ機動力が著しく上がる。

D T 機械龍神器 ドラゴン・タクティカルについて

全高20〜40メートルの人型機動兵器、特徴は、ボディーは人間のようなだが頭部が龍のような形をしている。陸、海、空、宇宙での戦闘が可能。あらゆる兵器を葛藤できる最強の兵器。

神霊地より発掘された霊龍神器を元に、6500万年前に絶滅した龍の体の一部と「龍羅の書 傀儡の章」を解読して生み出した特殊人工筋肉と特殊人工心臓、また機体の骨組みであり劣化してしまつた龍の骨を補うための人工骨などをベースに、機械制御可能な寄生機械植物マンドラゴラの種を完成した機体に植え付けることにより機体中に神経や血管のように根が伸びていきその中にはD N Mが流仕込むことによつて、それが機体全体と連動し人間と同等の動きを可能にしている。

また人工心臓などだけではシステムを連動することはできないためD N Mの制御やシステムの運用などを行うA I、人間で言う脳の機能が組み込まれている。装甲には、「龍羅の書 霊鎧の章」と神霊地から発掘された霊龍神器の装甲などを解析し生み出した、「偽りの鋼」と「龍神の鎧」を使っている。

また、飛行する際に飛翔ブースター意外に機動力を上げるため龍の羽から作られた人口翼などを搭載した機体も存在する。また、従来の機動兵器とは違い直接制御のためレバーが存在せず自分の手足のように動かすこと可能。そのため、D Tと自分との動きを連動させるためマンドラゴラがパイロットスーツに根を伸ばし一時的にパイロットと間接的融合を行いパイロットの動きを機体に連動させて

動かしている。

D Tは現在第4世代まで開発されており通常装備としてレールガンの知識を応用して作られたレーザーアサルトライフルやレーザーマシンガンやレーザーハンドガンの雷雨4式、雷蓮3式、雷砲5式を通常装備としている。また国ごとに、偽りの鋼や龍神の鎧でできた長剣、薙刀、槍、ランス、ハンマーなどの近接武器も装備している。

また、Gが激しいためコックピットには龍とともに発掘されている龍の体の保存を行っていたあらゆる衝撃などを無効にする繭を解析し創った「ゆりかご」を使っている。

燃料には、DNMに心霊地で採取され量産に成功している植物「ラフレシアン」を高密度に圧縮してとれたバイオ燃料が使われている。このエネルギーは、古代に霊獣神が使っていたとされるエネルギーで爆発的なエネルギーを得ることができる。

欠点は撃墜されたときに流れ出るDNMは生物にとても有害で大地に触れた場合、その土地での生活は困難になり、汚染を除去するには何年も時間を要する。

第一世代 人間に近い動きが可能で理論上あらゆる兵器を圧倒できる。しかしまだゆりかごを搭載しておらずGが激しいため人が乗れるようなものではない。また、DNMも機体稼働中に暴走したためこの時点では兵器としての見込みはなかった。コックピットはまだ直接制御ではない。

第二世代 陸、空での戦闘が可能になり試作型のゆりかごを搭載しGをわずかに軽減することに成功。また、ゆりかごを搭載した試

作機は直接制御仕様となつている。初めて実戦に投入された世代。人間と同等の動きが可能になりDNMの暴走も沈静化することに成功したが未だに不安定な部分がある。装甲には「偽りの鋼」を使用している。

第三世代 陸、海、空、宇での戦闘が可能。DNMにあるモノを加えることによつて暴走を完全に沈静化することに成功した世代。この頃から本格的に量産に成功した「ゆりかご」を配備し始め直接制御の機体が増えた。また、エネルギー切れを起こさないように予備燃料のためにバイオ燃料を特殊粒子に変換した「鉢巻」や「兜」など、様々な形にして装備するようになった。

第四世代 対霊龍神器用に開発された軍のEーS専用の機体。装甲や武装には「龍神の鋼」を使用し、「永久の鋼」で作られた武装や装甲に耐え、破壊することも可能となった。また強暴という機能を搭載しており強暴発動時には疑神という力を発動でき機体の伝達率を二倍に上げ非現実的な動きを可能にしているため霊龍神器と互角に渡り合える事が可能となった。また、またレーザーやレーザガン類では「永久の鋼」でできた装甲には通用しないため「龍神の鋼」を使用した特殊弾頭を装填した重火器なども開発された。

ZT 機械恐神器 ジュラシック・タクティカルについて

DTの技術を応用して開発された人型機動兵器。第三世代のDTの開発と並行して行われた。特徴は人間の体を持ち恐竜の顔をして

いる。DTと違い恐竜の骨を分析して生み出した特殊人工骨を骨組みに使っている。また、「マンドラゴラ」にはDNMの代わりに氷の中に封じられていた恐竜のDNAを解析してナノマシーンを使って制御させた「太古の血」が流れている。太古の血は、DNMよりかは性能が少し落ちるが量産が遥かにしやすく、生物に対しても殆ど無害である。そのためZT自体もDTより量産がともしやすくなっており修理もDTよりは簡単になっている。DTと同じく燃料やコックピットにはバイオ燃料や直接制御となっている。

第一世代 DTの構造を基に試作人工骨使い動きを人間に近づけてはいるがゆりかごを搭載していないためまだGが激しく兵器としては全く使えない。この頃は、まだDNMを使っていたため人工骨との拒絶反応やシステムトラブルが激しく稼働時間は持つて10分だった。

第二世代 完成した人工骨を使い人間と同じ動きを可能にし、試作型のゆりかごも搭載されGを軽減することに成功したが未だに拒絶反応とシステムトラブルの問題は解決しておらず稼働時間も第一世代と同じく10分で兵器としての使用は出来ない。

第三世代 この頃からDNMの代わりに試作型の「太古の血」を「マンドラゴラ」に流し込むようになった。それにより、今までに起こっていた拒絶反応が少し消え、その分だけ稼働時間も伸びていった。

第四世代 完成版の「太古の血」を使い完全に拒絶反応やシステムトラブルが消えた。そのためこの世代になってようやく実戦投入されるようになった。陸戦を得意とし陸戦ならばDTを圧倒することができる。装甲には「偽りの鋼」を使用している。

第五世代 対霊龍神器用に開発された世代。DTの第四世代と同じくエース機で装甲に「龍神の鋼」を使用し第四世代のDTと互角の性能を持つ。本能と呼ばれる特殊スキルを持ち、搭乗者の精神に「太古の血」が呼応してZTの機動性を上げることができ霊龍神器と互角に戦える。

龍の巢

日本の東京と同じ大きさを持ちその中に人間が生きていくために必要なものがすべてつめこまれており、形はウミガメの用になっており甲羅の部分に町がありその町を永久の鋼で出来た甲羅で覆っている。また、この中でDTなどの兵器なども開発が可能。基本陸と水中、空中でしか活動できない。

偽りの鋼について

永久の鋼を人間が劣化して再現した物、永久の鋼は再現するのが難しく人間が手を加えて劣化させたもので兵器や町のいたる所で使われている。本家には届かないがそれでも兵器の流要請は極めて高い。永久の鋼の武器としての転用方法は龍羅の書に記されているといわれている。

永久の鋼について

けっして朽ちることのない半永久的物質でありDTやZTの装甲に劣化した物が使われている。霊獣神の力に特殊な鉱石が反応してきたとされている。兵器としての凡庸性が高く光学兵器を全て無力化することができる。

龍神の鎧について

日本が開発に成功した物質。永久の鋼により近く光学兵器も何度かなら出力に関係なく耐えられる（しかし、あまりにも強いと砕けてしまう）。永久の鋼に傷を入れることも可能である。しかし、生産が難しく第四世代DTと第五世代のZTのエース機などに使われている。偽りの鋼にある物を加え特殊な方法で加工して生まれた。

龍羅の書

霊獣神のことについて最初にコンタクトした人間たちがまとめたもの。内容は様々で霊獣神の持っていた知識や技術が記されており、また彼らの伝説が人間側の解釈で書かれている。またこの中にはとある予言も書かれているが今はまだ明かせないが全平行世界を巻き込むほどのものである。

龍と恐竜について

古に龍と恐竜の二種類の巨大生物が存在していた。龍と恐竜の違い、見た目は似ているが龍のほうには羽が生えており、強い龍には自然の一部が操られたりした。しかし、6500万年前に突如としてこの地球から絶滅した。恐竜は化石になったが龍は体の一部が繭に包まれて現代まで残っている。

第四世代 機械龍神器 DT 旋風 ジャンヌ・ドローヌ使用

第4世代型のDT。中世の騎士の鎧を纏い胸当ての部分に小麦色の羽の文様がある。全体的には銀色で黄色の細いラインが入っている。

る。バランスタイプで中距離と近距離戦闘を得意とする。また、搭乗者はゆりかごに乗っているためGをほとんど感じることなく操縦が可能。背中には小型の細長い二本の飛翔ブースターと鳥龍種の翼がついている。顔は甲冑で覆っている。見た目は中世の騎士に龍の顔と鷲の翼を背中に付けた感じです。

武装

近接用

聖母の盾×1（永久の鋼使用）

ボルテック・ランス（永久の鋼使用）

サバイバルナイフ（龍神の鎧使用）

遠距離用

雷雨3式×1

雷蓮4式×2

雷砲5式×2

特殊能力 狂暴

対人制圧用 第四世代 機械恐神器 ZT ヴェロキラプト
ル アサシнтаイプ

第4世代型の小型ZT。屋内や狭い場所での戦闘を担う役割を担っている。それぞれの役割ごとにタイプが分かれており、戦場に投入するタイプをウォーリアー、強襲や、潜入などのさいにはアサシン、遠距離からの支援や味方への援護射撃などはスナイパーとなる。装甲には偽りの鋼を使用し、量産しやすくしている。

特徴は、全て無人で、人工知能のAIで動かす場合と遠隔操作する場合に分ける。主に人員の削減を目的に開発された。大きさは3メートル弱で素早い動きが可能。陸戦と水中戦に長けている。空、宇の戦闘の場合特殊な小型ブースターの搭載が必要。今回一夏たちを襲ったのは空戦を想定したタイプである。

アサシン
武装

クナイ（偽りの鋼使用）

手裏剣（偽りの鋼使用）

鉤爪（偽りの鋼使用）

太刀（偽りの鋼使用）

小雷砲（小型特殊レールガン筒）

インフューニット・ドラゴン・ストラトス
第2世代IDS打鉄 飛龍式

打鉄を基としてDTの技術と融合させた機体。ISのコアから人工筋肉と直接連結してDNMの役割を果たしている。従来のISとは明らかに異なります、全身装甲である。またシルバリアーと絶対防御が存在しない。しかし、そこは龍人の鎧や永久の鋼でカバー

している。機動力が高く、準第五世代のISと互角に戦うことができる。弱点は背中の飛翔ブースターは前身と静止しかできないため出力を弱めたり、翼を使うことで相手の攻撃の回避や停止を行う。また、装備できる数が限られており装備可能な武装は4つと限定されている。男性でも操縦が可能。恰好は、戦国時代の武士の鎧に薄茶色の膜の龍の翼を付けた感じです。顔は機械の龍で、本人の意思で兜や鉢巻を付けれる。また口の中には炎弾と呼ばれるものが装備してあり、火炎弾を発射できる。

武装

雷蓮 4式 × 1

雷砲 5式 × 1

薙刀（龍神の鋼使用）

IDS用特殊日本刀 × 1 （龍人の鋼使用）

炎弾

これから名前を出そうと思っている霊龍神器

機空の龍神 デウス（仮）

守護の龍神 ガーディアン （仮）

舞武の龍神 アシヴァ （仮）

太陽の龍神帝 シャイニング・ファーフニル （仮）

設定集1 随時更新中(後書き)

D TやZ Tの武装はまだ考え中です。

御免なさい。

感想、指摘、意見などお待ちしております。

では、次回の更新で！！

母の思いと願い（前書き）

今回はシャルロットの母親に主人公が接触します……。

では、ぶじぞー…！

母の思いと願い

聖火は今現在、山中を歩いている。しかし、日本の山中ではない。
。。。

「あのクソ尼——————！！
」

彼は今フランスの山中にいるのだ。何故そんなことがわかるのかというと、聖火がこちらに転移してしばらく歩いていると風に乗って新聞が飛んできたからだ。

（付いてるな、これでこの世界の今の状況を確認できる。）

そう、この世界の大きかな状況はアドニアから聞いていたのだが現在進行形で進んでいる世界状況は聞いていなかったからだ。そして、飛んできた新聞に向かって空中ジャンプしキャッチした。そしてそれを開いて読んでみると。。。。。

「フランス語だな。。。。。」

使われていた文字がフランス語だったのだ。聖火のいた世界とこちらの世界では使われている文字が同じだったので聖火にも読めたのだ。ちなみに、あと英語、中国語、ハンゲル、ドイツ語、日本語などが分かる。そして今にいたる。あのドヤ顔少女の女神アドニアに向かって叫ぶ聖火の姿がそこにあった。

「畜生、あんなに自信満々に言ってた矢先にミスしてるよ。。。
、この分だと龍の巢も心配だな。」

頭に手を当ててため息を漏らしてしまった。そんなことしていても状況は進展しないのでとりあえず新聞を読んでみることにした。

聖火今現在情報を取り込み中……

ある程度読み続けて、ある程度の知識を詰め込んだ聖火は新聞をポイ捨てして再び歩き始めた。

「つまり、整理すると、今ISの量産が世界第三位のデュノア社が第三世代の開発に着手したのか。」

このデュノア社は今量産型ISの開発世界第三位だったのだ。こういう兵器を開発する会社というのはおそらく裏では、陽に当てられないようなことをしているのだろ……。そんなことを内心思いつつ歩みを止めない聖火。さっきジャンプした時に紫色の花がたくさん咲いてあった畑のような場所が見えたのでそこに行ってみることにしたのだ。

「畑があるってことは誰か人がいるはずだ……。」

そう考え行ってみることにしたのだ。

歩くこと10分、木々の間から光がもれていた。そして、さらに歩くこと5分、山中の森から抜け広い場所にたのであった。聖火の眼前には紫色の鮮やかな花の畑が広がっていた。甘酸っぱい臭いが彼の肺を満たしていく。

周りを見渡してみると協会のような建物があった。今の時刻は2時、月明かりが彼を照らして影を作っている。

「この時間にこんな男が来たら怪しむだろ……。」

それにこの目と喉は今この世界の人間に見られるわけにはいかない。そう思い名が焼き切れている喉に手を伸ばした。

（どうすればいい？）

そして自分が持っている物でこの状況を打開できるものをさがしてみた。

（今俺の手元にあるのは待機状態のディストラクションと曇龍、雷天に風天、それにその弾だけだしな……。）

他に何か無いのかと自分のポケットに手をかけた。

「んっ？」

中に何か入っていたので取り出した。

「あの人、こんなものを用意する暇があるならもつとちゃんとしてくれよ。」

それは、この状況を打開できるものであった。聖火はニヤリとほほ笑む。周りに人がいたら絶対に不審者扱いされたであろう……。そして、彼は協会に行くための支度をしだしたのだった……。

side???

私はジャンヌ・ドロウです。今娘が街の友達の所に泊まりに行っているので一人です。こんな広い家に一人なので少し寂しいです。

(もうすぐ、あの子ともお別れなのね……………)

そう、私は難病を患っておりそのせいで家から出ることができないのです。それが、原因で本当は私も娘のシャルロットと共に泊まりに行くはずだったのだが一人で行かせたです。

最初はママと一緒にじゃないと嫌だつて駄々を捏ねていたが私が何とか説得して行かせました。そう、

昨日医者に余命2か月を言い渡されたからです。もちろん娘には言っていないけれど帰ってきたら伝えようと思っています。分かっています。このことが14歳の彼女にとつていかにつらい現実か……………。けれど、私はあと二か月すれば死んでしまう。その前にちゃんとあの子に伝えなければ……………。

この日の月は私には寂しげに照らしているように思えた。あの子と一緒にこれからも生きていたい。どうして運命とはここまで残酷なのだろう……………。私は心の底から神を呪った。私は人知れず涙を流していた……………。こんな姿を、あの娘には見せたくなかった……………。

「ゴメンね、シャルロット。あなたと一緒にいられないお母さんを許してね……………」

私の夜はこうやって無常に過ぎ去るはずだった……。

一階のロビーで一人悲しみに暮れていると、

コンコン

玄関の扉を優しくノックする音が屋敷内に響いたのだった。

ハッと、私は泣くのを止めた。

(こんな時間に誰だろう?)

時計を見ってみる、針が夜の10時を指していた。

「聞き間違いかしら……。」

そう思っていると、

コンコン

また優しく扉がノックされた。

(やっぱり、誰がいる……。)

こんな時間だ、もしかしたら泥棒かもしれないと私は思い近くにあった鉄のパイプを持って玄関の前に立った。

「どなたですか？」

私は尋ねた。

「夜分遅くに申し訳ございません。私、旅の者です。道に迷ってしまつてここで一晩泊めていただけてもらえないでしょうか？」

男の人の声だ……。けれど、声が機械みたいですね……。

私はさらに不審に思った。そんなことを最初は思っていた私ですが、

（もう今更、殺されたつて死ぬのが遅いか、早いかですよね……。）

この時の私は自暴自棄になっていたもので、あっさりOKしてしまつたのです。

「わかりました、今開けます。」

「ありがとうございます。」

そして、私は鍵を開けて扉を開いた。

この時は、まだ私に知るすべもなかった。この扉の先にいるのが私にとつての救世主だったことを……。

そこにいたのは男性と思しき人物でした。黒いズボンと黒い服、黒いジャケットを付けた人物で首から目の下まで包帯をしており、黒く青いラインの入った鋭いサングラスをしている、身長180位の人物です。

「大丈夫、あなたに危害を加えることは致しません。」

機械的だがそれでも分かるぐらい優しい声だと私は感じてしまった。

「わかりました、では、中にどうぞ……。」

私はその人を家に入れた……。

sideジャンヌend

said聖火

何とか入れてもらえたか……。俺は内心物凄くホッとしていた。

(よくこんな怪しさの塊みたいな人物をいれてくれたな。)

あの後、ポケットにあった封筒のようなものがあって中にサングラスと何かの文字が入った包帯が女神の手紙付きで入ってあった。

聖火さんへ

目と首の傷を隠すためにサングラスと力の暴走を抑える包帯を入れておきます。

女神より

手紙書く余裕があったならちゃんと指定した場所に転移させてくれよと、心の中で愚痴を垂れていた。

中に入れてくれたこの女性はジャンヌという女性でブロンドヘアのとても美しい女性だ。ナンパされやすそうな外見だな……。

ジャンヌさんは、俺にシャワーを貸してくれ、上がった後、暖かいスープが用意してくれた。

ロビーは暖炉とテーブルがあり俺はテーブルに座らせてもらった。ジャンヌさんは向かいの席に座った。

「こんな見ず知らずの人間を受け入れてくれてありがとうございませう、ジャンヌさん。」

俺は口の部分の包帯を起用にその部分だけずらして飲んでいる。

「いえ、困ったときはお互い様ですよ。」

どこか、悲しげな笑顔で俺に言ってきた。

「どうして、そんな悲しい顔をするのですか？」

そう、今のジャンヌさんはとても悲しい顔、そうまるで全てに絶望したかのような感じに思えたのだ。

ジャンヌさんは、カップを両手に掴んだまま俯いていた。

「よかつたら、お話を聞かせてもらっていいですか？」

すると、ジャンヌさんは驚いたような顔で俺を見てきた。

「もし、一人に悩んでいるの第三者にいろいろな意見を聞いてみてはどうですか？」

俺は優しく語りかけた。カップのスープはまだとても暖かく湯気がホワホワとでていた。

少しの間後、ジャンヌさんは俺に自分の全てを語ってくれた……。

side 聖火 end

side ジャンヌ

私は全てをこの人に話した。全てです。家族のこと。愛人であるデュノアのこと。シャルロットのこと。病気のこと。

今まで誰にも話せず我慢していたことが一気に滝のように溢れ出したのだ。この人には、なんだか話せそうな気がした。全て受け入れてくれそうな気がした。

心の弱っていた私には抛り所が欲しかったのかもしれない。

デュノアもやり逃げだしもう私の人生は最悪だった。でも、シャルロットを産めたことが私の人生の中で最も幸せだったかもしれない。

気づいたらまた涙を流していた。もうこの感情は止められない。

あの子と一緒に生きたい

私は、前にいる男性に構わず声を上げて泣いた。

ぎゅっ

突然向かいにいた男性が私のところにきて優しく胸に抱き寄せてくれたのです。

「えっ、ちよっ!」

急なことだったので体に力が入りませんでした。

「生きたいですね。」

男性は優しく私を抱きしめてそう言いました。

私は最初は戸惑っていましたがしばらくの後に

「私はあの子と共に生きてみたいです。」

男性の胸の中で私はそう言いました。

「わかりました。」

男性はそう言いました。

「無理ですよ、私の病は医者でもお手上げと言われた難病ですから。」

私がそう言うと彼は私の目に向かってまっすぐ見つめ「そう言いました。」

「私が治してみせます。」

私と彼の出会いを後の人々は「聖母と咎人の出会い」と呼びました

母の思いと願い（後書き）

すみません。

長かったです。シャルロットの母親の名前は公式に出てなかったので私が付けました。すみません。

本編に入るのはまだ少し先です。

次回、ジャンヌさんに光を灯します。

では、また次の更新で！！

聖火の血、母の願いは籠に聞き届けられた（前書き）

聖火の血はチートです。

この血のことはまた別の話で書きます。

この話ではシャルロットの母は生きます。

やり過ぎました。

すみません。

では、さようなら……

「飲んでください。」

彼は私にそう言いました。

「これは……」

そのグラスを渡され臭いを嗅いでみた。普通のワインと同じだが若干臭いが違うのが分かった。

こんなもので本当に治るのだろうか？今まで、辛い治療をしても治らなかったこの不治の病が治るのか、私は不安を覚えてしまった。もし、この人が嘘をついていたら、これがもし毒だったら……。

「ジャンヌさん……」

そんなことを考え俯しているとふいに彼の言葉が聞こえ私は彼を見ました。その瞬間、私は思わずグラスを落としそうになりました。彼はサングラスを外してました。そして、その目を見て思いました。人の目ではない。そう、例えるなら伝説などに出てくる龍の目をしていたからです。私は思わず恐怖してしまいました。

ピタッ

彼は私の手を優しく包み私の目を見て言いました。

「あなたが誰からも見放されても私はあなたを見捨てない。だから、私を信じて欲しい。」

とても強くまっすぐした偽りのない目、しかしどことなく悲しさを秘めている目。もう、医者にも神にもすがった、しかし、誰からも見捨てられた。

私は彼に懸けてみることにしました。

その後、私はグラスの中のワインを一気に飲み干しました。その瞬間突然眠気が襲ってきたのです。私は、意識を保てずそこで眠りに落ちました。

sideジャンヌend

side聖火

「これで、大丈夫だろ……。」

俺は、眠りについたジャンヌさんに自分のジャケットをかけた。それにしても、ベタな発言だったな。自分でも思ってしまうくらいだった。

ピチャッ

俺の腕から静かに血が垂れていた。そう、さっきのワインに入れたもの、それは俺自身の血だ。俺の血は、いや俺と同じ民族の血はあらゆる傷や病、ひいては化学兵器などで精神崩壊を起こした者の心をも癒すことができる。この血とキッチンにあったワインを混ぜて飲ませたのだ。これで、もしジャンヌさんの病気に効くのなら朝には治ってるはずだ。そう思いながら血のついていない手で彼女のブロードヘアーを軽く撫でた。サラサラしていて気持ち良かったのは余談である。

その後、俺は寝ているジャンヌさんを起こさないように屋敷の外から出て、昇ってくる朝陽を眺めている。陽が森や畑の花を照らしている。甘酸っぱい臭いとひんやりとした朝の空気が俺を満たしていく。

(そういえば、あの時もこんな朝だったな……………)

泣きながら俺のことを抱き上げる自分の親友のことを思い出して黄昏していた。

「親友に見送られて死ねたなんて、俺は幸せ者だな……」

そんなことをぼやいていた。これで良かったんだよな、琴音。

小鳥の鳴き声が聞こえ朝もやのかかる畑に響いていた。

「あの……」

そう声をかけられ俺は後ろを振り向いた。俺のジャケットを上から被り立っているジャンヌさんがいた。朝陽に優しく照らされるその髪は可憐に輝いて思わず見惚れてしまいそうだ。そして、彼女は俺の方に歩みよってくる。歩き方が昨日よりはるかにスムーズなところを見ると体の方は大丈夫みたいだな。顔色もまだ眠そうだが昨日よりもかなり良くなっており、スッキリとした感じがしていた。

今まで、我慢していた不満が全て昨日の内に吐き出せたので余計に元氣そうに俺には見えた。

「具合はどうですか？」

「昨日より、体が軽くて今までであった吐き気や頭痛が消えました。」

そう、言い俺の隣にきて朝陽見ながら彼女はそう言った。

「おそらく、あなたをむしばんでいた病は完全に消えましたよ。」

俺がそう言っていると彼女はまた驚いたように俺を見た。

「もし、心配なら医師に診てもらえばいいですよ。」

そう言われ彼女は目に溢れんばかりの泣みだを浮かべていた。

「あなたの願いは、龍に聞き届けられたのですよ。」

俺は優しく彼女に微笑んだ。

「何故、そこまで私のためにしてくれたのですか？」

彼女は溢れる嬉し涙を抑えて俺に尋ねてきた。

side 聖火 end

side ジャンヌ

私には、わからなかった。どうして、見ず知らずの私にここまで

してくれたのか。そうして私が彼に尋ねたとき彼はこう言いました。

「困ったときは、お互い様って言ったのはあなたですよ。ジャンヌさん……」

彼は優しくまた私に微笑んでくれました。その瞬間、私は彼に抱きついてしまった。デュノアにもこんな優しく言われたことがなかった。生まれて初めて、父親以外の男性にこんな心の籠った言葉を言われたことが嬉しくてたまりませんでした。私は彼に構わず彼の胸の中でまた泣きました。

すると、彼は優しく私の頭を撫でてくれました。

そして、あのワインについて尋ねた所自分の持っていた秘薬をキツチンにあったワインと混ぜたらしく、どんな病でも治す力があり予備が手元にあったから使った言いました。私は彼に深々とお礼を言いました。あと、この薬については争いの火種になるので黙っていて欲しいと言われました。

「それに……」

そう言うと私を抱くのを止め私を見つめてどこか遠く見る目で私に言いました。

「あなたを助けたのにはもう一つ理由がある……」

「それは……」

次に彼が発した言葉に私は驚愕しました。

「目の前で親に死なれていく子供の気持ち分かるからです。」

その後、彼の過去を少し聞きました。7歳の頃に彼がいた国で戦争があつてその時に両親を失つたそうです。父親は、国を守るために死んで母親は敵の兵士に捕まり彼の目の前で辱めを受け惨殺されたそうです。彼は無理やり押さえつけられ目を閉じれず、その光景をただ叫びながら見続けることしかできなかつたそうです。

「その時の私はただ「母上、母上」と叫ぶことしかできませんでした。」

私は目の前にいる彼がそんな過去を経験しているなんて知りませんでした。思わずあいた口が塞がりませんでした。しかし、それからあの目にした悲しい感じも少し納得しました。

「だから、あなたの子供のシャルロットちゃんと同じ思いをさせたくないんです。」

彼はそう言うとお畑の中心に向かってゆっくりと歩きしばらくして私の方に振り返りました。すると、彼の胸のあたりからまばゆい閃光が放たれました。私は、思わず目を閉じてしまった。

ズーン

と静かですが何か音がしました。そして、何かの気配を感じ目を開けてみるとそこに信じられないものがいたのです。

顔は龍で二本の白い角、昔の日本にいたサムライという戦士と同じ格好をして所々青いラインが入ってある鎧と黒いマントを付けた巨人がいたのです。

私は、直感で彼だとわかりました。そのおぞましい外見とは裏腹にとっても優しい目をしていましたからです。すると巨人は、私の前に手を出し、そこから何かを落としました。

「なんでしよう……」

私は地面に黄色く光る物体を見つけそれを手に取りました。それは、黄色い日本にある勾玉というものでした。

「あなたが助けを求めたときそれに念じてください。」

巨人から彼の声がしました。そして後ろを振り返りまた朝陽に向かって歩き出し、彼が歩くたびにズシンズシンと音がしました。

「教えてくださいっ！あつ、あなの名前は何とこののですか！！」

彼がいなくなることを悟った私はあわてて彼に尋ねました。

「そうですね、いろいろごたごたしては言っていないませんでしたね。」

彼はそう言うひと呼吸をいれ言いました。

「わたしの名は、聖火・バジル・オーガです。」

そしてその瞬間風がぶわっと吹いて私は思わずあとずさりしてしまいました。そして、目開けたとき彼は空中に浮かんでいました。

「私とあなたのことは内密にお願いしますね。」

「また、会いましょう。ジャンヌさん、スープおいしかったです。お体に気を付けて……。」

そう言い終わると彼はマントをはためかせ朝陽に向かって飛び去って行きました。

私は、彼が消えるまでその光景を眺めていました。

「私は、忘れません。この恩を絶対に、ありがとう。聖火さん。」

彼が消えていった先を見て私は眩きました。

今日もいい天気になりそうですね。愛するわが子の名を思いながら私は屋敷に戻っていきました。

聖火の血、母の願いは龍に聞き届けられた（後書き）

次は、龍の巣に行きます。

しかし、ただで行かせてもらえる筈もなく途中で大変な目に遭う聖火です。

では、次回の更新でお会いしましょう!!

感想、指摘お待ちしております。

龍の巢、珍客来訪（前書き）

こんな、作品でも読んでくれる方、本当にありがとうございます。

感謝、感謝です。

これからも、このマダオ作者とこの作品を宜しくお願いします。

では、どじぞー！

龍の巢、珍客来訪

えー、みなさんこんにちは。聖火です。

あの後、私は、デイストラクションに女神が付けていてくれた新機能の陽炎（高機能のステルス）を使って日本まで飛んで来たのですが女神がくれた座標に龍の巢がなく、もともとこの機体に着いている龍の巢の反応を調べた所、沖縄の海にあることが分かり、再び沖縄まで飛んで龍の巢のある場所に向かって潜っているんですが、

一言だけ愚痴を言わせてください。

「よりもよって、どうしてサメがウジャウジャいる海に転
移させてんだよ!」

絶賛、サメに追われ中です。

なぜ、こうなったかいうとあの後沖縄まで飛んで何とか龍の巣が沈んでいる場所に着き潜ったのはいいですが潜った途端にそこにはサメのパラダイスが広がっていたのです。

陽炎発動時には戦闘することができなかったので全力で逃げてください。

その上、この陽炎はISの時にしか使えずシールドエネルギーを代用して使っているのでそろそろやばい。今、この機体の存在をばらすわけにはいかなかったので陽炎を切れない。

しかもサメはかなりの数で、何故か透明になっているディスプレイストラクションのことが分かっていて襲ってきたのだ。おそらく、ディスプレイストラクションに染みついていて血の臭いに反応したのであろう。

「畜生、あの尼今度会ったら絶対しばいてやるーーーーー」

聖火がサメと楽しい鬼ごっこをしていた頃天界で仕事をしていた、少女に寒気が走ったとか……。

ここで、聖火が鬼ごっこをしている間、このダメ作者のマダオが龍の巣について解説いたします。

聖火の住んでいた地球はこの世界の地球の五倍の大きさがあり（大陸などそのまま五倍に大きさにした感じですが）、その中のエルドラという国が秘密裏に作っていた移動要塞都市です。

外見はウミガメと同じで、甲羅の部分に街があります。

大きさはISの世界にある東京都と同じ大きさで山、海、川などの自然があります。

霊獣神たちが遺したとされる、古代の壁画を基に作られ、自立AIのウラシマがこの管理をしており、街や自然などを維持している。聖火が何かを理由に封印していたので現在は無人である。

長々と失礼しました。

side 聖火

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

聖火です。あの後何とか海底にあった龍の巢に命からがらたどり着きいま浜辺近くの海に立っているのですが、少し呆然としています。

「「きゅ～～～ん」」

その原因は、こいつらです。白色の皮膚に可愛らしい顔をした二匹の生物。どうやら、親子らしいが、

「これって、たしかジュゴンってやつだよな・・・・・・・・。」

かつて、自分の大切な人と行った水族館にいた生き物で彼女が可愛いと連呼していたのと同じ生き物なのだ。

「へ迷い込んだんだろう。」

この、龍の巢内の海は時々水を入れ替えクリーンにして生物が住みやすい環境にするのだがその時に迷い込んだのだろう。普段はサ

メなどの危険な魚類あとシヤチなど肉食哺乳類などは取り込まれず、そのまま放出されるのだがこいつらには反応しなかったみたいだ。

ひとりあえず、元の場所に返そうかな……。

なんだろ、俺がそう言った瞬間こいつらすぐく上目遣いしてきた。こいつったものに対してかわいいと世間では言うのだろう。キラキラ光る目で見つめるジュゴン。

もしかして、ここが気に入ったのか？

そう、ここには海洋ほ乳類や小魚の餌になるプランクトンや海藻、その他もろもろが豊富にあるのだ。すると、ジュゴンの親子はそれを肯定するかのごとく俺の足に口をくつつけた。

プニユツと柔らかい感触が海水の中の足から伝わってくる。

困ったな。

たしか、飼育するのに許可とかなんかいるんだよな……。

しまっ、ばれなけりゃいいか……。

そう言いながら開き直った俺は目の前にいるジュゴンの親子を軽く優しく撫でた。

「居てもいいが、排水する部分には近づくなよ。」

俺はその部分に向かって指さし、ジュゴンたちに言った。何故か俺の言葉が分かるらしく尾びれをバタバタ揺らして返事(?)をした。ちょうどいい温度の海水がビチャビチャと俺に散ってくる。

ホント、嬉しそうだな。ジュゴンたちの喜びように若干引いた俺であった。

その後、ジュゴンたちと別れて籠の巣での俺の家に向かった。浜辺の近くにあったのでさほど時間はかからなかった。ジャリと砂浜を歩きたびにそう音がする。

懐かしい感触を踏みしめながら、家の前へと少しだけペースを遅くして歩いていく。俺の通った後に出来た足跡を波が優しく消していった。

「この家に来るのも久しぶりだな……。」

そこは、西洋風に建てられた小さい屋敷であった。そこは、かつて聖火が隠れ家として使って家だ。玄関の扉を開け中に入って行く。

中はとても質素なもので必要最低限の物しか入っていない。けれど、ここで聖火は多くの仲間や愛する者と共に笑い、過ごした日々があった。聖火は少しだけ埃の被った廊下を歩いていく。ミシミシと微かだが音がする。

「若干、壊れてるか？・・・今度修理でもするか。」

少し古くなった、廊下の修理を考えながらロビーへの扉を開ける。

この屋敷のロビーは浜辺を一望することができ、見晴らしがとても良い。

部屋の真ん中にソファとテーブルなどが置かれている。

木製のものが多く木の香りがほんのりただよっている。そんな中、タンスの上などに飾られて写真縦に俺は手をかけた。

「あいつ等、今頃何してんだらうな……」

そこに移っていたのは、聖火を含めた四人の男子。みんな、笑顔で映っていた。一人は、銀髪の長身でもう一人は深緑の髪で聖火と同じぐらいの背。

そして、後の二人は赤い色の髪のやんちゃそうな少年とブロンドヘアの目がキリツとしている少年だ。全員見た目は18歳くらいに見えた。そう、嘗て共に命を懸けて戦った戦友たち。

「俺だけが生き残ってしまったな……。」

全員、戦って命を散らせたが、俺は生かされて此処にいる。

（待っていてくれよ、役目を終えたら俺も……。）

決意を固め、俺は静かに写真縦を置いた……。

俺はその後ロビーの床に隠してある扉をあけ地下に続く階段を下りて行った。

「懐かしむのは、後だ。まずは……………」

カンカンと鉄の階段を下りる音が静かな通路に物悲しく響いていた。

そして、暗い階段を下りていき狭い通路に着いた。俺はその妙にかび臭い通路を少し早い足取りで進んでいく。しばらくすると、頑丈な扉が立ちふさがった。

「パスワードをどうぞ」

機械的な音が扉から聞こえる。

「咎人よ、龍であれ……………」

そう、この言葉はかつての戦友たちと共に決めた言葉である。俺

たちには、案外あつてるかな。そんなつまらないことかながえていと……。

「パスワード、認証しました。」

ブシュー

頑丈な扉が開けていく。俺は薄暗いその部屋へと入って行く。

俺が入って行くと同時にパーと明かりがついていく。中には、たくさんモニターや、パソコンなどの機材が並べられている。そのため室内はかなり広い。

この部屋は俺の屋敷の地下にある、この龍の巣の中枢などが詰まっている。ここで、各国へのハッキングでの情報収取や、龍の巣の管理、DT・ZTの製造工場の運営などをおこなっている。(普段はウラシマにまかせっさり。)

ひ起きろ、ウラシマ。い

そう俺が声を発すとモニターに一斉に電源が灯る。

「おはようございます。マスター指示を」

モニターから自立AIのウラシマの声がした。

「この世界の状況を知りたい。各国の裏事情や情報を集めてくれ。」

「わかりました。各国へのアクセスを開始します。しばらく、お待ちください。」

その後、ウラシマが各国の情報を表示してくれた。相変わらず優秀だ。

しかし、「キール」に関する情報は今の所ゼロであった。

「敵はまだ動いてないか……、引き続き情報を集めてくれ。」

「了解しました。」

今はまだ大丈夫だな、少し安心した俺であったが不意に一つのデータに目が止まる。

「ウラシマ、22番のデータを詳しく出してくれ。」

モニター画面にあるデータが映し出される。そのデータはデュノア社による試験段階の第三世代の稼働実験だ。つい最近に完成したらしくその起動実験らしい。

（二週間後か、敵が動くならこの時だろう。それに、もしかしたらジャンヌさんの病気が治ったから出席しているかもしれない……）

・危険だな。)

「ウラシマ、龍の巣をフランス沖の大西洋に移動させてくれ。全速力で頼む。ステルスモードを維持したままだ。」

「了解しました。これより、龍の巣は大西洋に向かいます。」

ズーン

大きな音がし、移動するような感覚がした。龍の巣が移動を開始したのだろう。

何故俺が、この実験に目を付けたのはデュノアの今の現状である。デュノア社は今第二世代のISの量産機が世界第三位だ。

しかも、そのISラファール・リヴァイブはとても質が良く実戦向きだ。それを開発した所が第三世代、まだ試作段階だがそれでも各国いや、テロリストが欲するに違いない。

もし、敵がこの世界での「キール」以外の戦力を欲するならまず食いつくだろう、そう推測したからだ。

それに、ジャンヌさんのことを聞いたらデュノアが何をするかわからない。

それに、彼女は優しい、もしかしたらまだ、デュノアに未練があるかの知れない。

「ウラシマ、DT製造工場の第四世代DTで二週間以内に戦闘に出せる機体はあるか？」

「メンテナンスをすれば、第四世代DT」

「

」が出せます。

「不測の事態が生じた場合の時のために、由義斗様から命令され製造しておきました。」

「試験段階はすでに終了しています。」

（由義斗の奴、俺に内緒でそんなことしてたのか。でも、今は恩に

着るぞー！！）

死んでいった、嘗ての戦友を思った。

「備えあれば憂いなしってことだな。」

どこからか、あいつの懐かしい声がしたような気がした。

「分かった、」
「のメンテを大至急済ましておいてくれ。」

「了解」

さあ、俺の予感が吉と出るか凶とでるか。できれば、何も起きて欲しくないけどな……。

（俺も戦う準備でもしておくか。）

俺はその後、ウラシマに全てを任して部屋を出て行った。

DTの存在は二週間後、「黄金の風」という事件で世界という名の表舞台に登場することになる。

一方、龍の巢のいる座標の海上で一人の人参が浮遊していたとか
.....

龍の巢、珍客来訪（後書き）

今回は戦闘に入ります。

「の中身は次回明らかになります。」

ヒントは風の名前です。

次回、オリ展開です。

すみません。

けれど、皆様が楽しめるように頑張って書いていきます。

聖火の戦友のことは、いつか書きます。

戦闘描写は難しいです。

では、また次回の更新でお会いしましょう!!

感想、指摘お待ちしております。

できれば、オブラートに言ってくれれば幸いです。

黄金の風（前書き）

今回は、初の戦闘描写ですが短いです。

すみません。

DT無双です。

ごめんなさい。

それでは、どうぞー！

黄金の風

sideジャンヌ

燃え盛る火の海の中に今、私はいます。

聖火さんが私の家から飛び去っていった日の夕方にシャルロットが帰ってきて思いつきり抱きしめました。

「ママ、痛いよ。」

苦笑いしながらそう言われたが、この子とまた一緒に生きられることが嬉しかった。その次の日に普段自分が見てもらっている病院とは別の病院で診てもらい体に異常が見当たらないと言われ改めて自分は生きられるんだと自覚しました。

しかし、その日の夕方にデュノアに会ってしまい、少し強引気味に食事に誘われました。正直、もう決別しようと思っていたのでその時言おうと思いませんでした。

その後、決別するための条件にデュノア社が開発した第三世代のISの試験運転を提示されたのだ。私は、まだデュノアと関係が良かった頃、よくこんなことをたのまれていた。私のIS適正はAで国家代表レベルでした。

その位なら、少し考え了承しました。そして、当日私はシャルロットに家で留守番をするように伝えました。

「僕も一緒に行きたい!!」

と言いましたが大事なことから、と言って説得しました。

その後、デユノアの試験場に一人で行って第三世代の試験を行っていたのですが、突如テロリストらしき集団に襲われ、私は局員を逃がすために時間を稼ぐことになり今に至ります。

「ここまでのようだな。」

敵のISは全部で4機、近接型と長距離型の打鉄とラファール・リヴァイブです。私もこの第3世代のまだ名前のないISで応戦しましたが相手の技量が高くしかも4人が相手なので私でも持ちこたえるので精一杯でした。

「そのISをこちらに渡して貰う。」

「断ると言ったらどうなるのですか?」

「貴様我々の姿を見た以上死んでもらうだけだ。」

「選択肢が死しかないですね。」

しかし、私のシールドエネルギーは既にゼロ、どうすれば……。

今の私は、ボロボロの状態で地面に這いつくばっており、もう満身創痍だった。

そして、それを見下すような目で見降ろすテロリストたち。

典型的なパターンだが、命の危機には変わりのないことだ。もう私にできることはなにもない。フランスからの援軍も来るだろうが間に合わないだろう。

私はあきらめていたが

「あなたが誰からも見放されても、私は見捨てない。」

不意に聖火さんの声が脳裏に浮かぶ。あの日絶望の淵から私を救ってくれた人。そう思い、わたしは懷に持っていた勾玉を出して握りしめた。

テロリストたちが私の頭に銃口を突きつけた。テロリストの何人かがわたしを見て嘲笑っていた。

「最後に言い残したいことはあるか。」

テロリストが冷酷にそう言うがわたしは既に答えられるほど体力は残っていないかった。

「素直だな、いい子だ……。なら死ね。」

テロリストがライフルの引き金を引こうとした。

私は、まだ死にたくない。心の中で生きたいという願いが湧き上がってくる。シャルロットとこれからまた一緒に笑ったり、泣いたりしていきたい。

助けて、聖火さん……。

あの人の顔が脳裏に浮かぶ。情けないと言われても構わない、かつこ悪いと言われても構わない。私は持てる限りの力をふり絞ってあらん限りに叫んだ。

「聖火さん、助けてくださいっ!!!!!!!!!!!!!!」

その人は死なせない

すると、何処からともなく声がした。

「っ、誰だ！！姿を見せろっ！！」

テロリストの一人がそう叫ぶ。しかし、周りを見るが戦闘のせいで壊れた建物とそれから上がる火の手しかない。

ズシーン、ズシーン

突如地面に微かだが力強い振動を感じた。そう、まるで巨大な何かが近づいてくるかのように……。すると、火の手が一番強い所から……、

「グウオオー………!!!」

叫び声とともにそれは現れた。中世の戦士のような全体を銀に記帳した鎧を身にまといその鎧の所々に黄色の羽の文様の龍の戦士。腰には剣がさしてあった。さらに所々に、機械を思わせる部分がいくつもあり、サイボーグのような感じだった。しかし、問題はその大きさだ。全高ゆうに20mは超えてまるで、あの時の巨人のようでした。

「なんだっあのISは!!!」

「敵の増援かつ!!!」

「それとも、デュノア社の新型化かつ!!!」

「それより、あれはISなのかつ!!!」

テロリストたちは突如現れたイレギュラーに慌てていた。敵の援軍などシミュレーションは既に済ませてあったテロリスト達だが、得体の知れない物が目の前にしかもそれは、明らかに異質なものの介入は想定していなかったのだ。

「その人をやったのは、あんたらか……」

巨人から、私が待ち望んでいた人の声が聞こえたが、その言葉には、明らかに怒気が含まれていた。

「貴様一体、なにm」

「その人をやったのはあんたらかって聞いてんだ、三下。」

いつもの丁寧な口調ではない、明らかに殺意を向けた言葉を発していた。さらに、巨人がその言葉の威圧感をさらに強固なものにしていた。

「だったら、どうだって言うだ？お前には関係のないことだろ！」

テロリストの一人が虚勢を張るかの如く言った。

「その人は俺の友人だ。返してもらっぞ。」

そして、聖火さんはこちらに向けて巨人を歩かせてくる。炎をバツクに揺らめくその姿、まさに地獄からの使者のように思えた。テロリストたちも私と近い感情を抱いてるはずだ。

「そつ、総員！！あいつを殺せつ！！！」

リーダー格の人がそう叫び近接型の二人は背中のスラスタ―を全開に吹かせ、巨人に切りつけていく。

- 聖火さん、危ないっ！！

しかし、私の考えとは裏腹にその切りつけたブレードが巨人の鎧に当たった瞬間

バキンッ

と、二人のブレードが火花を散らせて簡単に折れたのだ。

「そんなっ!!」

「ウソだろっ!!」

私を含めその場にいた人間は全員が驚いている。ISの近接ブレードがいつも簡単に折れたのだ。その切りつけた二人は一瞬だけ動揺してしまっただけですが、それが命取りとなりました。

「こんなものか……」

そう声が巨人から発せられ現実に引き戻されテロリストであったが時すでに遅く、二人が同様している間に巨人が手を伸ばし二人を

素早く拘束していた。その、動きはまるで本物の生き物の動きのように滑らかで俊敏でした。

「「グアッーーーーー！！」」

片手に一つずつISを持ち握りつぶしていく巨人。ギシギシと音を立てて悲痛な叫びをあげるテロリストたち。

バシユッ

すると、長距離型のリーダー格ともう一人のライフルが火を噴く。

カンカン

しかし、その弾は巨人の鎧を砕くことはできず空しい音を立てながら全て弾かれる。そして、握られていた二人は、一人は地面に叩き付けられる。

ドゴーーーーンッ

物凄い音を立てて地面に叩き付けられ地面にクレーターができる。クレーターから土煙がモクモクと上がる。

「マジかよ……」

「ウルフ、撤退だ！！これ以上の戦力消耗はまずいつ！！」

リーダー格がそう告げ二人は仲間を置いて逃げようとするが……

「逃げれると思っているのか……」

そう言うつと聖火さんは、もう片方の手に握っていた人を逃げる二人に向かっておもいきり投げつけた。物凄い速さで投げつけられたISは、リーダー格の横を飛んでいたもう一人のISに当たり、爆炎を上げた。そのまま、二人は絶対防御を発動しながら地面に落ちていく。

リーダー格は、爆発の余波を受けスラスターがやられたらしくよろよろと速力を落しながらなおも逃げようとするが……

「す、凄い……」

この間、わずか10分。世界最強の兵器は、無残に大敗を喫した。そう、龍の顔を持つ一体の巨人と聖火さんによって。

私の意識はそこで途切れていった。

side ジャンヌend

side 聖火

俺は、戦いを終えたあとジャンヌさんをコックピット内に運んで
応急手当をした。

「この第四世代DT旋風。ジャンヌさんにも使ってもらおうか。」

コックピットであるゆりかごの中で操縦しながら俺の胸の中に頭を埋め寝ているジャンヌさんを見て思った。

ひとりあえず、早く龍の巢へ戻ろう。

俺は旋風の龍の羽を広げたと同時に背中の飛翔ブースターを全開にしてその場を離脱した。もちろん、ステルス機能を発動させてだ。

この姿を遠くで観ていた者が黄金色の物体が演習場から飛び立った時の光のあまりの美しさに思わず見とれてしまったとか……。

黄金の風（後書き）

如何でしたでしょうか？

自分の文才の無さになえています。

グスン

けれど、こんなものでも見てくれる方がいるので頑張れます。

本当に、いつもありがとうございます。

次で、原作までの道は終わりです。

それでは、次回の更新でまた会いましょう！！

感想、指摘お待ちしております。

そして聖母は咎人と密約を交わす（前書き）

今回で原作への道は終了です。

後半になるにつれて駄文になります。

すいません。

では、どござー！

そして聖母は咎人と密約を交わす

あの後、聖火はジャンヌさんをコックピットに入れ一直線に龍の巢へと飛びさった。ジャンヌさんは、頭が微かに切れていたが後は軽い打撲だったのでコックピット内で応急処置をほどこした。

何故聖火は今回の戦闘において、ディストラクションではなく第四世代のDT旋風を使ったのか。

ディストラクション
霊龍神器があまりにも強力過ぎるからだ。さらに、ISのデーターはある程度ウラシマの情報から得られたが、実戦においての実力は未知数だった。もし、鹵獲でもされたら一大事であるからである。

それに、彼自身、旋風の実戦データーが欲しかったため、それら
のことを想定しての選択だった。しかし、その選択が功を奏し、彼はISとDTにおける戦闘データーを取ることができさらに、旋風の実戦データーも取れの大収穫だった。

さらに、ジャンヌさんを手当していたときに懐からデュノア社の開発した試作型第三世代機のISが待機状態で出てきたので、彼は、

帰ってすぐに解析しようと思った。

龍の巣帰還後、彼は龍の巣をすぐに太平洋に移動させた。追っ手はステルスを発動させているため来ていない。

彼は、自分の隠れ家である家にジャンヌさんを運び改めて手当をして、寝室にあるベットに寝かせました。

その後、ラボに向かい彼はウラシマに持ち帰ったデータとISを渡し解析させた。目的は、ISの能力でDTやZTに流用できるものはないかということだ。

side 聖火

ウラシマに解析させたところ、絶対防御は無理だが機体の量子化や、その他武装は流用可能だそうだ。ISのコアはブラックボックス化され解析できないそうだ。俺は、さっそく第三世代DTと第四世代ZTにISの機能を導入させるため、実験をスタートさせるように伝えた。

しかし、問題は専門的なDTやZTのメカニックがないことだ。いくら部品だけ生産しようと組み立てたり整備したりする人がいない。

「どうするか……」

俺が困り果てていると、

「聖火さん、聞こえますか？」

突然、室内の一つのパソコンの画面から声がした。

「その声、アドニアか……」

その後、画面が少し歪みアドニアが映し出されたが……

「そのタンコブはどうした・・・。」

アドニアの頭にはでっかいタンコブができていた。

「うー、あなたの転移やその他もろもろが失敗したので上司の神に拳骨をくらいました。」

涙目になりながら俺に言ってくるが

「ごまあみやがね。」

俺はそっけなくアドニアに返す。

「ひどいですよ、聖火さん。」

さらに、涙目になって訴えてくるアドニア。てゆーか、神に上下とかあったんだな。

「やかましいは、あんたのせいでこっちはえらい目にあっただ。当然の報いだよ。」

「~~~~~」

ついにアドニアはいじけてしまった。おい、そんなので大丈夫なのかよ。神の仕事とやらは……。

「それで、何か用があつて連絡したんだろ。」

「そうでした、いじけてる場合ではありませんでしたね。」

その後俺は、真剣な表情になったアドニアから上司の神の伝言を聞かされた。

其の1、キールを持つ敵がかなり強力な力を持つてること。

其の2、そのためそちらに必要な物資、人員（聖火のいた世界で今でも生きている人間に限る）の用意 などは天界がすること。

其の3、これからは、アドニアと連絡できること。

其の4、敵が動き出すのが3年後ぐらいだということ。

其の5、敵の目的はこの世界の人間をキール感染者にすること。

ありがたい、俺は直ぐにメカニックの人員を要求した。その後、アドニアから2週間かかると言われたがそれぐらいなら大丈夫だと思いを解した。

俺は、アドニアからの連絡を聞いた後、浜辺に来ていた。

今の龍の巢は海上に浮上し通常のステルスモードからシールドステルスモードに切り替えていた。

このモードは、植物の生長を促すために生まれたもので、龍の巢の周りに特殊なシールドを展開する。このモードは中から外の景色は見えるが外からは全く見えることはない。

しかし、このモードは海上にいるときにしか使えない。また、街の天蓋である甲羅を収めるので街がむき出しになり、防御力が低下する。

そのため、こういった平穩時にしか使えない。さっきウラシマからのデータでこの世界での科学力ではこのステルスを見破れないそうだ。

今の時間は夜中の2時。空には満天の星が浮かび潮風が心地よく吹いていた。今の海はとても穏やかで静まり返っていた。

(今回の戦闘でDTのことがおそらく世界中に知れ渡っただろう。)

そう、今回の件でDTの存在は世に知れ渡った。ISという世界最強の兵器を軽くあしらった新たな勢力として。

世界はこの力に畏怖し、また欲するであろう。

今頃は、世界は旋風を血眼になって探しているであろう。

これは、必要なことだった。敵が強大でなおかつキールを使ってくるからだ。

さきの戦闘で分かったがDTと互角に戦うことのできない今のI Sではキールに立ち向かうなど自殺行為だ。

いくら絶対防御があるとはいえそれは一対一なら確かに有効だろう。しかし、一対多という戦場ではおもちゃ同然だ。

シールドエネルギーがゼロになって地に落ちたらキメラに食い殺されるのがオチだ。

しかも、現在のISのコアは467個。つまり、それだけの戦力でもし1万のキール感染者の群れが攻めてきたら全滅は免れない。

もし、そうになったら確実にこの世界の人間は滅びてしまう……。

砂浜に波がザザーと打ち付けていた。

「させない。」

今の世界で勝てないなら、俺が導いてみせる。

このISという偽りの変革で歪んだ世界をぶち壊し、新たな変革をもたらす。

「救えなかった多くの命や死んでいった英霊たちとの約束のためにも護ってやりたい。」

これからの道はまさに茨の道だろう。けれど、俺は歩き続ける。

この世界の子供たちの未来は俺が必ず護って見せる。

もう二度と、奴らから奪わせない。

俺は、満天の星の海に向かって両手を伸ばして死んでいった者たちに再び誓った。全てを失ったあの日のように……

「聖火さん。」

俺が、そんなことをしていると後ろにジャンヌさんが来ていた。真剣に考えに耽っていたのでまったく気づかなかった。

sideジャンヌ

「ん……、ここは？」

私が目覚め目を開けたとき空ではなく天井が見えました。私は、どうやら助かったらしくベッドで寝かされていました。

「とにかく、ここが何処だか確認しないと……」

私はそう思いベットから立ち上がると体に鈍い痛みを感じました。全身に軽い打撲があるようです。

そして、頭には包帯が巻かれていました。

私は、フラフラと部屋から出てロビーらしき場所に出ました。

「嘘でしょ……。」

ロビーから見たのは海と浜辺だったので。あの、場所から海は遠かったはず。

私はその場所を不思議に思い家から外に出ました。周りを見渡すと街が広がっていました。

私は、そんな街や周りを見ながら浜辺に向かいました。

すると、

「させない。」

突然浜辺から聖火さんの声が聞こえた。

(聖火さん?)

その後、聖火さんを見つけ後ろからそっと見つめました。

これからの道はまさに茨の道だろう。けれど、俺は歩き続ける。

この世界の子供たちの未来は俺が必ず護って見せる。

もう二度と、奴らから奪わせない。

聖火さんが何か重大なことを言ってるように思えました。そして、私は彼に声をかけました。

Side 聖火

聞かれてしまったか、内心そう思った。

「いつから、そこにいましたか？」

「え」と、聖火さんが両手を空に挙げたあたりから……………」

「聞かれてしまいましたか……………」

ジャンヌさんが肯定することく無言で頷いた。

「そうですね……………」

俺は遙か向こうの水平線を眺めながら言った。

もう隠しても無駄だな……………」

俺はジャンヌさんの方を振り向いた。ジャンヌさんは頭に包帯を巻いてまだ覚束ない足取りで俺に近ずいてくる。

そして、すぐ傍に来たジャンヌさんに話した、俺のことを……

side 聖火end

side ジャンヌ

聖火さんのことを聞いてあいた口が塞がりませんでした。

けれど、あの巨人、DTとゆうものですか、あれを見ているので幾分か呑み込めました。

異世界から来たなんて普通は信じません。けれど、彼が嘘をついてる目ではなかったからです。

なにより、二度も命を救ってくれた恩人を疑いたくはなかったからという理由の方が大きかったからです。

「ジャンヌさん……。」

「あなたを、巻き込んでしまつてすいませんでした。」

すると、彼が私に向かって頭を深く下げ謝罪しました。

「あなたを、フランスの家に帰します。少し待っていてください。」

そうして、私の肩を軽くポンと叩きどこかに行こうと歩き出しました。彼は今にも消えてしまいそうなそんな感じが漂っていました。

このまま、彼を見捨てていいのだろうか？

二度も、私の命を救ってくれた恩人を。

彼はこれから命を懸けて戦おうとしている。

自らの命を失ったとしても、例え悪魔だと罵られようと。

気が付く、私は彼を後ろから抱きしめていました。

「じゃ、ジャンヌさんッ！ー！」

彼は、私の行動に驚いていましたが私は構わず彼を抱きしめ続けた……。

「聖火さん、どの道私は今フランスでデュノアによって第三世代の情報を隠すために死亡扱いにされているはず……。」

「本国に戻ったところで、彼に殺されるだけです。なら、私はこのままあなたと共に行きます。」

そのことを彼に言った。彼は私の方に振り返り言った。

その目はとても今までにないくらい真剣な目でした。

「けれど、あなたは血にも罪にも塗れておりません。」

「それに、シャルロットちゃんはどうするおつもりですか？」

たしかに、残されたあの子が心配です。でも……

「あの子は、IS適正が高いですから迂闊に殺したりはしないはずです。」

「もしもの時は、私が連れ戻します。」

「それに、あの子は強いですから。」

私は、笑顔で彼にそう言った。私は、彼が何を言おうと退くつもりはありませんでした。

「わかりました。」

しばらくして、半ば諦めたような感じで彼はそう言いました。

「けれど、あまり無茶はしないでくださいね。」

「わかりました。」

私がそう言うと彼は苦笑いで返しました。

いつの間にか夜が過ぎ去り、陽が昇ってきました。今日もいい天気になりそうです。

私は、聖火さんに歳を尋ねた所、19歳と彼は言って驚きました。

私より、年下なのに遥かに大人びている感じがしていたからです。

それほど、辛い道を歩んできたのでしょうか。私は、彼の顔に目を向ける。

別に私は年下でも……って私はいったい何を考えているんでしょう／＼／＼／＼／

その後、私が、彼の横でモゾモゾしている光景を聖火さんは不思議そうに眺めていたそうです。

これから、さらに混沌とした時代が訪れるでしょう。

けれど、私の愛する娘は絶対に護りぬいてみせます。

たとえ、誰かを討つことになっても。

あの子が幸せに生きられるなら。

私は戦います。

この日、聖母と呼ばれるようになる者と咎人との間で密約が交わされました。

sideジャンヌend

その後、彼は二年間、イレギュラーと戦ったための準備をしました。

その過程で世界を回り沢山の人と出会いそして、仲間になったりしました。

ISのせいで翼を失った者たちに光をあたえ、孤児になっている子供たちを受け入れたり二年間はあつという間に過ぎ去って行きました。

けれど、そのおかげで沢山の信頼できる友が彼にはできました。

しかし、ここで想定外の事態が起きました。

男でISを使える者が現れたのです。

そして、龍はついに陽の当たる場所へとスそのページを移していった。

そして聖母は咎人と密約を交わす（後書き）

如何でしたでしょうか？

設定を少し変えます。（聖火の年齢）

すいません。

許してください。

次回から原作介入です。

一夏のハーレムは崩しません。

ジャンヌさんは一応フラグです。

では、次回の更新で！！

感想、指摘お待ちしております。

龍である咎人は若き騎士に出会う（前書き）

聖火がIS学園に転入します。

文才がないです。

ごめんなさい。

では、どうぞー！

龍である咎人は若き騎士に出会う

side 聖火

俺は今、とてもでかい建物の門にいる。ここは、日本のIS学園だ。俺が何故ここに来たかという初めの男性IS操縦者である織斑一夏を護るためだ。

イレギュラーは、特異体質である彼に介入行動を行う恐れがあるため彼を護るために秘密裏に戸籍を作り学園に入学することになったのだ。

もちろん各国も俺の存在を提示すると騒いだがそこは各国の秘密を餌にお願いという名の脅迫をかけたので大丈夫だ。

(それにしてもやはり兵器を扱う学校だけにデカいな。)

このIS学園は、あらゆる外的勢力を受け入れないまさに一つの要塞だ。そんなところに通える学生が少し微笑ましいな。俺は、真面に学校に行けたのは高校ぐらいだからな……。

「すまない、待たしたか？」

不意に声をかけられ現実に戻る。

俺の目の前には黒髪のロングでスタイルが良く鋭い吊り目に黒いスーツをした女性が目に入った。

彼女は俺の姿に少し違和感を示していた。

当然だと思う。何しろ包帯とサングラスで顔を隠してる学生なんて世界で俺くらいだろう。

しつこいようだが、これは仕方のないことである。目と喉のことははっきり言ってみせたくない。

注 ジャンヌさんはこのことを知っている。

「お前が、オルグ・D・ヘルグだな。」

この名前は俺の素性を隠すために付けたコードネームだ。

本名を名乗ってしまったらすぐにこの世界に存在しない人間だと特定される恐れがあったためだ。

そして、目の前にいるこの女性はおそらくモンド・グロッソでブリュンヒルデの称号を得た織斑 千冬だろう。

何度か、データで顔を見ていたので知っていた。

「初めまして、オルグ・D・ヘルグです。お出迎えいただき、ありがとうございます。」

すると、彼女の顔が一瞬歪んだが、

「担任の織斑 千冬だ。さっそくですまないが時間がないので教室に行くぞ。」

「説明は行きながらする。ついてこい。」

この声を初めて聴いて、動じないとはさすが世界一のISSの乗りの名は伊達ではないな。

さらに、俺というイレギュラーに少し警戒している。

彼女の目を見て俺は最初に思った。

俺はそんなことを思いながら、

「わかりました。よろしくお願いします。」

そう答え校内を彼女について歩いていく。

自分の教室へ行く途中、周りの目が俺に集中していた。

なにしろ、公式発表されてる男性IS操縦者は今のところ一人だ。

それなのに、見ず知らずの男がしかもIS学園の制服を着ているのだから逆に驚かない方がおかしいと思う。

だが、さすがに360度視線を感じるのはさすがにきついな・・・

俺はその後その視線と格闘しながらある教室の前に立ち止まった。

そこには一年一組と書かれていた。

「ここが、お前の教室だ。少し待っている。」

どつちら、ここが俺の教室らしい。

織斑先生がそう言い教室の中に入って行った。俺は壁にすがりながらなんて挨拶しようかなとかんがえていた。

しばらくして、教室からパーンとすがすがしいくらいいい音がした。

「またあとで来るからね。逃げないでね、一夏!」

それから、少しして黄色のリボンの付けたツインテールの背の低い女の子が出てきた。

そして、その子はそう言い走り去っていった。

「誰だろう、織斑の知り合いかな？」

一夏と言っていたので間違いない知り合いだろう。

俺は走り去った女の子の走り去っていった方を見て思った。

スパーンとまたいい音がした。容赦ないな、織斑先生。

「オルグ。入ってこい。」

その後、俺は織斑先生に呼ばれ俺は教室に入って行った。

S i d e 聖火 e n d

S i d e 一夏

俺は鈴の突撃訪問を受けた後千冬姉が入ってきた。

そして、鈴に教室に戻るように言った後全員を席につかした。

やっぱり、みんな千冬姉が怖いんだろう。動きがとても素早い。

鬼教官の異名を持つ我が姉に向かって思った。

スパーン

「今失礼なこと考えていただろ、織斑？」

すると、前に千冬姉が来て俺に出席簿という名の兵器を振りかざしていた。

やっぱり、角は痛いな……。

「まったく、お前という奴は……。」

自分の顔に手を当ててため息を吐いてしまつ千冬姉。

「酷いぞ、千冬姉！」

スパーン

「織斑先生だ。」

「はい。」

相変わらず容赦がない姉であった。

そして、千冬姉が鏡台につき、

「おはよう諸君。HRの前に紹介する奴がいる。」

そう千冬姉が言った瞬間教室がざわめく。

「転校生かな。」

「いったいどんな人なんだろ？」

「でも、この時期におかしくない？」

そういう声が飛び交う。

「静かにしろっ！！」

が千冬姉の一括で静まり返る。

本当に怖いな、千冬姉は・・・思わず苦笑いしてしまった。

「わかればいい、オルグ。入ってこい。」

千冬姉がそう言つと教室の入り口に全員の視線が集まる。

そして、少ししてドアを開けて入ってきた人物に俺は自分の目を疑つた。

多分、他のみんなもそうだろうと思う。

何故なら、そいつは俺と同じ男なのだ。

身長は178位で髪は黒。

しかし問題は、そいつの目がサングラスに隠され、首から目の下まで包帯で覆われていることだ。

まさに、怪しさ100パーセントの奴だった。

side—夏end

side 聖火

(すごい、視線だな……)

内心この視線にひいてしまった。まー、無理ないと思うけどね。

半ば諦めながら思った。

とにかく自己紹介しないと……。

俺は、一呼吸して自己紹介をした。

「オルグ・D・ヘルグです。非公式ですがISをつかえます。」

「まだ、右も左もわからないので助けてもらえるとありがたいです。」

「顔と声のことはなるべく追求してもらわないでほしいです。」

「これから、よろしくお願ひします。」

俺はそう言うのとクラス全員に向かってペコリとお辞儀をした。

「……………」

気まずい沈黙がクラス中に広がっていく。

そりゃ、そうだろう。こんな、変人簡単に受け入れろってのが、まず無理だと思う。

もし、なんも無しに受け入れられたら、よほどの間抜けだ。

「き……………」

「き？」

「「「キヤ—————！！！！！！！！！！」」」

突然、物凄い甲高い声が教室中にとどろいた。

「二人目の男子!!」

「しかも今までにないミステリアス系!!」

「一組で良かったっ!!」

今分かった。この人たちは、相当間抜けだということが。

クラスメイトになる人たちの喜びのように若干呆れ気味だったが、受け入れてくれたのでとりあえず結果オーライということにした。

「オルグ、一番後ろの席に着け。」

「わかりました」

「オルグへの質問は昼休憩にしろっ!!」

俺はそう織斑先生に言われ返事をする俺が一番後ろに空いている席に座った。

「それじゃ、授業に入りますね。」

そう言うのは緑髪のショート、胸がとても微笑ましい背が少し小さい女性。

このクラス副担任の山田先生だ。

さつき、ここに来る途中に織斑先生から説明を受けていた中で、
た人だ。

彼女の授業はとても分かりやすいので淡々と進み今は四時間目の
終わりに差し掛かっていた。

えっ、何でこんなに早いかって？

それは、作者に文才がないからだよ。

聖火、テーマ覚えとけよ。

どこからか、作者の声が聞こえたがほおっておいた。

そして、俺は昼休憩に入った。

女子たちに質問されるのが正直面倒だった俺は適当だが丁寧にあしらって屋上に来ていた。

女子たちが騒ぐ前にここへ隠れるためだ。もちろん、途中女子に追われたが何とか巻いてここまでたどり着いた。

昼飯はどうするかというと、俺はこういう時を想定して懐にウイ
○ーを忍ばせていたのでそれで済ました。

そして、今は屋上で昼寝をしていた。

ここ数年、敵と戦うために仲間を集めていたためこういったゆっ
くりする時間がほとんどなかったから少し一人で黄昏ていたかつた
のだ。

春の風が心地よく吹き太陽が穏やかに地をてらしとてもポカポカ
していた。

「平和だな〜。」

今まで、こんな平和な穏やかな空を滅多に見たことはなかった。

俺が、いた場所は何時も空には厚い雲がかって冷たい雨が降り続きそれに混じって鉄の雨が降りつける、そして周りにはおびただしいまでの屍が転がっている、そんな地獄に何時もいたから。

俺は、そんなことを思いながら春の陽気に少しウトウトしていた。

「ちよつといいか？」

誰だ、俺の安眠を妨害する不届き者は。

不意に声をかけられむくりと少し重い体を起こして声のあった方を向いた。

そしてそこには、俺がここへ来た理由が立っていた。

「オルグ・D・ヘルグでだっけ？俺の名前は織斑　一夏だ。よろしくな。」

「よろしくね。俺のことはオルグで構わないよ。」

「わかった、俺のことも一夏でいいから。」

そう言うと、俺たちは握手を交わした。

こいつの手は、まだ汚れてないんだな。

満面の笑みを浮かべる一夏に向かって思った。

この日、後にこの世界で破壊龍神と白騎士と呼ばれる者たちが出会った。

龍である咎人は若き騎士に出会う（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回は聖火が自分の部屋を改造します。

では、次回の更新でお会いしましょう!!!

小さい猫は龍である咎人に相談する（前書き）

今回は鈴が聖火に一夏のことについて相談したりします。

では、どじぞ。

一夏の出番がないです。

小さい猫は龍である咎人に相談する

聖火が転校してきた放課後。彼は、自分が学校側におねがい（脅迫）して用意してもらった地下の倉庫に来ていた。広さは教室と同じくらいの広さがあり、この倉庫には仮設水洗トイレと仮設シャワールームやエアコン、換気扇が完備されている。また、システムキッチンや冷蔵庫などが置けるようになっていた。しかし、それ以外は、配備されていなくてただただ広い倉庫である。倉庫の機能にシエルトの機能を付けたような感じだ。

おい、それだけでもすごいことだよ。税金の無駄ずかいだよ。
（作者の声）

しかし彼はここの部屋を選んだ理由はちゃんと存在するがそれは後で話します。そして、その倉庫内になにやらオルグとマーカで書いてある段ボールや家具が積み重ねられている。そう、今日からここが彼の部屋である。IS学園には部屋だけしか用意してもらっていないだったのでそのほかの物は自分で用意したのである。そして聖火は黙々と段ボールを開けて部屋に家具やその他いろいろな自分の私物を並べたのである。

一方、一夏は放課後、アリーナで幼馴染である、篠ノ之 箒とイギリスの代表候補生であり、第三世代ISブルーティアーズの操縦者である、セシリア・オルコットとISの訓練をしていた。彼自身ISを動かすのは素人であったため放課後に少しでも上達するように練習しているのである。

しかし、そこまでは何とか問題もなく彼は過ごせていたのだがここである問題が発生した。それは、もう一人の幼馴染である凰 鈴音が一夏の部屋に行って同室である箒に部屋を代わって欲しいと半ば強引に言ってきたのだ。しかし、一夏のこと好きである彼女が受け入れるはずもなく断固拒否していた。

そこで、鈴音は秘策としてかつて一夏と小学の頃に約束したことを一夏に聞いたが鈍感な彼は変なふうに勘違いしていたので彼女は怒り一夏の頬をひっぱたいて泣いて一夏の部屋から飛び出していったのである。

side 鈴音

あたしは今廊下をひたすら走っている。いろんな苦勞をして、ようやく会えた幼馴染。一夏に私は激しい怒りを感じていた。あたしは今まで沢山辛いことを経験してきた。あたしは中国の代表候補性だから、軍の厳しい訓練も積んできたがそれも必死で耐えてきた。大好きだった両親が離婚して一人になっても必死に涙を堪えてきた。それは、小学の時に交わした一夏との約束があったからだ。それなのに、肝心なあいつはというとなんかふうに勘違いしてたし約束の意

味すら理解していなかった。

（もうっ、一夏のバカバカッ！！あたしがどんな思いで今まで生きてきたと思ってるのよ！！）

「一夏の鈍感、唐変朴！！」

あたしは、寮の廊下にも関わらず強く歯を噛みしめながら叫んだ。しかし、わたしはその時前にいた物に気付かずそのまま突っ込んでしまいドンツと跳ね返され持っていたバックを離してしりもちを着いてしまった。

「痛たた、何よいきなりっ！！」

あたしは、その声を発しながらその当たったものに目を向けた。

「ひっ！！」

思わずそれを見てあたしは背筋が凍りついた。目を鋭いサンングラスで隠し、包帯で顔を覆っている身長が高い人物がそこにはいた。その人物はその時のあたしには凄い威圧感を放っているように思え

た。その人物がこちらに向いて手を伸ばしてきた。

(助けてっ!!)

あたしは、何かをされると思い身をちじこませてしまったが・・・

「君、大丈夫かい？」

予測とは真逆で急に機械的だが男性のあたしを心配してくれる声が聞こえた。

「えっ？」

思わず間抜けな声を出してしまった。このIS学園には一夏以外男はいないはずなのに目の前の人物はあきらかに男性なのだ。

「ひとりあえず、立とうか。」

そいつはそう言つとあたしの手を握りひょいっと簡単に持ち上げたのである。

「怪れないみたいだね。」

あたしのことを見て怪我がないことをそいつは確認しているが当のあたしは、目の前で起きている状況について行けずにきょとんとしている。

「なんか、泣いてるみたいだけど何かあったのかい？」

その一言であたしはようやく正気を取り戻して、

「べっ、別にあんたにはかんけないでしょ……！」

あたしは助けしてくれたそいつに向かってきつく突っぱね返してしまった。

「もしかして、朝一組に来ていた人だよな？」

しかし、そいつは全く動じることなくあたしに質問してきた。

「だったら、なんなのよ……！」

あたしは、一夏のことや目の前のこいつのことで少しパニック
いた。

「一夏のことです泣いているんですしょ？」

しかし、その言葉を聞いて思わず目を見開いてそいつを見てしま
う。

「えっ、どうして……」

あたしは不思議だった。どうして、一夏のことです泣いているのが
分かったのか疑問に思ったからだ。

「君がさっき大声で一夏のこと叫んでいたからそれに、一夏から
君のこと聞いてたしな。」

あゝ、なるほど一夏の奴あたしのことこの変人に喋ったんだ。

「そ、そうなの。で、なんで赤の他人の私の話を聞いてくれるの。」

「そんなの、誰だって泣いてる奴がいたら普通心配するだろ？」

「ほかに、理由があるかい？」

そんなことをそいつは言った。あたしは、どうして一夏が言ってくれないのかと内心思った。そしてそいつはあたしに背を向けて、

「俺で良かったら君の愚痴、聞いてあげるよ。凰 鈴音さん。」

そうあたしの方に顔だけ向けて言いそいつは、何処かへと歩き出した。あたしは、何故かそいつについて行きたくなかった。あたしのこいつに対する最初の態度は最低だったはずなのに、そいつは全く気にすることもなくしかもあたしの心配をしてくれている。あたしは、黙ってバツクを持ち上げてそいつの後ろを歩き出した。

しばらく、歩いていくと寮の端っこついた。その近くの扉を潜りそこに地下に通じる階段があった。そいつは、黙ってその階段を下りていく。こんなところに部屋があるのかと思った。

（もしかして、こいつ。あたしを……………。）

このまま、暗いところに連れ込まれて。最悪の事態があたしの頭

の中をよぎった。もしそうならと思いいあたしは自分のISの甲龍をいつでも展開できるようにしていた。

「ついたよ。」

そして、階段を降り切つてしばらく埃のかぶるやけに広い通路を歩いていくと倉庫の大きな黒い扉の前についた。すると、そこにはおかしなものがおいてあった。

「投げ所？」

そう、投げ所と書いてある黒いボードがその扉の片隅に置いてあった。

「入って、少し汚いけど我慢してくれな。」

すると、そいつは扉を開けて中に入つて行った。

「ちよ、ちよっと待ちなさいよ。」

あたしは、そいつの入った扉を開けて中に入つていった。

中に入って一言でいえばあたしは、今現在目の前の光景を見て唾然としている。テーブルが五つぐらい並べられていた。また、筆筒の中にたくさんのお酒の瓶が敷き詰められその前にはカウンターテーブルがありイスが何個か並べられていた。その横にはシステムキッチンとデカイ冷蔵庫がありそれを鈍い照明の光が照らしている。さながら何処かのレストランのような光景であった。

そして、その部屋の片隅にまだ開けられていない段ボールの山がいくつも重ねられていた。さらにその傍には一つつのハンモックがポールにつるされていた。

「空いてるところに適当に座って。」

「あ、あなた、いつたいなんなのよ。」

あたしは、こんなところに入れるこいつに疑問を持った。

「そういえば、まだ自己紹介してなかったな。」

「一組のオルグ・D・ヘルグだ。男だけど一応IS使えるよ。」

「これは、俺の趣味だ。」

目の前でサングラスを輝かせグツと親指を立てている人物を見て、こいつに対して今まで警戒してい自分が馬鹿らしくなって思わずため息を吐いてしまった。

「ひとりあえず、話してごらん。聞いてあげるから。」

その後、あたしは適当な席に座った。そして、オルグはカップにホットミルクを入れてあたしの前に置いてくれた。湯気があたしの前を昇って行く。

「いいの、あたしなんかの話を聞いてもらって。」

「構わないよ、それに聞いてもらいたいからついて来たんだろ？」

機械でいまいち感情が分からないが優しく言ってくれているのが分かった。

「実はさ。」

そう言い、今日あった一夏とのやりとりをオルグに話した。あたしの愚痴をオルグはただ黙って聞いていた。

「つまり要約すると、鳳さんが決死の覚悟で小学のころ告白したの

に一夏が変なふうに解釈していたってことだね。ヾ

「そうなのよっ!!一夏の奴変なふうに解釈してもう頭来ちゃって!!」

あたしは、目の前にあるミルク一気に飲み干した。ふと、時計を見てみるともう夜中の3時だった。

「ゴメン、なんか一方的に話しちゃって。」

「一気にスンナ。少しは、楽になったかい?」

「うん。聞いてくれてありがとう。」

しばらく、沈黙が訪れる。あたしは、何時間も愚痴を大声で言っていたので少し疲れてしまった。

「鳳さん……。」

すると、オルグは疲れているあたしを見て喋りだした。

「一夏が鈍感だってことはよくわかった。けど、だからといって鳳さんは一夏のこと嫌いになったのかい?」

「あたしが一夏のことを嫌いになるわけないでしょっ!!」

「つて、あんた。あたしに何言わせてんのよ!!!」

あたしが、自爆したのにもかかわらずドンツとテーブルを叩きオルグに八つ当たりしてしまった。

「それで、いいと思うよ。」

「えっ？」

また、オルグの思わぬ返答に今日二度目の驚愕を浮かべた。

「今回のことは、確かに一夏が悪いと思う。」

「けれど、だからと言って頬をぶつことはなっただと思うよ。」

たしかに、あいつは何が何だかわからなくてあたし一人で怒ったのかも。今振り返ればそう思ってしまう。

「一夏は、会って俺も間もないけど、優しいからそれぐらいで鳳さんのことを嫌いになったりはしないと思うよ。」

「だから、彼が謝ってきたらちゃんと受け入れてあげな。」

「ちゃんと、話し合えば鳳さんの言いたいことも伝わるはずだよ。」

オルグはそうあたしに言ってくれた。何でだろう、今まで心中でもやもやしていたものがだんだんと消えていく感じがした。

「それに、鳳さんは十分かわいいから一夏も頑張れば何時かは振り向いてくれるかもしれない。」

「だから、それまで頑張ればいいよ。」

オルグはそう言うと言つて席を立ちあたしのカップと自分のカップをキツチンへと持って行った。あたしはオルグの言ってくれた最後の一言で完全に吹っ切れてしまった。

一夏が気が付かなければあたしが気づかせればいい。どんなに期待はずれな反応でも構わない。一夏はモテるからライバルは多いけれどあたしが頑張れば一夏もいつかは気づいてくれる。だから、落ち込む必要はない。あいつは、あたしにそう言うてくれているのだ。

こんなに、優しく接してくれる人に会つたのは両親が離婚してから本当に久しぶりだった。オルグは見た目は近寄りがたいが話せば優しく接してくれる。お父さん系というよりは、お兄さん系と言つたら当てはまるかもしれない。もちろん、今のあたしが、精神的に不安定になつてゐるからそう思うのかもしれないけど。

でも、あいつがあたしのことを励まそうとしてくれていたのは伝わってきた。正直、とても嬉しかった。

「うそ、なんで、急に眠気が……。」

あたしは、今までたまつていたものが大分吐き出されたので眠たくなつたのだ。当然と言えば当然だと思う。今は明け方の4時ずつと喋っていたのですごく疲れた。あたしは、オルグにお構いなしにそこで倒れ伏せてしまったのである。

S I D E 鈴 E N D

S I D E 聖 火

俺は鳳が使ったカップを洗い戻ってみると

「にゃ〜。一夏〜。」

何とも可愛らしい寝言あげながら鳳さんは熟睡していた。

「寝ちゃったか〜。」

まあ、こんな遅くまで喋ってたから無理ないか。俺は寝ている子猫を抱きかかえながら本来俺が寝るはずであったハンモックに寝かせ薄い毛布をかけた。

俺が、この部屋を用意してもらったのはさっきの鳳さんみたいに迷える人が助けを必要とした時に少しでも手助けをしたかったためだ。要は、本当に俺のただの趣味だ。

時間はもうすでに4時だ。いまさら、寝たって遅いだらうと俺は思い朝のトレーニングに出かけることにした。

小さい猫は龍である咎人に相談する（後書き）

次は戦闘です。

無人機の所まで頑張っ て行きたいと思います。

では、次回の更新でお会いしましょう!!

龍である咎人は異端者に牙をむく(前書き)

何時も、見てくれている方ありがとうございます。

今回は戦闘です。

生身がチートです。

お見苦しいですか最後まで見ていただければ幸いです。

では、どうぞー!!

龍である咎人は異端者に牙をむく

s u d e 聖火

あの後、俺は凰さんを本来自分が寝るべきハンモックに寝かせ、そのまま早朝訓練へと向かった。俺は戦場で3日間ぶっ続けて戦い続けていたのでこれくらいはまだ大丈夫だ。そして、今は第3アリーナに来ている。なぜ、早朝に訓練しているかという俺の機体、デイストラクションを動かすためだ。

デイストラクションは、まだこの世界の人間には秘密にしておきたかったためこの早朝の人が寝静まっているときにしか使えない。現在時刻は明け方の4時半、俺はデイストラクションを起動させた。そして、武装である雷天、風天、それに曇龍の確認だ。曇龍は2、3回素振りをして、ハンドキャノンの方は状態を確認して一応武装の確認は終了だ。そのあとは、歩行やジャンプ、爆天など戦いで必要な動きをした。いくら使いたくないとはいえ、動かしておかないといざという時にろくに動けないからだ。

こんなことをしなくても量産型のISを使えばいいのではと思うが、俺に動かせるのはDT、ZTの技術を転用したISとデイストラクションだけだ。そのため、今ジャンヌさんに頼んで試験中だった機体であり、DTの技術を応用して作った第2世代型IDS打鉄・飛龍式を稼働実験が済んだらすぐに送ってくれと頼んでいるので、それまでの辛抱だ。

そして、俺はデイストラクションを解除し、アリーナ内をぐるぐると重りを身に纏って走ったり、木刀で素振りをしたりした。さす

がに、この時だけは包帯とサングラスを取っている。そんなことをしていると、時間はどんどん進みすっかり陽が照ってきた。俺はそれを肌で感じ手に持っていた腕時計で時刻を確認する。6時半とそろそろいい時間だった。俺は再び包帯とサングラスで顔を隠しアーリーナを後にしようとした。いや、正確にはしなかった。

「ほう、早朝訓練とは感心だな。」

アーリーナの入り口で鬼が立って俺を待ち構えていたのだ。アーリーナ内に通ずる道は全て俺が見られないためにロックしていた。なので、おそらくここで待っていたのだろう。今の先生の恰好はジャージ姿だ。しかし、何故ばれた？

「おはようございます、織斑先生。」

しかし俺はそう言って、何気なく織斑先生の横を通り抜けスルーしようとしたが、ガシツと肩をつかまれる。しかも、かなり力が強い。せ、先生、そんなに強く掴んだら肩が碎けますよ。

「ただで帰れると思っているのか？」

そう言う、織斑先生の顔を見た。先生、どうしてそんなに笑顔が黒いのでしょうか。しかも、竹刀なんてどこから出したんですか。髪が逆立ってるのは気のせいであってほしいです。

「お前には教育的指導が必要だな、オルグ。」

「……………、逃げろ——————！！！！！！！！！！」

その瞬間、そこからはじき出されるかのごとく走り去った。その後俺と織斑先生との楽しい鬼ごっこが始まった。その日の朝、部活動で早く起きていた生徒に男性の悲鳴が聞こえたとか。

side 鈴

「ここは……………」

あたしが目を開けると見慣れぬコンクリートの天井が見えた。背中にとても心地よい感触を感じる。

「あたしは確か昨日……………」

そして、昨日自分がこの現状に至るまでを思い起こす。たしか、一夏の愚痴をオルグに言った後すぐに、意識がもろろつとして寝てしまったことを思い出した。

「とりあえず起きようか……。」

あたしは寝かされていたハンモックから降りて時計を見る。今の時刻は7時と起きるにはちょうどいい時間だ。

「そういえば、あいつは……。」

そう言って、部屋を見回すがこの馬鹿げた部屋の主は見当たらない。

「た、ただいま。」

すると、扉の開く音がして入口からあいつが入ってくるが、

「どうしたの、その恰好？」

どことなく、服が乱れてボロボロになっているオルグがいた。

「なに、朝から鬼神と楽しい命を懸けた鬼ごっこをしてきただけだ。」

「それ、冗談になってないわよ。」

呆れながら、ボロボロになっているそいつに向かって言う。そして、そいつはフラフラな足取りでキッチンに向かっていく。すると、なにやら朝食の用意を済ませたのだ。

「鳳さん、俺が朝飯作ってやるよ。」

「え、いいの。あたしなんかのために？」

「構わないよ。」

「それに昨日からシャワー浴びてないでしょ？」

「奥にあるから浴びておいでよ。」

そうして、オルグは部屋の片隅にある小部屋に指をさした。最初は断つたが体が少し汗ばんでいたのでお言葉に甘えさせてもらうことにした。

サアー

シャワーから水が出る音がルーム内に響く。

(どうして、他人にあんなに優しくできるのかしら。)

あたしは、今キッチンで朝食を作っているあいつに向かって思った。はつきし言ってあの優しさは異常だ。ただのお人よしなのか、それとも何か企んでいるのか。あたしは、そんなことを考えていた。

濡れた髪をタオルで拭きながらシャワールームから出たら一番近くのテーブルに皿が置いてあった。その上には、フレンチトーストが二枚とカップにはミルクが入っていて、小皿にはフルーツが盛りされていた。出来立てらしくフレンチトーストからは湯気が出ている。

「お腹すいただろ、できたから食べていいよ。」

キッチンから、後片付けをしながらオルグはあたしに言った。お

いしそうな匂いに誘われたあたしは直ぐにフレンチトーストにかぶりついた。

「おいしい……。」

甘さが程よく効いていてとてもおいしかった。あたしは、物凄い勢いでそれらを全て食べた。そして、5分もせずに食べきってしまった。

「ごちそうさま。」

「口に合ったみたいで良かったよ。」

オルグはあたしが食べた皿をキッチンに下げながら言った。

「ねえ、くどいようだけど、どうして会って間もないあたしにそんな優しく接してくれるの。」

あたしがそう言うとオルグは少し間を置いて、

「知り合いが言っていたんだが困ったときはお互い様ってね。」

「それ以外の理由なんて、今の俺たちには必要ないよ。」

振り返って優しくあたしにそう言った。その後、またここに来てもいいかと聞いたら、もちろんいつでもおいでと言ってくれた。あたしはどこか軽い足取りで自分の自室へと戻って行った。

side out

その日、一夏が鈴に謝罪してきた。彼女は聖火の助言があつたため快く受け入れた。そのかわり、今度のクラス対抗戦の勝負で勝つた方の言うことを一つ聞くという約束を交わした。もちろん、その時に恋する乙女二人と口論になつたのは言うまでもない。一方、アリーナの無断使用がばれた聖火は織斑先生と山田先生にこつてりしごかれたとか。

そして、クラス対抗戦の抽選発表の日、一夏は初戦で鈴と当たることになることが判明した。そして、その時に鈴と互いに悔いの残らぬ試合をするために握手を交わした。そして、一夏は鈴と戦うために放課後輩たちと練習を繰り返した。

2週間後、第3アリーナでは1回戦の鈴対一夏の試合が始まるうとしていた。会場にはたくさんの生徒がつめていてもう一杯だ。

一夏は自身のISである白式を纏ってアリーナの上空で静止していた。同じく鈴も甲龍を纏って一夏に対峙していた。一夏は鈴に勝つために放課後ひたすら特訓してきたため、やる気は満々だ。対する鈴も一夏にもう一度告白するために絶対勝つと執念を燃やしていた。

「鈴、全力で行かせてもらおうぞ。」

「一夏、今日は勝たせてもらおうよ。」

二人は、互いに熱い火花を散らす。鈴は約束のため、一夏は自分の努力を無駄にしないため。

『両者とも、指定の場所についてください。』

そうして、アリーナの中央で向き合う。一夏は近接ブレードの雪片式型を構える。鈴も背中から近接ブレードの双天牙月を構える。お互いに、見つめあい静寂が生まれる。

『それでは、試合を始めてください。』

開始のブザーがアリーナにこだました。開始と同時に両者とも背中のスラスターを全開にしてたがいに突っ込んで得物をぶつけ合う。

両者一步も引かず火花を散らす。

「やるわね一夏。だったら、これはどう!?!」

すると、甲龍の肩がスライドした。とっさに何かがあると察知した一夏は鈴を払いのけて距離を取ろうとした。

「甘いわよ!?!」

甲龍の肩に光の輝きが見えた。すると、その刹那一夏に向かって何か放たれた。一夏は白式を上手く操りスラスターを全開にしてそれを回避する。しかし、少し掠ったらしくシールドエネルギーを削った。

「初見で交わすなんて、少しは出来るようね!?!」

「そいつはどうも。行くぜ、鈴!！」

上空で繰り広げられるバトルに会場のボルテージが一気に上がり
歓喜に包まれる。しかし、ただ一人このイベントに何かを感じた聖
火は生身での戦闘の準備をしていた。

side 幕

私は、今一夏が出て行ったピットの中のモニターで隣のセシリア
や織斑先生と共に試合を見ていた。

「なんだあれは……。」

二組の代表候補生の凰が使っている武装を見て眩く。

「衝撃砲ですわね。」

すると、隣にいるセシリアが同じく眩いた。

「そうです。空間自体に圧力をかけて砲弾として打ち出す武器で
す。」

山田先生が戦闘を記録しながら言った。

「ああ、おまけにあの龍砲は360度制限なく打てる。」

うしろで、織斑先生が腕を組みながら言った。しかし、今の私に
はどうでもよかった。一夏さえ無事で帰ってくるのなら。

(一夏。絶対に勝つんだぞ!!)

自分の愛する者の勝利を信じて私はモニターを見続けた。

side out

side一夏

あれから、鈴の龍砲とかいう見えない砲弾を何とか地面すれすれの低空飛行で回避しながら戦ったがそろそろシールドエネルギーがまずい。このままでは、ジリ貧乏のまままで負けてしまう。どうすればいい。

(あれを試すしかないな。)

俺は、千冬姉が教えてくれた戦法に懸けてみることにした。それは、相手の隙を付いて一気に瞬間加速イグニッションブーストで間合いを詰めて白式の単一使用である零落白夜で止めをさすというものだった。この戦法は一度きりしか通用しないが代表候補性とでも互角に戦うことができる。

(とにかく、間合いをとらないと!!)

俺は背中のスラスタを一気に吹かし上空へと間合いを取ろうとする。

「逃がさないわよ!!」

鈴も龍砲を撃ちながら、加速して俺との間合いをじりじりと詰めてくる。そして、鈴の双牙天月が俺に届きそうになった時、

「っつー!」

突然の出来事により場に一瞬の静寂が生まれる。

「な、何が起こってるんだ。」

俺は、今の状況に追いつけず当たりをグルグルと見回した。

『織斑!!! 試合は中止だ。』

すると、状況がつかめてない俺の目を覚ますかのように、千冬姉がピットから通信を入れてきた。しかし、それと同時に白式のモニターに

敵ISの反応、識別無し。ISでないと断定。アンノウンにロックされています

という警告の表示が出される。

「ISじゃないって……」

ISじゃなけりゃ、いったい何が落ちてきたんだよ。

「一夏、早くピットに……」

すると、鈴が俺の隣に来て叫んだ。

「お前はとうするんだよ!!」

「あたしが時間を稼せぐからあなたは逃げなさいよ!!」

「お前をおいてにげられるかよ!!」

「馬鹿っ!! あんたのシールドエネルギーほとんど残ってないでしょうが!!」

「ぐっ!!」

たしかに、俺のシールドエネルギー残量はもう二けただ。さっきの鈴との戦闘でほとんど空になってしまっているのだ。

「別に、最後までやるつもりはないわよ。」

「先生たちがすぐに駆けつけて、事態のしゅっ」

鈴が何かを言いかけた時だ。

高エネルギー反応確認、敵攻撃が来ます。

白式から再び警告の表示が出される。そして、爆炎の中から、黄色い閃光が鈴に向かって一直線に放たれた。俺はとっさに反応して、鈴をすぐに抱きかかえその場を離脱した。間一髪のことと交わすことができた。

「ビーム兵器じゃない、今は……」

すると、白式からさっきの攻撃が高出力のレールガンであると、表示された。

「レールガン、しかもセシリアのビームと比べ物にならない威力じゃないか。」

俺は、鈴を抱えながら飛び回っている。

「ちよ、ちよっと、離さないよっ！！」

しかし、鈴は大人しくしていたのだが、俺の腕の中で再びもがく。

「お、おい。暴れるな！！」

「うるさい！！うるさい！！うるさい！！」

俺たちがそんなことをしていると再びロックオンの警告がなる。

「く、来るぞ！！」

再び、レールガンの鋭い閃光が俺たちちめがけて放たれくる。そして、放たれた場所から段々と煙が晴れてくる。そして、そいつは姿を現した。

「う、嘘でしょ……」

「なんだよ、あいつ……」

そこにいたのは、まさに異形だった。ボディはとてもスマートだ

ががっちり装甲で固めてどこか忍者のような雰囲気漂う。大きさが3メートル。そこまでISの装甲をスマートにさせたよなものだが、あきらかに違うのが機械でできた尻尾が生え、そして顔だ。機械でできた恐竜のような顔だった。人間のからだに鎧を付けて顔が恐竜みたいな感じだった。右手には赤色のクローウを左手には大きな砲ずつらしきものを付けている。

「お前、何者だ!!」

しかし、そいつはただ俺たちを地上から機械でできた青い目で見つめている。

「答える!!お前は何者だ!!」

返答は先ほどと同じで帰ってこない。思わず舌打ちしてしまう。

『織斑くん、鳳さん!!今すぐアリーナから脱出してください!』

「!」

俺たちが飛び回っていると山田先生から通信が入る。しかし、今俺たちが後退すればアリーナにいる他の生徒が危ない。俺の答えは既に決まっていた。

「いや、みんなが逃げるまで食い止めます。」

俺は、そう山田先生に伝え通信を切った。

「鈴、いいな?」

俺が腕の中にいる鈴に尋ねる。

「だ、誰に言ってるのよ／＼／＼それより離しなさいよ／＼／＼」

鈴の顔が赤いのは気のせいだろうか。熱でもあるのか？俺はそんなことを思いながら鈴を解放した。その刹那、俺たちの間にレーリングが放たれた。攻撃は外れたが直撃すればただではすまないだろう。そして、それは背中ブースターを全開にして俺たちに突っ込んできた。

side out

sideセシリア

「織斑先生！！私に救援のための許可をください！！」

わたくしが織斑先生に進言した。自分が愛する一夏さんを助けたのだ。

「ダメだ、相手がISか分からないのに生徒を危険に合わすわけにはいかない！！」

しかし、冷たい一言を先生はわたくしに返す。

「し、しかし！！」

負けじとわたくしも反論しようとする。

「無駄だ、これを見る。」

すると、織斑先生はモニターの片隅を指差した。

「遮断シールドがレベル4に設定、しかもアリーナに通ずるが扉が全てロックされてますわね。」

「そうだ、おそらくあの不明機によるものだろう。」

織斑先生も苦虫を嚙んだような表情をしている。

（一夏さん、どうか御無事で……。）

わたくしは、ただ彼の無事を祈りました。しかし、この時気づいてはいませんでした。篝さんがこの場からいなくなっていること……。

side out

side 一夏

あれから、何度もそいつに攻撃をしたがそのたびに交わされてクロウで切り付けられていた。鈴も援護してくれていたが敵の砲ずつから放たれるレールガンが的確に牽制している。このままでは、まずいと思い一旦距離を取った。

「ちよつと一夏！！ちゃんとしなさいよ！！」

「無理言っなって！！」

けど、確かに鈴の言うとおりだ。さつきからあいつは全く被弾していないがこちらはあいつにかなりやられた。シールドエネルギーもほとんど残っていない。どうする。あいつは、また攻撃をかわしてカウンターをしてくるだろうし、

(ん？ちよつとまてよ。アイツさつきからカウンターしかしてないんじゃない……)

思い起こせば、あいつは初めの一撃以外は全てカウンターだ。しかも、向こうから絶対に仕掛けてこない。現にあいつは今この間もただ俺たちを遠くから眺めているだけだ。もしかしたら……

「なー、鈴。」

「何よ、こんな時に。」

「あれって、人乗ってないんじゃないか。」

「あんた、馬鹿じゃないの。ISは無人には動かせない、そういうものなのよ。」

「けれど、あれはISじゃないし、なによりさつきから攻撃がワンパターンじゃないか？」

「………そういえば。」

すると鈴は顎に手を当てて考え出した。俺たちは、今隙だらけなのに全くあいつは攻撃してこないのがいい証拠だ。

「たしかに、それで無人だったら倒せるの？」

たしかにそうだ。今の状況じゃ厳しい。けど、俺には秘策があった。

「あー。無人だったら手加減が必要ないからな。」

「鈴、俺が合図したら衝撃砲を撃つてくれ！！」

「わかったわ！！」

俺の作戦はこうだ。鈴に衝撃砲を俺の白式に向かって撃ってもらいそのエネルギーを吸収して自身のエネルギーに変え、単一使用の零落白夜を使用し一気に仕留めるものだ。

そうと決まればと思い俺はあいつに向き直って見つめる。そしてスラスターを全開にして再び切りかかろうとしたが突如通信が入った。

「こんな時に何処からだ？」

しかし、その宛先を見たとき背筋が凍りついた。敵の機体からだったのだ。そして、音声ではなく文字でこう言ってきたのだ。

『お前ら雑魚に用はない。エルドラ王国の破壊の龍神を出せ。』

俺には意味不明だった。エルドラってどこの国だ。破壊の龍神っていったいなんだ？俺は一瞬だが動揺してしまう。

「一夏！……！」

すると、俺を叫ぶ声がして現実に引き戻される。そして、声が聞こえた方を見た。俺たちがいる反対側のピットに箒が生身でいたのだ。

「男なら、そのくらいの敵を倒せないで何とする……！」

箒がそう叫ぶが、それに気づいた無人機が箒に向かって三本のクナイを投げつける。

「まずい……！逃げろっ、箒……！」

しかし、箒が背を向けて逃げようとしたがもう間に合わない。俺は、それを打ち落とすためにスラスターを全開にしたがやはり間に合わない。

「箒……！！……！！……！！」

無常にもクナイが箒に刺さろうとした。俺は思わず目を瞑った。

s i d e o u t

s i d e 箒

私はもうだめだと思ったがいつまでたってもクナイが刺さらない。私は閉じていた目を開けた。

「あ、あ………」

私は目の前の光景に思わず息をのんだ。そこには、私を胸に抱きこみ代わりにクナイを背中に刺したオルグがいたのだ。

「怪我はないみたいだね、良かった。」

その声を聴いて私の意識は闇に落ちて行った。

side out

side 一夏

「オルグッ!!!!!!!!!!」

俺は思わず叫んでしまった。アイツの攻撃から箒を身を挺して護ってくれたのだ。あいつの背中から血が流れる。

「一夏、下がってる……。」

オルグはそう言うと、そこから飛び降りアリーナの地に降り立った。今のあいつは、刀を手に携えているだけだ。すると、無人機がオルグに向かってレールガンを放った。

「う、嘘でしょ……。」

隣に来ていた鈴が思わず言葉を漏らした。俺も、多分同じ気持ちだろう。なぜなら、オルグは持っていた刀でレールガンを弾き返したのだ。無人機も負けじと連射するが全て弾き返される。無駄と分かったのか無人機がオルグめがけて突っ込んでいく。

「オルグ!! 逃げろっ!!」

しかし、オルグは敵がクロウで切り付けてきたのをジャンプして交わし、懐から鎖を出してそいつを拘束する。手を拘束されているので攻撃ができない無人機はもがいて抜け出そうとするが、まったくほどけない。

「…終わった…」

すると、オルグは鎖を伸ばしてグルグルと回しだし無人機を地面に叩き付けたり、アリーナの壁にぶつかけたりした。そして、最後にハンマー投げの要領で無人機を空中に投げた。すかさず、ズボンのホルダーから銃らしきものをだして、無人機めがけて撃つ。放たれた弾丸はまっすぐ無人機に命中して上空で火花をあげた。

この間はわずか1分の出来事だった。俺たちが苦戦したそれをISを纏っていない人間がまるで軽くいなすようにして倒したのだ。た。

俺は、背中から血を流して爆炎の中に立っているオルグを遠くからただ見つめていた。

龍である咎人は異端者に牙をむく（後書き）

やり過ぎました。

許してください。

無人機については次回、話します。

では、次回の更新でお会いしましょう！！

ブリュンヒルデは彼の素顔を知る（前書き）

評価を入れてくれた方、お気に入り登録してくれた方

本当にありがとうございます。

これからも駄文ですが、よろしくお願いします。

では、どうぞー！

ブリュンヒルデは彼の素顔を知る

side 箒

「ここは……」

私が目を開けると白い天井が目に入った。背中に布団の感触がする。どうやら寝かされているようだ。

「箒、気が付いたか!!」

「箒さん!!」

声ができる方を見ると一夏とセシリアがいた。

「セシリア、一夏……」

体を起こし、周りを見してみる。薬品が棚に並べられている。どうやら、保健室にいるようだ。窓から夕陽が差し込むところを見ると、時間は夕方らしい。

「わたしはいつたい……」

わたしは何故寝かされているのか思い起こす。

「お、オルグはどうした!! アイツは無事なのか!!」

そう、私を庇ってくれたあいつが無事なのか知りたくて、ベット

越しにいる一夏の胸倉をつかむ。

「お、落ち着けよ、箒。」

しかし、一夏が私の目を真剣に見てきて私を落ち着かせようとする。

「わ、わかった／＼だから、その……、あまりそう見つめるな／＼／＼／＼」

「お、おっ」

いかん、一夏と見つめあってしかもあいつは私の心配をしてくれている。次第に顔が熱くなっていく。

「オ、おっほん!!」

しかし、セシリアがわざとらしく咳き込む。チツ、セシリアめ……。

「オルグさんなら、あの後わたくしたちに箒さんを預けて何処かに行ってしまうましたわ。」

「そうそう、俺が怪我はいいのかって聞いたら、自分で手当てするからいいってさっ。」

それを聞いて、わたしは安心した。とにかく、無事なら良かった。そっと胸をなでおろし、後で謝りに行こうとわたしは思った。

「そういえば、鳳はいないのか？」

「そういえば、さっきオルグさんを探しに行くっておっしゃられて出で行きましたわよ。」

。。
そうなのか、あいつにも言っておきたいことがあったのだがな・

「一夏、オルグの部屋が何処だか知らないか？」

奴の部屋、わたしたちとは別に特別に用意されていると生徒の間で噂されていたのだが何処にあるのかが全く分からないのだ。オルグ本人に聞いても何時か教えるよと言ってはぐらかされていた。

「悪いな、俺もあいつに聞いたんだがはぐらかされて結局知らないんだ。」

「オルグさんの部屋を知ろうと他の生徒も躍起になっているのですが、結局見つからないそうですわ。」

まるで、学園の七不思議みたいだなとわたしは思った。しかし、現にここIS学園ではオルグの素顔は口裂け男とか、オルグの部屋はIS学園の地下迷宮にあるとか七不思議とはいかないがそう噂されている。

~~~~~

突然携帯のアラームが部屋に響いた。すると、一夏から制服のポケットの中から携帯を取り出して中身を確認する。

「鈴からだ、え〜っと……………」

どうやら、凰からのメールのようだ。一夏の指がケータイのキーを叩くたびに一夏の目が驚愕なものになって行く。どうしたのだから？そして、一夏がケータイを閉じてポケットに再び戻す。

「どうなされましたか、一夏さん？」

セシリアが心配そうに尋ねてくる。

「オルグの部屋を知ってるから一緒に行かないか？だってよ。」

一夏の口から出た言葉に私とセシリアは驚愕の表情を浮かべた。

「それは、本当か一夏！！」

「あゝ、鈴が寮の一階の一番西の端で待ってるって……………。箒動けるか？」

「わたしなら、大丈夫だ。」

「そうか、セシリア。今から行くけど、用事とかあるか？」

「今日は特にありませんわ。」

そう言い私たちは、凰が待っている場所へとそのまま直行した。

side out

side 一夏

「遅かったじゃないって、なんであんたらがいるのよ。あたしは一夏を呼んだのよ……」

指定された場所に行ったら鈴が待っていたが何故かジト目で睨んでくる。俺なんか悪いことしたか？鈴の手には、なにやらバスケットを持っていた。

「ふっ、わたしはオルグに助けられたからな。礼が言いたくて来ただけだ。」

「鳳さん、クラスメイトの心配をするのは当然のことですわよ。」

「ぐぬぬぬ。」

鈴と箒、セシリアの間に火花が散っているように見えたような気がしたが気のせいかな？

「と、とにかく、鈴。オルグの部屋を知ってるんだろ？案内してくれないか。」

俺はそう言ったが鈴はプイッとどこかいじけたような顔になりな

がら歩き出した。俺、本当にかしたか？その後、近くにあった扉を開けて中に入った。こちら辺は何もなく普段生徒もほとんど来ない場所だった。中に入ると下に続くコンクリートの階段があった。鈴は何の迷いもなくそれを下りていく。

「あの噂は本当なのか……。」

俺の後ろで階段を下りていく筈は呟いた。オルグの部屋が学園の地下迷宮にあるってやつだ。最初は信じていなかったがどうやらマジになってきたらしい。そして、階段を3分ぐらいおり続けるとやたらと広い通路に出た。

「もう少しよ。」

鈴はそう言うとその通路をまっすぐ歩き出した。俺たちもその後について再び歩き出す。

「それにしても、埃が多いですね。」

セシリアの言うことももつともだ。この通路広いのはいいが埃がすごく多い。この奥に人がいるなんて誰も思わないだろう。しばらくその薄暗い通路を歩いていくとやたらとデカく黒い扉があった。どうやら見た感じ倉庫らしい。こんなところに人なんていないだろうと思ったがその扉の隅に『掘り所』と書いてあるボードが立てかけられ、さらにその周りだけ妙にきれいな所を見るとどうやら人の出入りがあることが分かる。

バシーーーーー

突如、どこからか誰かを殴るような音が通路内に響いた。

「ふざけるなっ！！！！」

「そうですよ、オルグ君！！」

そして、扉の向こうからいつも聞いている二つの声、千冬姉と山田先生の声が聞こえた。しかし、普通の声ではなく完全に怒気を含むものだった。

（千冬姉、山田先生？）

俺は明らかに扉の向こうはまずい状況だなと思ひ扉に耳を当てて中の様子聞くことにした。俺がそうすると他の三人もそうしだした。

side out

side 千冬

今、私は目の前にいる男を思いつき殴った。私と山田先生は人通り今回のことを上に報告し終え、オルグの容体を見られなかったので奴の部屋に来てみた。ドアを開けて中に山田先生と共に入ると奴はちょうどクナイで負傷した場所に包帯を巻いていた。

「織斑先生、山田先生。こんにちは。」

すると、あいつは自分のけがなど全く気にしないような口調で言ってきた。だが奴の座っている席の横に大量に血の付いた布が転がっていた。その瞬間何かが私の中で切れ私はあいつを殴り飛ばした。あいつは宙を舞いながらテーブルにぶつかりガシャンと音を立てる。殴った衝撃で奴のかけていたサングラスが飛んだ。

「ふざけるなっ！！！！」

「そうですよ、オルグ君！！」

何故、私や山田先生がこんなに怒っているのか、それはこいつがあまりにも無謀すぎるからだ。たしかにこいつがいなければ篠ノ之は間違いなく死んでいただろう。しかし、こいつは後先考えずに突っ込んでこいつも死にかけているのだ。しかも、ISでも苦戦した相手に生身で戦うなんて自殺行為だ。今回は勝てたからいいもの次やったら生きられる保証はない。

「心配してくれるのはありがたいとつごぞいます。」

そう言いながら奴は床から立った。私が殴ったところが赤くはれている。

「いいかつ！！もしも、今度あんな真似したらこんなことでは済まないぞ！！」

私は顔を下に俯かせながら黙って聞いているオルグに怒鳴った。

「オルグ君、一応体の様子を見ますから上に来てください！！」

山田先生も相当怒っている。彼女も私もこいつに死なれたくないからだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

これでアイツも少しは懲りただろう。私はただ俯いている聞いているオルグを見て思った。

「先生。」

すると、今まで黙っていたアイツが声を出した。そして首の包帯にほどきだしたのだ。

「知ってますか、誰かを護るには必ず代償がいるんですよ。」

「それが多ければ多いほどその代償が大きくなる。」

わたしと山田先生は最初オルグが言っていることが分からなかった。そして奴は全ての包帯を解き終わりそれを床に置く。包帯には、何やらわけのわからない文字が刻まれていてどこか呪術的なオーラをその文字は放っていた。そしてあいつは顔を私たちに向けた。

「あ、あ……………」

山田先生は思わずそんなうめき声のような物をあげている。私は、そんな声をあげないものの目の前の光景に唾然となる。

そいつは、だいぶ治っているようだが、喉が焼き切れており、生々しい傷跡が残っている。そして、そいつの目は赤くギラギラと輝きを帯びた獣の目、そう例えるなら、龍の目を持っていたからだ。

「俺は国を護るために、家族と仲間と民族と思い出とそして……」

……



護りたかった国さえも失った。

オルグはそう私たちに語りかけてくる。初めて見る奴の素顔、そして聞かされるオルグの過去。嘘ではないことは喉の傷と奴の目を見ればすぐに分かった。山田先生に至ってはもう、半泣き状態だ。

「俺は、何度も死にそうな目に遭いました。」

「そのたびに何度も傷つき倒れました。」

「死ぬ覚悟なら等の昔に出来ています。」

「けれど、こんな血に塗れた汚い魂がこれからを創っていく者たち  
の力となるのなら。」

「俺は喜んで命をかけます。それだけの価値が彼らにはあるから。」

そして、あいつは笑顔で私に向かって言った。その目はとても強くそしてどこか儚さを感じた。横にいる山田先生はもう立っていられないくらい泣いている。わたしも、親はいない。私と一夏を置いて何処かへと消えてしまったから。けれど、こいつのそれと比べるととても小さく思えてくる。私は、それ以上あいつを攻めることができなかった。いつの間にか私は固くこぶしを握っていた。すると、オルグはその手を優しく持った。

「あなたはあなたのなすべきことをしてください。」

そう私に言うとオルグは泣いている山田先生を優しく抱いて、

「俺のためなんか泣いてくれて本当にありがとう。」

静かに、そう呟いた。そして、山田先生が泣き止むまでずっとそう呟き続けていた。鈍い光が照らす中私はただ立ち尽くすしかなかった。

side out

side 一夏

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

静かな沈黙がドア越しで聞いていた俺たちを包む。隣を見ると、鈴は泣き、セシリアは口を手で覆い、箒は唇が青くなるくらい噛みしめていた。オルグから語られる過去は断片的だがそれでもとても重たいものなのだ。今すぐ、ここを開けてオルグに会いたい。俺はそう思った。他の三人もそう思っているだろう。だからと言って、俺たちにいったい何ができるんだろうか。俺は、あの無人機との戦いのときに思った。

（俺にかかわる人を全て守る！！！！）

しかし、オルグはどうだろう。あの力を有しても救えなかったものが多い。いや、多すぎる。俺は本当にみんなを誰も失わずに守れるのだろうか？

俺は、隣にいる三人に目をやる。

いや、絶対に守って見せるんだ。俺がもっと強くなればいい。いや、なって見せる。みんなを失わないためにも。俺は新たに決意を固めた。もう誰かに守られるの嫌なんだ！！

ここに白騎士は新たなる誓いを立てた。

s i d e o u

s i d e 聖火

(少し喋りすぎたかな……。)

俺はさっき自分が言ったことを悔いていた。いずれ話すつもりだったが彼女たちの表情を見ればかなり重かったことも直ぐに分かった。

「オルグ……。」

すると、織斑先生が俺に話しかけてきた。さきほど、山田先生は泣き疲れそのまま眠ってしまったのでハンモックに寝かせた。織斑先生も大分落ち着いたらしく今は椅子に腰を掛けている。少しだが眼がしらに涙がついていることに気が付いた俺はコーヒーを彼女の前に静かに置いた。彼女はどこか虚ろな目でコーヒーを見つめている。コーヒーから出る湯気が彼女の前を曇らせる。

「お前は何故、今でも戦っているんだ？」

そう彼女は聞いてきた。

「お前はそんなにも失って、なのになんでそんな強い目を持てるんだ。」

確かに俺は、たくさん失って、何度も挫折し絶望もした。

「それは、死んでいった仲間や救えなかった人たちとの約束があるからだと思います。」

俺は、彼女にそう言った。これから、何度も傷つくこともあるかもしれない。けど、この人達や彼等の笑顔が見れるなら俺は何度だってこの体を血で濡らそう。それで彼らの未来が護れるなら……。

その後、織斑先生も疲れて、テーブルでそのまま寝てしまったので俺は予備のハンモックを出してそこに寝かした。そして、入口の扉にあるボードを中に入れようと外に出てみると

「す〜〜。」

「ZZZZ」

「にゃ〜〜。」

「……。」

そこには、壁に背中を預けて寝ている一夏たちがいた。多分、俺たちの会話をドア越しで聞いていたのかも。しかし、まだ素顔を見られてないだけかもしれません。俺は彼らを部屋に運び込みさらにハンモックの予備を出して寝かしたが、俺の分がなかったので俺は、カウンターの裏で寝ることにした。床はひんやりしており、それに傷が反応して少し痛むが俺は無視してさっさと寝た。どうせ、明日も忙しくなるだろうと思えば俺は眠りについた

ブリュンヒルデは彼の素顔を知る（後書き）

今回はシャルロットを出します。

ラウラはもうちょっと先だと思えます。

では、次回の更新でお会いしましょう!!

疾風の王女の来訪（前書き）

遅くなって、申し訳ございません。

これから、もう少し早くかけるように精進していきます。

では、どうぞっ……

## 疾風の王女の来訪

よこせ……

降り続く豪雨の中少年は言う、その身に黒き龍の鎧をまとい……

代償は払った、もし神がいるのなら……

少年の周りには切り刻まれたり何かに撃ち抜かれ既にこと切れている、龍の骸が無数に転がる。

俺に……

少年は返り血を浴びた顔を上げ分厚い雲に覆われた天に向かい言った……

全ての正義（人類）に報復する力を……

少年のその瞳は全てを憎みし者の瞳であつた。紅き瞳はただ憎悪を込めて天を見つめる。

よこせ……

少年はそうただ眩き続けた。そしてその眩きは豪雨の中にかき消されていった……

「ん・・・・・・・・・・・・・・・・。」

私は目を開けました。どうやら私は眠っていたようです。さっきのはいったい何だったのでしょう。しかし、さっきの声どこかオルグ君に似てたような気がしました。そう思うと、胸を締め付けられるような感覚がしました。今私の目線の先にはコンクリートの天井が広がっています。とりあえず、私は起き上がるうとしたのですが、

「よいつしよって、あわわわ！！！」

急に私がいる場所が揺れだしてそのまま、私は床に放り投げられました。ガンツといい音を立てて私は顔から落ちました。

「うゝゝゝゝゝゝ、痛いですゝゝゝゝ。」

私は顔に手を当てながら自分が寝てた場所に目をやるとそこはポールに吊るしてあるハンモックだったのです。その隣には複数のハンモックが私の同じように吊るされており中から寝息が聞こえてきます。どうやら私以外に誰か寝ているようです。私はその前に眼鏡をかけていないことに気づき何処かにないか探しましたが視界がぼ

やけていたのほとんどあたふたしていました。

「山田先生、起きたのか。」

すると眼鏡を探している私に織斑先生の声が聞こえそちらの方に顔を向けました。ぼやけて見えますが彼女は今、髪が少し濡れていて体から少し熱気を感じます。タオルを首にかけており、ジャージ姿の所を見るとどうやらシャワーを浴びていたようです。その手には何やら眼鏡のようなものがありました。

「おはようございます、織斑先生。」

「おはよう。山田先生の眼鏡だ。」

織斑先生は、そう言つと私に持っていた眼鏡を渡してくれました。私はそれを受け取りようやく視界がはつきりしました。私がいる部屋は昨日訪れたオルグ君の部屋でした。

「えっと……、私は……」

私は昨日あったことを織斑先生から説明されました。私はどうやら泣き疲れてそのまま眠ってしまったようです。

「山田先生、昨日あったことは必ず他言無用でお願いします。」

昨日あったことと言えば、オルグ君のことですね……………。

「そ、そうですね。／＼／＼／＼／＼／＼／」

それに私はオルグ君にずっと抱きしめられていました。オルグ君の胸のなかって結構暖かったですね……………。って駄目ですよ。教師が生徒にそんな感情を持ってしまったら。

「山田先生、一応彼は生徒ですから妙な気は起こさないように……………」

織斑先生が何故か絶対零度な視線で私を見ながら言います。お、織斑先生、とつても怖いですよ（涙）。

「全く……………、いい加減起きたらどうなんだ？」

織斑先生がハンモックに目をやりながら言った。するとハンモックの下の部分が少し凹み織斑君が起きてきたのでした。

「千冬姉、俺は……………」

どこか悲しい目をしながら織斑君は言いました。

「織斑先生だ、馬鹿者。」

織斑先生はそう言うのと織斑君に近づきチョップをいれました。そして、その衝撃で織斑君はさっきの私と同じくいい音を立てながら床に叩き付けられた。うわー、痛そうですね（苦笑い）。

「お前が外で私たちの会話を聞いていたのは知っている。」

織斑先生は真剣な目で彼に言いました。どうやら、織斑君は外で昨日の会話を聞いていたみたいです。私、まったく気づきませんでした。

「無粋なことをしたのはわかってる……………」

「もし後悔しているのなら普段道理に接してやれ、いいな。」

織斑先生は彼にただそう言っただけでした……………」

side out

その後、対抗戦は中止になり乱入してきたアンノウンに関して学

園側は調べようとしたのだがオルグ（聖火）が粉々にしたため調べることができなかった。そして、その次に問題になったのがISと同等いや、それ以上の存在である物に生身で勝ってしまったオルグ（聖火）のことだ。後日その異常な身体能力を調べるために様々な検査が行われようとした。そこでオルグは（聖火）はあらゆる手段を講じてなんとかごまかした。今、世間に自分（化け物）という存在を知られるわけにはいかなかったのだ。精密検査が行われた後に例のアンノウンのことについて尋問を受けたが知らないといった。しかし、彼はあれを知っていた。彼の世界で開発された兵器、

対人制圧用      第四世代      機械恐神器      ZT      ヴェロキラプト  
ル      アサシンタイプ

アンノウンの名前だ。彼の世界の兵器であったため証拠を残さな  
いたために粉々に破壊したのだ。来たるべき時までその存在を明かさ  
ないと彼が決めていたからだ。そして、この出来事が外部に漏れる  
ことを恐れた学園側はこの事実をISで撃退したと改変して国の上  
層部に報告した。

しかしその後さらなる問題が彼に降りかかった。ISが最強であ  
るといふ根強い考えを持つ教師が彼との模擬戦を希望したのだ。し  
かし、ネズミがライオンに挑むほどその模擬戦は無謀な選択であっ  
た。教師は、ISをぼろぼろにされ逆に彼に一撃も与えることがで  
きなかった。そして、この模擬戦後彼を取り巻く状況がさらに深刻  
化した。模擬戦を行った教師と同じ考えを持つ生徒が彼を敵視しだ  
したのだ。そして、その影響と彼が放つその不気味な雰囲気から近  
づく生徒が目つきり減ったのだ。

けれど、一夏や同クラスの生徒はいつもと変わらずに彼に接した。彼が普段とても優しく頼りになる存在だと彼と過ごすうちに感じ始めたからである。一夏たちは、最初こそは戸惑っていたがオルグが全く彼らのことを気にしている様子はなく普通に話していたので彼らも気にすることなく話すことができた。

そんなクラス対抗戦のゴタゴタが収まってきたある日のことだった。

### side一夏

あの一件から数週間たった。オルグとの関係は初めこそは俺が一方的にギクシャクしていたのだがあいつが全く気にしていないように話してきてくれたので俺もあいつと普段道理に話すことができた。そして、俺は今自分の席についている。俺は昨日、筈に

「もし、私が今度行われるタッグマッチの大会で優勝した私と付き合ってもらおう!!!」

と宣言されていた。付き合ってもらおうって、買い物位別に普通にやってやるのにな……。俺はそう思いセシリアと話している筈に目をやるが一瞬こちらに気付いたがプイツとどこかすねたような感じで無視されてしまった。俺、何もしてないよな……。

今思ったのだが朝から女子が騒がしいのだ。どうやら何かしらの噂が立っているらしい。俺が聞いても、

「なんでもないよっ！！！」

そう言っただけ全員一点張りなのだ。俺はこういつた時の頼みの綱のオルグに目をやったがあいつの席が空いているのだ。あいつ、休みか？

「全員席に着けっ、ホームルームを始める。」

そう言いながら千冬姉が山田先生と共に入ってきた。どことなく山田先生の顔がにやついているのは気のせいか？そして、千冬姉はいつも通り窓越しにある椅子に足を組んで座った。そして、山田先生は教団に手をついてすがつた。

「先生。オルグ君はどうしていませんですか？」

クラスの一人が席を立って山田先生に質問する。俺も、同じく聞こうと思っていた。

「オルグ君は、ようやく専用機が届いたので第二アリーナに行っ

ています。」

そう言えばオルグの奴、専用機がまだ来てないとか言ってたな。生身でIS倒せる奴がさらにISを纏ったら誰も勝てないんじゃないか……。

オルグはあの件以降教師の一人にISでの模擬戦を半ば強引にやらされて逆にボコボコにしまってそれ以降上級生や別のクラスの連中がオルグに模擬戦を挑んでそのたびに返り討ちにあっていた。そして、あいつがISと生身で戦うのが日常になっていたので全くアイツのISのことについて忘れていた。

「それでは、改めて。今日はなんと転校生を紹介します。」

そう言いながら山田先生は教室のドアに目をやった。

そして、教室には静寂が流れていた。そう、その転校生が俺と同じ男なのだ。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。みなさん、よろしく願います。」

金髪で長い髪を後ろでくくっている。いかにもどこかの王子様といった感じだ。オルグと大違いだなとつい思ってしまった。

「き……」

「き？」

やばい、この流れはっ!!俺は、すぐさま両耳をふさいだ。

「キャアッ

!!

!.....!!

いつもながら、これは本当に音響兵器何かと勘違いしてしまいそうなくらい凄いぞ。ほら、デュノアだって少し退いてるぞ。

「男子よっ!!しかもまたうちのクラス!!.....!!」

「王子様系ですごくかつこいい!!.....!!」

「守ってあげたくなるタイプよっ!!.....!!」

「地球に生まれてよかった!!.....!!」

うちのクラスの女子は本当に元気だよな.....。

「静かにしろっ!!.....!!」

すると千冬姉がため息を吐いたのちにそう一括入れた。

シ.....ン

おい、いくらなんでも早すぎないか。すぐさま静まったクラスメイトに思った。

「一時間目は、二組と合同でIS実習を行う。各人直ぐに着替え  
て集合しろ。」

「そっ、いや、そうだったな。オルグは先に行ってるなら俺も急がな  
いとな。」

「それから織斑。同じ男子としてオルグと一緒に面倒をみてやれ。  
」

「そっ、だよな。とにかく他の女子が来る前に脱出しないと。」

「では、解散!」

「パンツと手を叩き千冬姉と山田先生は教室出て行った。」

「君が織斑君。僕は」

「ああいいから。とにかく早く出るぞ。女子が着替えるからな。」

「俺はそう言っと、デュノアの手を持ってそそくさ教室を出て行っ  
た。」

「俺たち男子は更衣室がアリーナだから早めに慣れてくれ」

「うん、ところでもう一人男子がいるんだよね。」

「あ、そいつならい」

「俺がそう言いかけた時、」

「ああつ、転校生発見!!」

「しかも、織斑君と一緒によっ!!」

うまい具合に目の前の通路の角から別クラスの女子が来た。別クラスの女子がHRが終わったので溢れ出てきたのだ。このままじゃまずいな。

「ねえ、どうして僕たちを追っかけているの？」

「そりゃあ、今の所ISを動かせる男子って俺たち（オルグも入ってる）以外にいないじゃん。」

俺が走りながらそう言うとデュノアがはっと何かを思い出したような顔をした。

「そ、そうだね・・・。」

？どうして急に言葉が詰まったのだろうか？とにかく急がないとやばいな。俺とデュノアは全速力で走った。しかし、途中女子たちの挟み撃ちにあい現在囲まれている。

「まずいな、このままだと千冬姉の補修が待ってる。」

「あはは、これはすごいね（苦笑）。」

どうする。全方位囲まれて逃げ場がないぞ。くそ、こんな時にオルグがいればいいのにな。

「呼んだかい、一夏？」

「うわっ、ってオルグ！！なんでここにいるんだよ！！！」

そう隣に歩く不審者、オルグがいたのだ。いや、おかしいだろ。

360度囲まれている中どうやってここに来た！！突然現れた、不審者にデュノアにいたっては間抜けな顔を浮かべていた。

「歩く不審者とは、失敬な。まゝ、とにかくここから脱出するよ。」

心が読まれた。って、オルグどうして俺とデュノアを両脇に抱えているんだ。

「しっかり捕まってる、二人とも。」

オルグはそう言うのと開いている窓に向かって走り出して、その窓越しに立ち下を見た。

「おい、オルグ！！まさか・・・」

「？どうしたの。」

「そのまさかだ。漏らすなよ。」

そうして俺たちは窓の外空へと飛びだした。

「「ギヤ~~~~~!!!!!!」」

俺とデュノアの叫びが学園にこだました。だって、オルグが俺たちを抱えた状態で飛び降りたんだぜ。しかも三階からだぜ。そして俺の意識はそこで飛んだ。

「この馬鹿者!!！」

え〜と、あの後俺たちはいつの間にか更衣室にたどり着いていた。気づいた時の時刻は42分、授業までもう5分を切っていた。俺は気絶しているシャルル（呼んでもいいと言われた）を起こして急いで着替えたが1分、間に合わなかった。

「でも千冬姉っ!!！」

スパ  
ン

「織斑先生だ。」

「はい」

いい音を出してまたはたかれてしまった。クソ〜、オルグの奴後で覚えているよ。俺はオルグに静かなる（どうでもいい）報復を誓った。

「まったく、ではこれから実習を開始する。まずは、戦闘の実演をしてもらう。」

「鳳、オルコット。前に出るっ！！！」

そう言われ二人は前に出たがいかにもやる気がなさそうだ。そんな二人を見た千冬姉が二人の耳元で何かつぶやいた。

「ここは、やはり私の出番ですわよねっ！！！」

「実力の差を見せるいい機会わよね、専用機もちの！！！」

どうしてだろう、急に二人のやる気が上がったな。千冬姉のいったいなに吹き込んだんだろう？

「それで、お相手は誰ですか？」

「セシリアとやりあうのかしら？」

そう言いながらお互いを見つめながら火花を散らす鈴とセシリア。二人とも熱血だな。ここにいる全員二人の変わり用に苦笑いを浮かべていた。

「あわてるな、馬鹿ども、お前たちの相手はもうすぐ来る。」

千冬姉が腕を組みながら言った。

キィー  
ン

うん、なんだこの音は？俺は何処からか聞こえるその音に不思議

と嫌な予感がした。

「うわ~~~~~、どいてください~~~~!!!!」

俺の頭上から声が聞こえ見上げてみるとラファール・リバイヴを纏った山田先生がまっすぐこちらに落下してくる。

「つて、解説してる場合じゃない!!!!!!」

しかし、俺の声とは無関係に山田先生が突っ込んできた。

ドガ  
ン

物凄い轟音と共に俺の上に山田先生が落下してきた。その衝撃で土ぼこりが舞い俺は何が何だか分からなくなった。

ムニユ

土ぼこりが舞う中、俺の手にとても柔らかい感触を感じた。俺は物凄く嫌な予感がして、恐る恐る目を開けた。

「こ、困ります、織斑君ノノノノ」

「す、すみませんっ!!!!!!」

俺は山田先生の2つの山を鷲掴みしていたのである。つつ、殺気

「……俺はすぐさまそこから飛びのいた。その刹那俺のいた場所に青い閃光が飛んでくる。」

「おほほ、外しましたわ。」

セシリアが黒い笑みを浮かべて自身のブルー・ティアーズを展開させライフルで撃ってきたのだ。待て、今は事故だ……!

「一夏………!!!」

すると今度は鈴がどす黒いオーラを出しながら甲龍を展開させ二本の双天牙月を連結させてブーメランのように投げってきた。やばい、当たったら死ぬ……!!!

バンツ……!!!

しかし、飛んで来たそれを閃光があたりはじき落としてくれた。山田先生の方を見ると自身のライフルの砲身から煙が上がっていた。どうやら打ち抜いてくれたらしいのだ。た、助かったぜ。

「大丈夫ですか、織斑君？」

「は、はい。」

いい笑顔で俺に微笑みかけてくる。でも、あの体勢から打ち落とすなんて山田先生って意外とすごいんだな。冷静になった俺は思っ

た。

「山田先生は、元代表候補性だ。このくらい造作もない。」

「といつても代表止まりでしたから大したことありませんよ。」

少し千冬姉の発言に照れながら山田先生は手を頭に当てながら言った。

「さて、小娘共。今から、山田先生と模擬戦をしてもらおう。」

それを聞くとセシリアと鈴は気まずそうな顔をした。

「二対一ですか？」

「さすがにそれは……。」

たしかに、いかに先生でも二対一ではきついだろう。それに二人は代表候補制だし実力も大分高い。そのうえ、二人はそれぞれ専用機。対する山田先生は量産機で圧倒的にポテンシャルが違うからだ。その状況ではいくらなんでも教師でも苦戦は必至なはず。

「はあ、誰が二対一といった。」

そう千冬姉がため息交じりに言った。そして、その刹那の事だった。

ゴ

物凄い突風が俺たちの間を駆け抜けた。周りの女子たちがあまりに突然のことだったので悲鳴を上げていた。目を閉じて俺は風が止むのを待った。そしてそんな俺は頭上に何かが通り過ぎていくのを感じた。そして、その数秒後突然風が止んだ。

「すいません、遅くなりました。」

それと同時にオルグの声がしてきた。俺は閉じていた目を開け声がある方に目をやった。他の女子も目をやっているが全員オルグを見て唾然としている。

藍色を基調とし細い赤のラインが入っている武者のような装甲に身を包み右手にマシンガンを持って仁王立ちしたオルグがいた。しかし、驚くべきところはそこじゃない。あいつの背中に付いているものだ。明らかに生物が持っている膜の翼が付いているのと背中に巨大な細長い魚雷のような形をした筒のようなものを背負っている。そして極め付けはオルグの顔を覆っているものだ。機械だが前のアノンウンに似た感じだがどこか違うどちらかというところと龍の顔に近いもので覆っていた。ISというものは、少し違う感じがする。まるで、機械の鎧を纏った龍の戦士のような感じがした。

「それが、お前の機体か……。」

千冬姉と山田先生もオルグを凝視していた。当然だろう。前のアノンウンと所々酷似しているのだから。

「第三世代 IS 打鉄 飛龍式です。」

オルグはそう言うと山田先生の隣へと翼を羽ばたかせていった。バサバサと翼がはためくと土ぼこりが舞う。

「さあ、小娘ども。これで遠慮なく戦えるだろう。さっさと空に上がれっ！！」

そして、啞然となっていた鈴とセシリアも千冬姉の声で正気に戻り急いで空へと上がっていった。山田先生もオルグと共に空へと上がっていく。

Side out

Side 聖火

俺は今、上空でセシリアと鈴と対峙している。あの事件の以来彼女らが呼び捨てをしてもかまわないと言われたのでそう呼ばしてもらっている。

「オルグ君……」

隣に静止している山田先生から声を掛けられそっちを見ると普段とは違う真剣な目になっていた。

「その機体、後で調べさせてもらいますよ。」

「この前のアンノウンと酷似している部分がありますから。」

そう彼女は言う。この機体にはDTとZTに使われていた人工筋肉を小型化して搭載していると同時に飛龍の羽を使用しており、サイボーグに近いものでISとは全く別物だ。学園にはそのため情報

を開示していない。けれど、おそらく放課後に織斑先生も同じことを言ってくるだろう。事件の尋問はなんと乗り切れたが今度はかりは逃げられないだろうと思う。

「わかりました。けれど、条件があります。」

「悪まで、あなた個人として見せますので学園側には見せない。」

「これを飲んでいただけませんか？」

山田先生は少し考えたのちにあとで織斑先生と相談するといった。まあ、妥当な手だろうと思った。

「オルグ、準備はいいか？」

織斑先生から通信が入り了解と言って切った。

「やっとですの。少し待ちくたびれましたわよ。」

「オルグッ、手加減はしないわよっ!!」

そう言う二人を見つめる。山田先生も持っているライフルを構える。それじゃあ、軽くもんでやるか。俺はマシンガンの雷蓮三式を構え戦闘態勢に入った。

Side out

Side シャルル

僕は頭上にいる存在に驚愕していた。オルグという人が使ってい

るISが二年前にフランスのデュノア社襲撃事件で現れた鎧を纏った龍、「黄金の風」にあまりにも似ていたからだ。黄金の風は表向きは会社側のIS操縦者が撃退したことになっているが実際は違う。巨大な龍が舞い降りてテロリスト簡単に撃退したのだ。僕もその一部始終を隠れてみていたので知っていた。そして、その龍が去った後IS操縦者であつた僕のお母さんを探したが何処にもいなかった。西洋風の鎧を纏っていた黄金の風だがあの人が使っているのはそれと同タイプだと思う。

「それでは、模擬戦を開始しろっ！！」

織斑先生の合図で上空の四人が一齐に動き出す。オルコットさんのブルー・ティーズから四基のビットが現れビームを放ちながら山田先生を襲うが山田先生もそれをうまくかわす。鳳さんは肩から龍砲をオルグ君に向かって放つがオルグ君は背中の魚雷みたいなスラスタ吹かせ翼でうまく向きを調節しながらそれを回転しながら強引に交わす。僕の周りの人たちを見ると織斑先生以外は上空で行われている模擬戦に夢中になっている。

「オルグって、やっぱり凄いな……。」

「前から強いと思っていただけ、ここまでのレベルとはな。」

隣に来ていた、一夏と篠ノ野さんが呟いた。ふと、織斑先生の方に目をやった。彼女は今険しい顔をしながらその模擬戦を眺めていた。いったいどうしてなのだろう？

「デュノア、山田先生が使っているISを解説してみせる。」

すると、織斑先生が僕に対してそう言うてきたので僕は一通り山

田先生が使っている「ラファール・リヴァイヴ」について解説をした。そんな中でも、戦闘は続いていた。オルコットさんはスターライトmark1?で狙い撃つが山田先生には全く当たらない。しかし、その間に山田先生の弾丸がオルコットさんのシールドエネルギーを削っていく。

一方鳳さんは、甲龍の龍砲が当たらないことを悟ったようで近接ブレードの双牙天月を連結させてオルグ君に切り付けていく。しかし、オルグ君のとった行動に僕は驚いた。鳳さんの双牙天月をなんと正面から片手で受け止めたのだ。そして、その間に彼は持つていたマシンガンで龍砲の部分を撃ち抜く。しかし、驚いたことにそのマシンガンの弾が明らかにビームのようなものであった。そしてそれを収め今度は塞がっていない手に薙刀を展開した。そこから彼の反撃が始まり、薙刀で鳳さんを切り付ける。その反動で鳳さんが突き飛ばされるがそれより早くオルグ君が背中中のブースターを全開にして後ろに回り込み切り付け、そしてまた後ろに回り込み切り付ける。鳳さんもなんとか抵抗しようとするがあまりの速さに手も足も出ない。

山田先生もセシリアとの距離をじりじりと詰めていきオルコットさんを鳳さんの方へと弾き飛ばす。オルグ君もそれに気づいたらしく切り付けるのを止め、鳳さんの腕を掴みオルコットさんの方に投げつけた。二人は上空でぶつかり金属がぶつかる音がした。その間に山田先生はすぐさまグレネードを展開して二人に向かって撃つ。一方オルグ君は、口を大きく開いた。最初は何をしているのだろうかと思ったが口に光が集まり、赤色の光弾が放たれた。これには、さすがに織斑先生も驚いたらしく開いた口が塞がらない様子だった。二つの光が二人に当たり

ドゴ

ン

爆炎を上げた。そして、二人は黒い煙を上げながら織斑先生の前に落下する、それに続いて山田先生が下りきて、最後にオルグ君がブースターを弱めながらゆっくり下りてくる。

僕は一瞬背中に嫌な汗をかいた。彼のオルグ君の発する明らかにこの場にいる人とは違うオーラを感じたからだ。他の人を見渡すが全員感じてないらしくオルグ君や山田先生に向かって賞賛の声を上げていた。僕は個人的に彼に接触する必要がありそうだね……。お母さんの行方をしているかもしれないから。僕は黄金の風に死亡扱いになっているお母さんの行方を知っていると思われる存在にわずかな希望を抱いた。

S i d e o u t

S i d e 千冬

オルグが苦しい戦いを経験してきたのはこの前の話で断片的には分かったがまさかISの戦闘だけでここまで強いのかと思ってしまうくらいのものであった。生身の戦闘だけでも途轍もなく強いのにISでの戦闘では予想はしていたが代表候補生などやはりまったく敵ではなかった。しかし、奴の戦い方は強者の動きだ。私もかつてはブリュンヒルデと呼ばれたがアイツと戦って勝てるだろうかタダでは済まない、おそらく本物の死闘になるだろう。

(オルグ、お前は、いったいなんだと言うのだ?)

年相応には思えない場馴れした雰囲気と戦闘力。15歳の青年が普通は持ち合わせていないものばかりだ。そして、前回襲撃してきた

たアンノウンと酷似したIS。

(アイツに調べてもらうか………)

私は、オルグの事を私の親友である奴に内密に調べてもらうことにした。アイツには悪いと思うが生徒や弟に危険な思いをこれ以上させるわけにはいかないからな。そして、目の前でぼろぼろになっている馬鹿者たちと下りてきた山田先生とオルグを冷静に見つめた。

## 疾風の王女の来訪（後書き）

如何でしたでしょうか？

終わりが中途半端だったので申し訳ないです。

次回、ラウラを出したいと思います。

では、また次回の更新でお会いしましょうっ！！

黄金の風と打鉄 飛龍式、ZTの設定を近いうちに挙げておきます。

パンドラの箱と黒ウサギとの対面（前書き）

すみません。

また遅くなってしまいました。

いろいろと用事がありかけませんでしたでしたがやっとできました。

では、じじいっ…！

## パンドラの箱と黒ウサギとの対面

Side 聖火

カタカタとパソコンのキーをたたく音が薄暗い部屋の中、響き渡る。俺の前では俺の機体である飛龍式の解析が山田先生と学園の誇るスーパーコンピューターによって行われている。俺は彼女の座っているモニターの横で織斑先生とその様子見守っている。現在はあの授業から時間が過ぎ放課後となっており放課後、俺はHRが終わった時に織斑先生と山田先生に呼び止められ、条件を飲むと言って調べさせると言ってきたのだ。

おそらく、向こう側は未知の存在である飛龍式と俺の戦闘力を考慮してこの要求をあえなく飲んだのだろう。俺と敵対して模擬戦を挑んできた教師を何故いちいち相手をしてコテンパンにしていたのかは、この時のためである。

本心では、戦いたくはなかったが飛龍式が来たら嫌でも学園側からデータの開示が求められる。その時に、こちらは条件を提示し向こう側にそれを飲んでもらうため最初のうちにある程度、自身との実力の差を見せつける。こうすることによって、相手が要求を否定した場合どうなるかを連想させる恐怖心を植え付けることができる。現に、彼女たちは条件を飲み、彼女ら個人で見せてほしいと言ってきた。最上の結果だろう。

ここまでは、俺の予想道理に事が運んだ。さあ、ここからはある程度は彼女たち俺の持っている情報を話さなければならぬ。もちろん、全て話すのではなくある程度誤魔化しながらだ。

ビービー

突然、山田先生が操作していたモニターにエラーの表示が音と共に表示された。

「駄目ですね、ある程度のレベルまで調べられますが、そこからはロックが掛けられていますね。」

そう言いながら、俺の方に椅子を向けた。

「山田先生、現状でわかっていることは……。」

隣にいる織斑先生が腕組みをしながら静かに言った。

「打鉄の発展期のようなのですが、それ以上は調べることができませんでした。」

「強力なロックが掛かっているみたいなんです。」

「そうか……。」

織斑先生はため息を吐き、そして俺の方を見る。

「お前に開示できるか？」

「お望みならば。」

「やれ、一応そちらの条件を飲んでやっているのだから。」

「わかりました。」

俺はそう言い山田先生の席に代わりに座り、キーをたたく。カタカタとその音だけが室内に響き後ろの二人は黙って俺の作業を見つめる。織斑先生からは相変わらず警戒のまなざしが強い。いくら、俺の事を信用しているとはいえ正体不明の存在なのだから当然のことだと思う。そんな中、しばらく打っていくと機体側から音声でのパスワードの記入を求められた。

「オルグ君、パスワード。わかりますか？」

山田先生が心配そうに尋ねてくる。しかし、このパスワードはあれであろうと既に俺の頭の中に過っていた。しかし、ここからが問題なのだ。ここから先に開示されるデータ、それは文字通り彼女らにとってはパンドラの箱であろう。もし、彼女たちがこれを知つたらもう今までの平和な生活に戻れなくなるかもしれない。そうなる前にといい俺はゆっくり二人に振り返り警告をした。

「ここから先は文字通りあなた達にとってはパンドラの箱です。これを見てしまえば元の平和な生活を送れなくなるかもしれません。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「もし、それでも見るといふ覚悟があるのなら先に進みます。」

俺の言葉を聞いて、彼女たちは表情を一瞬曇らせて、しばらく二人で話し合った。彼女らはある程度俺の事を理解し信用してくれている、そのため俺が言っていることが偽りでないことを既に悟っているのだろう。そして、しばらくしてふたりはうなずき俺の方に向いた。どうやら決まったらしい。織斑先生は強い瞳で見つめながら俺に言う。

「構わない、進める。」

この時彼女たちは知らなかった。自分たちがこれを見たことよ  
って激動の戦いの輪廻に組み込まれてしまうことを……。

「わかりました、では行きます。」

俺は再びモニターに向かいキーの横にあるマイクに向かって言っ  
た。

咎人よ、龍であれ

S i d e o u t

S i d e 千冬

奴の声でモニターにあのISのデータが一斉に流れ込んでくる。  
世の中には見ない方が幸せなことがあるとは言っけれど今まさに私  
と山田先生に当てはまっているだろう。そのデータを見ていくうち

に次々とあり得ないデータが表示されていつているからだ。

「……………男でも使えることのできるIS……………」

そう、奴のISはこの世界の常識やバランスを簡単に覆せれる代物だった。

「こいつの正式名所は第二世代 IDS 打鉄 飛龍式。」

「ISであつてISでならざるものです。」

「インフィニット・ドラゴン・ストラトス……………」

「第二世代の打鉄にある機動兵器に使われている人工筋肉やOSを移植して作り上げたものでまったく別なものになっています。絶対防御は存在せず変わりに固い鎧を纏っています。」

そう言いながら、奴はどんどんとキーを叩き機体のデータを開示していく。しかし、そのどれもこれもが見ている限りではオーバーテクノロジーの塊だった。ビーム兵器やあらゆる攻撃がある程度弾くことのできる「偽りの鋼」と「龍神の鎧」なる特殊金属でできた装甲や武器。さらに、ISのコアを直結して作動することで人間以上の動きを可能にする特殊人工筋肉とOS。それに、ISのシールドエネルギーを容易く削ることのできる高出力のレールガンやビーム兵器。おそらくではあるが、今この機体と敵対して勝てるISはこの地球上に存在しないであろう。

「まさにパンドラの箱だな……………」

私は思う、このデータがもし外部に漏れてしまえば文字通り各国

によるこの機体の争奪のための戦争になる。さらにISSによって抑圧されていた男性がこの存在を真つ先に入れようとオルグの命を狙ってくることは火を見るより明らかだ。それぐらいの力がこの機体にはある。隣にいる山田先生に至っては口を大きく開けて信じられないような表情を浮かべていた。たしかに、こんなもの他の教師に見せてしまえば何をするかわかったものではないと思い、奴の行動も納得がいった。

「どうでしたか・・・。」

ふと、奴の声に現実に戻された山田先生がおどしたような口調でオルグに聞いた。だした。

「お、オルグ君。あなたはいつたい・・・。」

世界とわたりあえる技術を手元に持っている存在に自然と恐怖がわいてきたのであろう。相変わらず奴の顔は隠されているのでさらに不気味さが増しているように思えた。けれど、

「ただのISS学園でのあなた方の一生徒ですよ。」

オルグは山田先生にそう言った。機械を介して話しているため感情が読めないが優しく言ってくれていることが伝わってきた。私も正直山田先生と同じく不安ではあった。こいつはこんな力を有しているのだから、もしかしたら我々の使っているISSの中心であるこの学園をつぶしに来たのではないかと？

けれど、もしこいつにそんな野心があるとすれば、篠ノ野をまわしてISSの生みの親であるアイツの妹である存在を命がけで守ったりはしないだろうしこんな情報を迂闊に見せたりはしないだろう。

わざわざ我々という殲滅対象に手を晒すやつなどいないからだ。

しかし、私にはいくつか奴の話を聞いていてひっかかることがあった。奴は最初にとある機動兵器の技術を移植した物だと言ったがそんなもの一切聞いたことはない。さらに、この技術を開発した研究者や科学者などはいくら情報を隠していてもいずれは漏れるはず、それに世界で最も多くの情報の得ることのできる私の親友からもそんなことは聞いたことがなかったのだ。

「オルグ、お前が言ったある機動兵器というのはいつたいなんだ。」

私が奴にそう質問を投げかけた。

「見たいですか？」

「見たいから言っているのだろうが。」

「わかりました。ですが現時点ではお見せすることができません。」

「何故だ？」

「この機体にはそいつのデータは入っていないからです。ただし、お時間さえいただければ数週間後にはお見せすることができます。」

「・・・わかった。それまでは、待とう。」

「もう一つ、質問がある。再度聞くことになると思うがお前はこの前襲撃してきた奴を知っているな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・、やはり言わなければいけないのですか？」

「やはり知っていたか。もし言わなければ、お前の立場が危つくなるぞ。」

「ISと互角に戦える新勢力の存在、その正体を知っているのだから。。。」

「最悪、拷問を行っても喋らせなければならぬってことですか？」

「。。。。。。。」

無言の肯定を奴に返す。生徒に拷問を掛ける、ましてや私の弟や親友の妹を命がけで守ってくれた恩人、そんな奴に拷問を掛ける、そんなことは教師として、人間として最もしたくはない。しかし、このまま奴が知らないふり決め込め続けられるほど今の学園側の状況はよくない。

学園の上層部の一部ではオルグの存在を危険視している者、オルグがアンノウンの情報を握っているのではないか？と考える者が少なからずいる。もし、その者たちが強硬手段を取ったら、確実に無事では済まない。最悪の場合は、アンノウンの襲撃を素性の余りわかっていないオルグに、奴の自作自演という理由で奴に押し付けて飼育殺しにすることもあるかもしれない。

もしそうなら、いくら私でも救うことができない。だからこそ、奴から少しでも情報を引き出して欲しいのだ。

「。。。。。。NT。」

しばらくの沈黙の後に奴からそついう言葉が返ってきた。

「ジユラシック・タクティカル？」

山田先生が初めて聞く言葉に私の隣で顔に疑問符を浮かべていた。

「それが、奴の、あの類の兵器の名前です。」

オルグはそれ以上私に答えることはなく今度は山田先生の質問に淡々と答えていく。

オルグ・D・ヘルグ、私はまだまだ奴に対する警戒を解いてはならないなと思いつながら山田先生と話す奴を見つめた。

Side end

Side 一夏

放課後、オルグは千冬姉と山田先生に連行され教室を出て行ったため俺はシャルルに声をかけて一緒に教室を出た。

「オルグの奴、いったいどうしたんだ？」

「多分、あのISのことについて報告しに行ったんじゃないかな？」

廊下を歩きながらシャルルと今日のことや学校のことについて話していた。

「一夏は、これからどうするの？」

「アリーナで筈やセシリア、鈴とISでの特訓だな。」

「へー、ねえ。その特訓僕も混ざっていいかな？」

不意にシャルルが俺に対してそう言ってきた。同じ男子がいれば心強い。オルグのいない放課後特訓はいつも俺に対する一方的なりンチだからな。

「いいぜ。よろしく頼むよ、シャルル。」

「うん、よろしく一夏。」

俺とシャルルはそんな談笑をしながらアリーナへと向かった。

「それとき。一夏、今度ヘルグ君の部屋に連れて行ってくれないかな？」

「うん？本人に直接言えばいいんじゃないか？」

俺はシャルルに問いかける。

「そうしたいんだけどね、一夏の方が僕より彼との付き合い長いから話しやすいと思うんだ。それに、なんていうか、すごく話しくそうだから。」

苦笑いを浮かべながらシャルルは俺に言った。確かに、あんな顔だし、無理だろうな。

「わ、わかった。今度でいいか？」

「うん、ありがとね。一夏。」

シャルルが満面の笑みを浮かべながら俺に言ってきた。え、笑顔がまぶしいぜ。

「は、早く行こうぜっ!!」

俺は思わず見とれてしまったことを誤魔化すようにシャルルの手を引いてアリーナに走って行った。途中、シャルルが顔を赤くしていたので風邪でもひいているのかときいたらはぶてたように違うと言われた。また、このパターンかよ……。

しかし、この時俺は後ろにいる修羅三人に気づいていなかったのだ。

S i d e e n d

S i d e 一夏ラヴァズ

「ぐぬぬぬぬ、なんなのよ。アイツ。」

「一夏さんにベツタリですわね。」

「落ち着け、一夏に限ってそんなことあるわけないだろ。」

私は廊下の陰で一夏と今日転校してきたデュノアとの会話を影から不のオーラを出しながら見ているオルコットと嵐に言う。

「第、あんたはいいわけっ!!!!!!」

「そうですわっ!!このまま一夏さんを取られてしまっ!!」

「だから、デユノアは男だろうが……。」

箒は片手を頭に当ててため息を吐きながらそう言う。それにしても、一夏の奴め。私の気持ちなど知らずに他の奴といくら男だからと言ってあんなに仲良くしておっ……。と心の中でかすかに呟く私であった。

しかし、この乙女たちは知らなかった。数週間後にはこのドタバタがこれまでにないくらい加速していくことを……。

言うまでもなく、このあと一夏はシャルルの説得空しく、恋する乙女たちによる理不尽な模擬戦（拷問）を強いられその様子をシャルルが苦笑いを浮かべながら眺めていた。そのアリーナの外で、偶然通りかかった生徒は中から悲鳴らしきものが聞こえたそう。

Side end

翌朝、一組の教室ではまた転校生が来るという話題で持ちきりだった。

「オルグ、今日転校生が来るらしいぜ。」

「この時期に立て続けに転校生か……。珍しいな。」

オルグと一夏は今回来る転校生について椅子にこしを掛けて話していた。どことなくボロボロになっている一夏に対してオルグは昨日何があったのか大体察していたので突っ込まなかった。しかし、

オルグは一夏には言わないが今回の転校生やこの前来たシャルルなどの事について快く思っていないなかった。別にシャルルについて悪いイメージは持っていないが彼らが来た理由だ。彼らが来る理由は十中八九、一夏と自分に近づいて専用機のISのデータの奪取が目的であるということが明らかだったからである。

そして、そんなことを話していると山田先生と織斑先生が教室に入ってきてホームルームを始めた。案の定転校生の紹介がされて教室の入り口から一人の女子が入ってきたのであった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

銀髪の背の低く左目に眼帯をしており、制服の着こなし方がいかにも軍服のようだった。おまけに彼女じたい軍人らしきオーラを出していたのであほな人間でもすぐに軍の関係の人間だとわかるであろう。この世界ではこういったISを扱えれば、たとえ子供だろうと軍に所属することができるのだ。

Side一夏

今、山田先生の横に立っている銀髪の奴、俺よりひどい自己紹介をするもんだなと思ってしまうくらい無愛想だった。すると、そいつは俺の前に歩いてきたのだ。ん？いったいなんだろう？

「！ 貴様がっ！！」

そう怒りに満ちたまなざしをしながらそいつは俺に向かって手を振り上げた。俺はとっさの事だったので反応できずそいつの平手が俺の頬を捕らえようとした瞬間俺は思わず目を瞑った。

ガンッ！！！！！！！！

しかし、いつまでも俺に殴られたときの衝撃は来ず変わりに前の方で何か途轍もない音がこだました。俺は何事かと思いついて目を開けた。

「マジかよ……」

ほかの生徒もその光景を見て口を大きく開けていた。山田先生も同じでその光景に少し涙目を浮かべていた。

「オルグ、やりすぎだ……」

千冬姉は若干呆れ気味でそうつぶやいていた。俺の前にいたラウラとかいう奴は今現在俺の前からいなくなり変わりに黒板にぶら下がっている。肩の服の部分に刀が刺さっていてそれが黒板に突き刺さりアイツの動きを封じているのだ。

「すみません、ついで体が動いてしまいました。」

そう声がして、全員がオルグのいる後ろの方に目をやった。オルグは席を立って何かを投げたような体勢になっていた。さらに左手には鞘が握られていてどうやら、俺を助けてくれたらしい。

「き、貴様……!!何を……!!」

黒板にぶら下がっているボーデヴィツヒが服に刺さっている刀を抜こうと足掻くがどうやら深くしっかり刺さっているらしくなかなか抜けない。しばらくそんなことをそっているとボーデヴィツヒが頬を赤く染め涙目になりながらオルグに怒鳴りかける。なんだ、結構かわいいかも、アイツ。しかし、オルグは何も答えることなくボー

デヴィツヒに近づいていく。

「オルグ、早く下してやれ。」

千冬姉が放心状態になっていいる山田先生に代わってボーデヴィツヒの前に来たオルグに言った。すると、アイツはボーデヴィツヒの耳元に顔を持っていき何か囁く。その行動にクラスメイトが歓喜の声を上げていたのは余談である。しかしその瞬間、ボーデヴィツヒの顔から一瞬で血の気が引いたような感じになり何かを怯えた表情になった。

(オルグの奴、何てアイツに言ったんだ?)

そして、何かを言いきるとアイツは少しため息交じりに刺さっていた刀を黒板から引き抜いてそれと同時にボーデヴィツヒは床に落ちて尻餅をついた。しかしこのあとがまずかった。同時に後ろの黒板の一部が音を立てながら崩れ落ちて行って黒板の半分が崩壊し使えなくなってしまったのだ。空しくガラガラと崩れ去り黒板が哀れな姿に……………。

……………プチッ

教室内で何か線のようなものの切れる音がして教室の雰囲気が一気に暗くなった。

……………

気のせいだろうか？オルグの背中からあり得ないくらい大量の汗をかいているように見えどうしてかすごく足をかくがくさせているような。そして、マズツタと小声で呟きながら連呼する声がアイツ

から漏れている。

「オルグ……。」

すると、何処かからその光景に見入ってしまったているオルグに向かって恐ろしいぐらいの冷たい声が向けられた。オルグは、声のした方向にギギギと嫌な音を立てながらゆっくり振り向いたが、案の定髪がフワフワと逆立ちあり得ないぐらいの怒気を出している千冬姉（鬼）がいた。

「お前という奴には、本当にも~~~~一度しっかり話さなければならぬな。」

につこりとすがすがしい笑顔をしながらオルグに言う千冬姉がいた。どうしてだろう、千冬姉の髪が逆立っているような風に見えるが、って千冬姉、竹刀なんてどこから出したっ!!

~~~~~逃げろ!!!~~~~~

そう叫びながら、オルグは教室のドアをけ破って廊下へと逃走した。行動早いな。

「逃がすかつ~~~~!!~~~~!!壊れた黒板と今蹴破った扉弁償しろ!!!」

すると、千冬姉もそれに続いてそこから弾き飛ぶかのごとく、そこからオルグを追って廊下へと疾走した。

「オルグ、達者でな。お前の事は決し忘れないからな。」

「オルグの奴、生きて帰って来んな。」

「お達者で、オルグさん。」

「あはは、みんな酷くないかな……。」

俺の隣にいつの間にか来ていた、篝、セシリア、シャルルが言った。

聖火、何時ぞやの借りは返したぞ。グフフフフ（作者の声）

その後、放心状態からなんとか解放された山田先生がボーデヴィツヒを席に着かせてホームルームを進めたが、その途中なにかの断末魔のような声は何回も聞こえそのたびに物が壊れるような音がしたが俺は気にしたら負けだと思いそのまま山田先生の話聞いた。

「俺は無実だつ――――――――――」

「――――――――」

「逃がすかつ――――――――――」

「――――――――」

ちなみにこの死の鬼ごっこ（馬鹿馬鹿しい）は一時間近く続いた

そつで廊下の彼方此方になにか細いもので突かれたような穴が沢山
できていたとか・・・。。。

聖火ザマー（作者の声）

パンドラの箱と黒ウサギとの対面（後書き）

如何だったでしょうか？

次回、シャルの正体バレのイベントとラウラとの戦い（トーナメント前の奴）まで書くつもりです。

また時間がかかるかもしれません。

すみません。

では、次回の更新でお会いしましょう！！

鳥籠の鳥は生きるといついことを知る（前書き）

遅くなって申し訳ございません。

学校のテストなどで遅れてしまいました。

その上、ラウラと一夏の騒動までたどり着けませんでした。

本当に、申し訳ございません。

では、謝罪はこれくらいにして本編をどうぞっ！！！！！！！

鳥籠の鳥は生きるといふことを知る

どうして、僕が幸せをお願いしたら駄目だったの。

ちやうの。

どうして、僕の大事な物はこんなにも簡単に壊れ

ったの。

どうして、僕たちは生きたいと願うことが駄目だ

誰か教えてよ。

どうして、母上が殺されなくちゃいけなかったの。

少年の静かなる嘆きと共に瞳から溢れだす温かい雫が泥まみれになった彼の赤い頬を伝い彼の両腕に抱きかかえられている者へとゆつくり落ちてゆく。なにふり構わず泣いた。泣いて、泣いて、泣いた。雨に濡れ炎で焼け瓦礫の山になってしまった自身の家の跡地の中心で。少年は吠えながら泣いた。既にこと切れ体を失い顔だけとなった自身の母親を震えるその小さな両腕に埋め。少年は自らの無力さを嘆いた。七歳の脆弱な少年にできることがそれしかないからだ。

暗く厚い雲で閉ざされた天は彼をあざ笑うかのごとく重い雨を降らし、赤く染まった大地には冷たく強い風が吹き抜ける。小さくて幼い彼には温かい陽の光さえも届かず、彼の嘆きが虚空へと消えていく。そして、その幼き少年に天の死神から与えられたのはただ一つ。

神の従者である偽善者たちがあらゆる物を焼き尽くし、奪い尽くし、血塗れ、そして抜け殻となった母国のみだった。

第十三話 鳥籠の鳥は生きるということを知る

Side 聖火

俺が目を開けた時、眼前には焼け野原ではなくコンクリートの天井と鈍い光が迎えた。背中にいつも自分が寝ているハンモックの柔らかな感触を感じるところを見るとどうやら眠っていたらしい。

「夢か……」

俺の記憶が正しければ、あの後、織斑先生との鬼ごっこをなんとか回避した俺は通常通りに授業に参加し、途中俺を再度捕まえようとした織斑先生の奇襲も何とか回避し、放課後、一夏たちとの訓練を経て今に至るはずだ。途中、ドイツからきたボーデヴィツヒが一夏にちよっかいをかけたらしいがその時、俺はトイレに行っていたのでよく知らない。そして織斑先生とのやり取りにかなり体力を消耗したら俺の体はここにたどり着いた後無意識の内に寝床に足を運んだらしい。俺は自分が寝ていたハンモックから飛び降りて、少し背中に嫌な汗がべた付いていたので寝起きで覚束無い足を動かしてシャワールームに向かった。

俺は、徐に服を脱ぎ、顔を覆っている包帯とサングラスを外し、

それを置いておくために用意した籠に投げ入れシャワールームに入った。さすがに、こういった場合の時は包帯を外す。いくら治っているとはいえずと巻きっぱなしだと汗や汚れで腐食して大ごとになってしまうからだ。

(またか……………)

俺は蒸気が立ち込めるその中自分の手を首の傷に当てながら思っかつての自分。そう、俺は時々こういった過去の夢を見る。その夢はほとんど言ってもいいくらい良いものとは言えない。護れなかったとき、後悔したとき、絶望したときと多種多様だ。

…………… 本当に何回経験してもなれないものだな。

{ お袋、親父…………… }

静かな独白はルーム内に静かに響く。シャワーから出る熱水が俺の髪を静かに濡らし、そのまま傷だらけの俺の背中へと流れていく。そして今はその音のみが狭い室内を満たす。まるで俺の独白をただ聞いてくれているかの如く。

{ ひとりあえず、腹減ったことだしなんか作るか…………… }

シャワールームから出た俺は、蒸気を身に纏いタオルを首にかけながら、自身の空腹を満たすために何か作ろうと思いきッチンへと向かう。

{ 何が残ってたかな? }

俺は冷蔵庫を開け、中身を確認する。ヒンヤリと冷たい冷気が俺

の火照った顔にあたりとても気持ちいい。昨日、凰がここに来て一夏のことに話しながら（俺が一方的に愚痴をきいた）一緒に食事を取ったためほとんど材料が残っておらず、冷蔵庫の中には、ハムが数キレとチーズに卵、それに昨日軽く作ったサラダとトマトのみだった。ご飯は炊いてある。これだけあれば三人分くらいは作れるだろうし、これで十分だ。

現在時刻は8時ジャスト。俺は急いで、材料を冷蔵庫から取り出して遅い夕食の支度を黙々と始めた。とりあえず、まずハムを軽く焼いて、後はチーズとサラダを添え合わせにしようと思い、IHをつけフライパンに残っていたハムを乗せる。

シャルル・デュノア。いや、シャルロット・ドローヌ。俺は焦げないように焼けるハム見つめながら考える。よくジャンヌさんから聞いていた彼女の自慢の娘だ。女なのにどうして性別を偽ってきたかは大体察しはついている。

織斑 一夏

世界で初めての男性IS操縦者である存在との接触、その後あいつの専用機である白式のデータの奪取。尚且つ俺の存在は俺が転校した数週間後に学園側から発表されたため俺のデータも視野に入れているはずだろう。それに彼女が転校してきて日はかなり浅いはずと彼女からの視線を感じる。敵意はないが一夏と違って怪しさ満点の俺に迂闊に接触するのは危険と判断して機を伺っていたのだろう。正体がばれる前になさなければならぬはずだから、おそらく、接触してくるならそろそろだ。この場所はまだ教員と一夏や鈴たちにしか知られていないはずだから、女子と来ることはまずない

だろうから多分同じ男子である一夏と一緒にここに来るはずだ。

俺は思わずハムが焼け始めていることに気づかず考え巡らせ続けてしまう。

にしても、じかに初めて見たが髪の色といい顔といい本当にジャン又さんにそっくりだったな・・・。

そう、いくら話には聞いていたとはいえ本人にそっくり、いや、まさに彼女はジャン又さんを小さくしたような人物だった。親子と雖もここまで似てしまつのかと言つくらい。

一人、心の中で彼女のことについて考察している中バチバチと肉の焼ける音と共にいい香りが室内に漂つていく。

っいけない、いけない。すっかり忘れてた、よっと。っ

俺はフライパンからハムを焦がさないように急いで取り出しあらかじめテーブルの上に用意していた皿に乗せた。そして、残っていたサラダに乗せた皿を冷蔵庫から取り出し、トマトが残っていたのでまず軽く水で洗い小さく切つてその上に乗せた。その後、ハムを焼いたときに使ったフライパンをそのまま使い目玉焼きを三つ作った。

正直、常人ならこれで三人前ぐらいだが俺はこれくらい食べないと動けないのだ。

俺が食べる量は、普通の人食べる量より遥かに多い。霊獣神機を操る者は動かすためには想像を絶する精神力と体力を使うため自然に食べる量も増加していく。今は乗っていないのでかなり食事量

は減少したがそれでもかなりな量になってしまったためだ。動かしていたときはこれの二倍くらいは取っていた。そして俺が窯の中のご飯をしゃもじで茶碗に入れようと思ったとき

コンコン

突然入り口のドアを軽くノックする音が聞こえてきた。来たかな・
・。俺は静かにしゃもじを窯の近くに置き俺が予想した人物のいるドアに向かった。

「ど、どうも……………／／／／／／／／」

俺がドアを開けそこに、いたのは一夏に手を握られて顔を赤くし体をもじもじさせているデュノアだった。しかし、ただのデュノアではない。男性にはないはずの部分が、そう胸が膨れていた。つまり、女の子なデュノアがいたのだ。

……………もうばれたのか。

もう少しバレないでいられると考えておいたが、この状況に内心呆れながら右手を頭に当てて、変にくねくねするデュノアとそれを不思議そうに見る一夏を見つめる俺であった。

S i d e シャルル

どうも、シャルルです。放課後、僕は一夏とオルグ（オルグにそう呼べと言われた）と共にアリーナに行ってISでの実戦訓練をしました。とは言っても僕はオルグ君との訓練は初めての参加だったので途中まで彼らの訓練の様子をアリーナの端で見つめていました。

アリーナでは僕たちの他に篠ノ野さんとオルコットさん、それに凰さんそれに他にギャラリーが何人かいました。

彼らの行く訓練の内容はまず篠ノ野さんとオルコットさんのペアーと一夏と凰さんとのペアーが模擬戦をしてそれを見てオルグがアドバイスや問題点の指摘などを行うものであった。

四人がそれぞれのISを纏ってオルグをおいて上空に上がる。

「一夏、手加減は無しだぞ。」

「そっちこそ。俺は何時でも全力でやるのみだ。」

「鈴さん、今日こそ決着を付けて差し上げますことよ。」

「はっ、あんまり舐めた口効かないことね、セシリア。」

それぞれ軽口を言い合いながら身を構え始めていく。そしてオルグの合図で模擬戦が開始された。まずオルコットさんの遠距離型のIS、ブルー・ティアーズのビットに援護射撃をもらいつつ篠ノ野さんの近距離型の打鉄がその機体の特性を生かして一夏たちを攻めていくが、対する一夏たちもレーザの雨を上手くスラスターを使って回避し、逆に凰さんの甲龍の衝撃砲の雨を降らして二人を牽制してその隙をついて一夏の白式の雪片で切り付けていく。両者とも一進一退の攻防が続き周りのギャラリーからとても大きな歓声が上がっている。そういつたやり取りが数十分間続きタイミングを見計らったオルグの一声で終了する。模擬戦が終了した後、オルグがその戦いを見ているいろいろな指摘や軽い戦闘での助言をそれぞれ一人ずつ

にした。彼の実力はこの前の模擬戦で見て知っている。だから、ほかの人より圧倒的に実力差があるのを生かしてそういった役を引き受けているんだと思った。

「デユノアさん、君の実力を見たいから一夏と模擬戦をやってくれないか？」

オルグが一通り一夏に言い終えた後、ふと僕にそうやって声を掛けてきた。一方、篠ノ野さんたちの方に目をやると、さっきの模擬戦で互いの問題点を言いあっていた。それにしてもやっぱりオルグの声は慣れないな……。彼の声は腕の機械を媒介にしている。と彼から聞いてはいたけれども正直、怖いよ……。

「わかったよ、オルグ。一夏の補給が終わったら始めよう。」

僕はそう彼に言って、一夏の補給が済むまで模擬戦の準備をした。そして、彼が補給を済まして僕の前にISを展開させて来た。僕も、自身の専用機であるヒトの会社で作った「ラファール・リヴァイブ・カスタム？」を纏った。最初だしたときに周りのギャラリィから歓喜のような声が聞こえてきたので少し嬉しかった。ここ数年、こういった場所にはいられなかったから……。

「シャルル、大丈夫か？すごく、浮かない顔してるぞ。」

「っ！！・・・うん。大丈夫だよ、一夏ノノノノノ」

僕がそんなことを考えていると目の前に一夏が来て心配そうに思いつめている僕の顔を覗き込んでいた。一瞬、ドキッとしてしまっ

た。一夏は、一般的に言うイケメンなのでそれが僕の前に来ていてしかも顔の距離が近いので少しだけ、恥ずかしいような気持になってしまった。・・・はっ、そういえば僕は今男子になってたんだっけ・・・・・・・・。ばれたかな・・・・・・・・。

「よかったです。なら、さっさと始めようぜ。シャルル。」

一夏は特に気にする素振りもせずそう僕に笑顔で言って上空へと上がっていく。

(//////////一夏の唐変木・・・・・・・・。)

その後、一夏と僕の模擬戦があり僕のワンサイドゲームで幕を閉じた。単純に一夏の装備は雪片しかなく飛び道具があり経験も豊富な僕のほうが勝っていた。けれど、その後、ドイツの代表候補性のボーデヴィツヒさんが自身の専用機である「シュヴァルツエア・レーゲン」を纏って一夏に喧嘩をふっかけるという事件が起きた。最悪、僕がボーデヴィツヒさんと一夏との間に入って一触即発からは回避することができた。

けど、僕にとっての大問題はその後の自室に戻った後に起きた。

一夏が僕の入浴中にシャンプーの詰替を渡しに入ってきたのだ。当然、僕は俗に言う裸だったので一夏に正体がバレてしまった。僕は、このことに物凄く動揺してしまった。あの人から言い渡された任務の失敗と単純に男性に裸を見られてしまったことに対する羞恥心からだった。

その後、一夏にどうして性別を偽って来たのか僕の過去も含めて

説明した。そして、一通り話終わったときに一夏に、

「それでいいのか？いいわけないだろ！！！！いくら親だからって、子供を自分のいいように使っていいはずないだろ！！！」

そう彼は僕に言った。けれど、今の僕には何も出来ない、一夏にバレてしまいこのまま本国に呼び戻されて、一生独房の中での生活を強いられるだけだろうと思う。

しかし、一夏は大丈夫と言った。

「IS学園の特記事項に本学園にいる生徒は原則、本人の同意がない限りあらゆる外的介入を

行うことができないってやつがあるんだぜ。」

「えっ？」

「つまり、ここにいる三年間は少なくとも安全だっただことだよ。」

そう僕に笑顔で言ってくれた。久しぶりに感じる人の温もり、僕の表情は自然と笑顔になっていった。

「ありがとね、一夏。」

「気にスンなって。それより、お前の力になってくれそうな奴がもう一人居るんだけど……。」

「それって、織斑先生？」

「いや、千冬姉にはまだ話さない。て言うか、IS学園の教員に話

したらまずいだろう。」

「そ、そうだね。じゃあ、一体誰？」

「オルグだよ。あいつなら、力になってくれる。俺の勉強や相談ごとを教えてくれたり聞いてくれたりしてくれるし、あいつなら大丈夫だ。」

そう一夏は僕に言って、僕たちは他の生徒から隠れながらオルグの部屋へと向かった。正直、僕もオルグとは一度しっかり話が聞きたかったので一夏に案内してもらうことにしたのだ。

Side out

Side 三人称

「そして今に至る。」

「一夏、誰に喋っているんだ？」

「すまねー、俺にも分からん……。」

「？」

俺の部屋に来た、一夏とシャルル女バージョンを向かい入れ丁度食事をとっていないと言ったのでとりあえず俺ように作っておいた料理を三人で分けて食べることになった。

「……何も言わないんだね。」

「何がだい？」

「シャルルのことだよ。普通なら驚くだろ？」

「そのことか。あらかじめ、調べはついていたからな。彼女の事は大体の事情は知っている。」

「そ、そうなんだ。」

そんなことを呟きながら少し怯えたような仕草をシャルルは見せる。

「心配するな、別に俺は君をとって食ったりするような真似はしないから。」

「オルグ、シャルルのことは……………」

「わかってる、内密にしとくさっ。」

「すまねー、助かるぜ。」

「それより、シャルルさん。俺に何か聞きたいことがあるんじゃないか？」

「……………、やっぱりバレていたかな。」

「授業中やいろいろな時間に君からの視線を時々感じていたしな、嫌でも何か聞きたいのは明らかだろ。」

「アハハ、そうだね……………」

そう言いながらオルグの作った料理を口へと運んでいく。食べる時に時折、一夏と一緒に美味しいとオルグに呟いていた。

「単刀直入に聞くけどオルグは、黄金の風について何か知ってるんだよね？」

「……………」

オルグはその言葉を聞いて食事を一旦中断してただ黙ってシャルルの眼差しを見つめる。今のオルグは包帯を口の部分だけ器用に解いて食べている。

「黄金の風ってなんだ、シャルル？」

「えっとね。二年前、僕のお父さんの会社の試作型第三世代のISの起動実験の時テロリストがそのISを強奪するために襲撃してきたって事件だよ。」

「たしか、その事件はその試作型のISを使っていた奴が撃退したけどそいつも死亡したってやつだよな。」

コップに入れてあるお茶を飲みながら一夏の問いにシャルルは答えていく中、一夏もかつてテレビで観たことがあったらしくその記憶を辿っていく。

「そもそも、なんでその事件が黄金の風と呼ばれてると思う？」

「うん。」

「一夏はシャルルの問いに腕を組みながら必死に考えていく。」

「実はね、あの事件には裏があるんだよ。」

「裏？」

「一夏はシャルルの言った問いに首をかしげながら彼女に問う。」

「うん、表向きは当時そこにいたテストパイロット、僕のお母さんが命懸けで倒したってことになってるけど実際は違うんだ。」

「それじゃあ、さっき上でシャルルの話した母親が死んだって事件はその黄金の風ってやつなのか。それに事実じゃないってどういうことだ？」

「ここからは、少し変だと思うかもしれないけど信じてね。」

「あゝ、分かった。」

シャルルがそう一夏に言い、彼も頷き了承した。そして、お茶を一口ゴクリと飲み、一息ついて言った。

「あの場に僕もいたんだけどテロリストを倒したのは、僕のお母さんじゃないんだ。」

「実際に倒したのは……。」

「銀の甲冑を身に付けた黄金の光を放つ機械の龍だったんだ。」

その後、彼女は一夏に当時そこで行われていた一方的な戦闘を語った。世界最強の兵器であるISがたった10分で完膚なきまでにたたきつぶされたこと。そして、それを起こしたのがISではなく鎧を付けた巨大な龍の顔をした機械の巨人だったこと。そしてそいつが持っていた武装がオルグの打鉄飛龍式が持っている雷蓮4式と同系統のものだったこと。その龍が飛び去ったときに発生した光が黄金のようだったので黄金の風と呼ばれるようになったこと。無論一夏も、最初こそは驚いたがシャルルの真剣な眼差しを見て自然と彼女の話しが嘘ではないと悟りその話を飲み込んでいった。

「……つまり、その西洋風の甲冑を付けた機械の龍が突然現れてシャルルの母親を助けたってことか。」

「そついうことになるね。」

そう彼女は一通り話終えると黙って俯いたまま目の前に座っているオルグに向かって言った。

「あの機械の龍とオルグの使っているISがそっくりなんだ。」

そのこと聞いて一夏が一瞬だけ惚けたような表情になるがそんな一夏を無視しながらシャルルはオルグの前に行って問いただしていく。

「あの龍のこと知ってるんだよね。知らないとは言わせない。あれは明らかにあの龍を意識して作られていた。それに武装も黄金の風が使っていたものと同系統の物だった。だったら教えてよ。ジャンヌ・ドローヌは、僕のお母さんは生きていますかっ！！答えてよ、オルグツ！！！」

シャルルはもの凄い剣幕でオルグに問いただす。そして、彼女の体は既に彼女の席から離れいつの間にかオルグを席から立たして胸ぐらを掴み床に押し倒していた。

「ちょ、シャルル！！落ち着けよ！！！」

彼女の尋常ならざる行動にやっと正気に戻った一夏が止めようとしたがオルグが待つてと彼を手で静止させた。すると、彼は涙目になりながら自分に掴みかかっているシャルルの頭に手を伸ばして、突然撫でだしたのだ。

「えっ？」

彼のとつた行動に一旦思考停止してしまった彼女だが、その間に彼女の沸騰していた熱も冷め自分が何をしているのかを理解した。

「え、え、つと、ゴメンツ！！！」

自分が彼を押し倒していることに気づいた彼女はすぐに彼を開放して直ぐに彼の上から飛び退いた。オルグも、押さえつけられていた体を起こして立ち上がる。

「ジャンヌさんと違って、元気のある子だ。」

そう彼が言うと彼女は驚いた表情をした。

「一夏、悪いが彼女と二人で話させてくれないか？」

「・・・分かった、シャルルのことを頼むぜ。」

「任された。」

彼の言葉を聞き一夏は部屋の外で待つておくことにした。

そして、オルグの部屋には既に食事を終えているシャルルとオルグしかない。

「さて、君がまず知りたいのはジャンヌさんの安否のことだな。」

「うん、お母さんは生きていますか？」

シャルルは若干不安そうに彼に聞いた。今の彼女は一夏意外にもう頼みの綱がないためこの回答に賭けるしかないのだ。そして、そんな様子を見て気づいたオルグは彼女の肩に手を優しく置いた。肩を置いたときに彼女は一瞬体を強ばらせてしまったがオルグの真剣な雰囲気を感じ残り少ない精神力を全開にして彼の瞳を見た。

「・・・生きてるよ、君のことをいつも心配そうにしていた。」

彼は機械で声も分からないだろうと思ったがそれでも優しく彼女に告げた。彼から告げられた言葉を聞いたとき一瞬目を見開いたが直ぐに目頭から暖かい雫が自然にシャルルの目から溢れ出す。

「……頑張ったな。今は、思いっきり泣け。」

彼はただそう彼女に言った。その言葉を皮切りに彼女は彼の胸に飛び込み思いっきり泣いた。今まで辛かったことを全て吹き飛ばすように。彼女は泣いた。最愛の肉親が生きていてくれたことに。彼女は泣いた。ただひたすらに、今まで押しとどめていた感情のストッパーが外れ全て溢れ出していく。そして、オルグは彼女が泣き終わるまでずっと頭を撫で続けた。もう、苦しまなくていい。そう彼女に言いながら……。

「う、ごめんね。服、汚れちゃったかな……。」

「構わないさっ、それで少しは膿みが出たか？」

「うん。ありがとっね、オルグ。」

そう言うと彼女は彼の胸から離れ笑顔で彼にお礼を言った。その顔はさっきの虚ろな表情とは全く違いとても生き生きとしていた。

「あの時のことを話すけど、落ち着いて聞いてくれな。」

「分かったよ。」

そして、オルグはシャルルに黄金の風の詳細を話し始めた。あの時に現れた、機械の籠は通称DTと呼ばれている兵器であること。このことを話したら彼女は驚いたがオルグがこのことは黙っていて欲しいと言ったので何とか飲み込めた。また、それには自分が乗っ

ていたこと。そして、ジャンヌが今は自分たちのもとに無事にいること。彼女は、最後にジャンヌさんが本当に無事なのかと確認した。証拠としてオルグは自分が持っていた去年ジャンヌさんと一緒に撮った写真を見せた。

「今度の週末にジャンヌさんと会う約束しているけど、一緒にくるか？」

「うんっ！！お母さんに早く会いたいよ……。」

「………そうか。」

手を合わせて俯いているシャルルはそう言った。そしてその様子を見てもう大丈夫だろうと思ったオルグは一夏を呼びに部屋の外に行こうとした。

「ねえ、最後に聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

不意にシャルルはオルグに質問した。彼は彼女の方振り向かず、ただ立ち止まって彼女の話聞いた。

「オルグにとって、両親の存在っていったいどういったものだったの？」

彼女は彼にそう聞いた。しばらく、沈黙が続いたがしばらくしてオルグが話し始めた。

「………俺に愛することと護ること、生きることを教えてくれた。」

「優しくて、時に厳しく、そして強くて、俺にとっての目標だった。」

「そうなんだ。……もう一つだけ聞いていい。」

「何だ？」

「オルグのお母さんって今はどうしているの？」

彼女は興味本意で聞いた。自分の母親はオルグに助けられて生き残ったけど、オルグの母親はどうしているのだろうと思ったからである。けれど、彼女はまだ知らなかった、この問いが聞いてはならないものだったことを。そして、彼女はこのとき知った。生き残るということをして……。

「……殺された、俺が七才の時に。」

「っっ！！」

シャルルは彼の言葉を聞いた瞬間驚いて口に手をやった。

「俺は何もできなかった。ただ、お袋が殺されるのを見ているしかなかった。」

彼の口から語られる彼の過去、それは今の彼女にとってはとても重すぎたかもしれない。

「俺のお袋は最後にこう言った。生きて、生き続けて。そして、必ず、幸せになれと。」

彼女は彼の言葉を最初は信じられなかった。目の前にいる人物がそんな重い過去を持っているなんて。

「シャルル。生きるとは、凄く辛いことだ。」

「だからこそ、生き続けなければいけない。生きて幸せを掴み味わうまでは死んではだめだ。」

「生き続ける。生きて、幸せになってみせる。世界で一番の幸せを掴んでみせる。」

「君を縛る檻などもうないんだ。これからは、自分の好きなように生きて行けばいい。」

彼は彼女にそう言い一夏を呼びに廊下へと出ていった。

ボタンと静かにドアを閉める音が部屋の中に響いた。そんな中、シャルルは立ち尽くしてしまった。拳を強く握り締めて……。オルグが彼女に生きると言ったとき彼女の頭の中にある光景が突然浮かび上がったのだ。とても厚い雲に覆われた空に焼け野原となった建物の中心で何かを腕に抱いて叫び、泣き叫び続ける幼い少年の姿を……。

（僕、なんてこと聞いちゃったんだろう……。）

今更ながら後悔の念が込み上げてくる彼女であった。自分の母親は生きている、それだけで幸せなのに彼には母親がないのだ。それも、彼の目の前で奪われてしまったというらしい。

(でも、そんな僕に彼は生きると言ってくれた。)

彼女は自分の素性のことを知っても、何ら拒絶せず受け入れてくれた一夏ことが嬉しかった。そして、自分の母親を守ってくれたオルグからは生きると後押ししてくれた。こんな自分のことを受け入れてくれ、さらに生きると言ってくれた。どんなに辛かろうと、だったらその人生を見返すぐらいになってみせろと。どうしても分らないが彼女は知らないうちに彼に父親的存在を重ねていた。強く、時に厳しく、そして優しい。

けれど、それと同時に彼女の心にはもう一つ、別の感情が芽生えていた。

(一夏・・・・・・・・。)

彼女は思った。どうして一夏のことを考えると、胸が締め付けられるような感覚がする。それに、なんだか顔が熱く感じる。オルグの時には感じられなかったこの感じは一体何だろう。

「もしかして、これが恋ってものなのかな／＼／＼／＼／＼／＼／＼」

彼女は自分の中に一夏に対する好意が湧いてきたのに気づいた。一緒にいた時間は少ないが彼から感じられた優しく強い心、そして自分の事を最初に受け入れてくれた……。彼女は一夏に惚れてしまったのだ。そして少女の呟きは、誰もいな薄明かりの室内へと消えて行った。

鳥籠の鳥は生きるといついことを知る（後書き）

如何でしたでしょうか？

いつも見ていてくれる方、本当にありがとうございます。

また、遅くなるかもしれませんが必ず完成させますのでそれまでしばらくお待ちください。

では、次回の更新でまたお会いしましょう！……！

黒兎の思いと狂気の申し子の襲来（前書き）

大変遅くなって申し訳ございません。

期末テストなどで遅れてしまいました。

本当にすみませんでした。

しかも、今回は今までの中でおそらく最長です。

キャラ（千冬とラウラ）のメンタル面が少し弱くなっているかも
しれません。

ご免なさい。

では、謝罪はこのくらいで本編をどうぞー！！

黒兎の思いと狂気の申し子の襲来

第十四話 黒兎の思いと狂気の申し子の襲来

S i d e ラウラ

暗い………。

生まれた時からずっとこうだった。戦うためだけに生まれ育てられてきた。軍の中で私は優秀だった、他の誰よりも優秀だった。しかし、その優秀はISという存在の登場によってまたたく間に壊されていった。直ぐに私の肉眼にIS適合率の向上のためにナノマシンが移植された。

しかし、私の体は適応しきれず私には出来損ないの烙印が押された。そんな時に彼女は絶望の中にいた私の前に現れた。

彼女は有能な教官だった、私は彼女に教えられて再び部隊の中で最強の称号を手にすることができたのだ。けれど、私の尊敬するあの方の、「ブリュンヒルデ」というIS操縦者にとっての最高の称号はあの男に汚されたのだ。それなのに、あの男の話をするにあの方は凄く優しい顔をされていたのだ。

……違う。私の知っているあの方は強く凛々しく、何よりいつも堂々としていた。許せなかった、私の尊敬するあの方を汚してしまった存在、あの方にあんな顔をさせる存在を。

私はあいつの存在を決して認めない、この手で必ず叩き潰す。

「……………」

私が目を開けると鈍い光が私に向かって差し込み、背中にとても柔らかい感触を感じた。そして、私の体には毛布のようなものがかけられており、この状況から判断するとどうやら寝かされていたようだ。私は、体を起こし周りを確認するために当たりを見回した。私の寝かされている場所はまるでどこかのレストランのようにテーブルが感覚を空けて並べられており、キッチンらしきものがある奥の方にあり寝床と言うには少し不似合いな場所だった。

「おかしい……………」

私の記憶が正しければアリーナで織斑 一夏と戦っていたはずだ。なのに、どうして……………？そして、私は不意に自分の左目の眼帯に手を伸ばしたのだが、

「ないっ！！」

そう、私の目から眼帯が消えあの忌々しいナノマシンが宿った金色の瞳が露出していたのだ。

「気がついたようだな。」

その声を聞くと自然と私の背中に冷たいものが流れ出ているのを感じた。

「き、貴様は！！」

私は声のする方に顔を向け、同時に臨戦態勢に入った。そう、そこには案の定、織斑 一夏とは違う、いやこの学園に入るもの全てと明らかに空気が違う人物が腕を組んで私を見つめていたのだ。

「オルグ・D・ヘルグ……。」

Side end

何故、ラウラがオルグの部屋にいるのか？とりあえず時間をさかのぼってみるとしよう。学校の授業が終わり、放課後にいつも通り訓練をするためにアリーナに向かっていた一夏とシャルルだが先にアリーナに向っていた篤が大急ぎで彼らのもとに戻ってきたのだ。

篤より先に来ていた鈴とセシリアが突然、ボーデヴィツヒに奇襲を受けて一方的にやられているらしいのだ。

そのことを聞いて大急ぎで駆けつけた彼らだが、既に鈴とセシリアのISはボロボロで地についていた。そして、その様子をボーデヴィツヒが自身のIS「シュヴァルツエア・レーゲン」を纏い、上空から不気味な笑を浮かべながら見つめていたのだ。その様子から判断して、二人のシールドエネルギーはもう底を付きかけ最早戦える状態ではないのを見てとれた。

そして、次の瞬間、一夏の中で何かが切れてボーデヴィツヒに向かって自身の白式を展開して切りつけていったのだ。しかし、彼と

ボーデヴィツヒとは、いくらオルグの訓練を受けているとはいえ、実力の差は歴然だった。しかし、途中、シャルルも自信のISラフアールを纏って一夏の加勢に加わり二人の連携で徐々にボーデヴィツヒを追い込みこんでいった。その際に、箒が傷ついて動けなくなっていた鈴とセシリアを担いでアリーナの端に急いで避難させた。

しかし、途中シャルルの隙をついたラウラが一気に攻勢に転じて自分の装備であるプラズマ手刀で切りつけ一時戦闘不能にしたのだ。これにより、シャルルはしばらく動けなくなり実質一夏との一騎打ちになった。

一夏も途中までは良かったもののやはり実力の差がありボーデヴィツヒのワイヤーブレードの巧みな動きに翻弄され追い詰められていった。

形成が一気に逆転し、ついに一夏の持っている雪片がボーデヴィツヒのワイヤーブレードによって弾かれてしまったのだ。

殺れる、この時のボーデヴィツヒの脳裏にはそう過ぎった。自分の願がようやく叶うと思ひ、先程よりも残虐な笑を浮かべながら、無防備な一夏に向かって肩に装備されているレールガンのエネルギーを全開にして放とうとした。しかし、この時、彼女は致命的なミスを犯してしまったのだ。そう、彼女は知らなかったのだ。一夏たちは、普段誰に鍛えてもらっているのかを……。

ボーデヴィツヒが一夏に向かって攻撃しようとした刹那、彼女に向かつて黒い巨大な球体が突然何処からともなく放たれ、そしてそれは真っ直ぐ彼女に命中して彼女を覆い尽くしてしまったのだ。

とっさのことだったので全員反応することができずさっきまでは

一夏のことを心配そうに見ていた筈とシャルルだが今はその光景をただ見入っていた。

そして、しばらく経って黒い球体の中から当然ボーデヴィツヒの断末魔のような声アリーナに響きわたったのだ。そして、この尋常ならざる自体に流石に一夏たちもボーデヴィツヒのことが心配になりその球体に駆け寄っていった。

その刹那、黒い球体がシャボン玉のように破裂し、そしてその中からISを纏ったボーデヴィツヒではなく、ISを強制解除させられた彼女を背負うオルグがいたのだ。黒い球体はデイストラクシヨンの陽炎を応用した飛龍式の単一使用 黒夢を発動させたもので相手に擬似空間の球体を投げつけ、その中に相手を捉え悪夢を見せ戦闘不能にする能力である。

その後、この事態を他の生徒から来た織斑先生が急いで駆けつけに来て一夏を連れていったのだった。そして、ボーデヴィツヒはオルグが織斑先生に頼んで彼女を拉致し、自分の部屋に連行していったのだ。

S i d e オルグ

目覚めた彼女に向かって声をかけると、彼女は直ぐに怯えながらだが臨戦態勢に入った。

やはり、まだ俺を警戒しているようだな。

「具合はどうだ？」

「……………」

俺が彼女に声をかけても一切しゃべらずその変わりに敵意だけが強まっていくばかりだった。流石にこのままでは不味いな……。

「取り敢えず、何か食事でも取ろう。俺が作るからお前はまだ寝てろ。」

そう俺は言い彼女に背を向けてキッチンに向かっていった。

「……何故だ？」

すると、今まで黙っていたボーデヴィツヒが俺に向けて問いかけてきたので俺は一旦止まって彼女の振り向かず彼女の言葉を聞いた。

「何故、私を殺さなかった！！私はお前の仲間に手を出したのだぞ！！！」

「貴様は、私と初めて会ったときに言ったはずだ。」

「仲間に出すようなら次は喉を掻っ切って殺すと。」

「あのお前なら私を殺せただけだ！！！」

「なのに、何故……。」

彼女は最初、俺に向かって睨みつけながら怒鳴っていたのだが、最後の方に至っては力なくただ泣きながら下に俯いてしまったのだ。今の彼女は分からないのだろう。俺が何故こんな行動に出ているのか。

俺は、以前彼女が一夏にちょっとかいを出したときに彼女の過去の経歴を調べたことがあった。作られた人間。彼女には、親がおらずただ戦うためだけに軍によって育てられてきたのだ。そして、ISの登場後、彼女は出来損ないの烙印を押されたが織斑 千冬がとある事情により少しの間彼女のいた舞台の教官になったときがあった。

そして、彼女の元で教わったボーデヴィツヒは目まぐるしく成長した。そして、一夏の事を知り彼が誘拐された事件のせいで織斑先生の「ブリュンヒルデ」の称号は汚されてしまった思い込み、彼に復讐しようとしていた。そう考えれば今までの一夏に対する行動も納得がいく。

(けれど……)

彼女が間違っているとは言えない、確かに普通の人から見ればただの逆恨みにしか見えないかもしれない。けれど、彼女は今まで必死になって織斑 千冬という存在を追いかけ続けてきた。そして、同時に彼女に対してずっと尊敬の念を抱いていたはず。戦いしか知らない彼女にとって織斑先生の強さは尊敬する対象以上のものだっただろう。大切な人が汚されれば誰だって怒るだろう。

しかし、彼女の場合戦いしか知らないためそういった感情の表現の仕方を知らないから不器用になってしまふ。

けれど、このままではいつか彼女は取り返しのつかないことをしてしまう。調べた結果彼女はまだ一度も人を殺したことはなかった。だからこそ……

俺はそんな彼女の様子を振り向いて見て直ぐに彼女の傍に向かった。そして、彼女の肩に優しく手を乗せた。その時、一瞬だけ拒絶

しよとしたのだがどうやら力が入らないらしく直ぐに諦めた。

「辛かったんだよな。怖かったんだよな。」

俺は彼女に向かって言った。すると、彼女は近寄ってきた俺の胸に突然飛び込み殴りつけてきたのだ。俺の胸を力なく泣きながらただ殴り続けた。

「悔しかったんだよな。許せなかったんだよな。」

「復讐したかったんだよな、自分の尊敬する人の大切なものを奪ったやつに……」

彼女はついに力尽き俺の胸の中で静かに泣き続けていた。そして俺の問いに彼女は胸に顔を埋め泣きながら頷いた。

そんな彼女がとても弱く、そしてあまりにも脆く見えた。だから俺は、彼女を優しく包み込んだ。かつての自分がされたように彼女に言った。

「もう、悪夢は終わったんだ。お前が苦しまなくていい。」

「お前はもう一人じゃない。俺はもう決してお前を攻めたりはしない。」

「誰がなんて言おうと、俺はお前を信じ続ける。何時もお前の見方だ。だから……」

「今は少し、休もうな……」

そう彼女に告げた。今、俺が彼女に与えることのできる精一杯の安らぎをずっと彼女に与え続けた。彼女が泣く中、照明は優しく俺たちを照らし、そして彼女の泣く声だけが静寂に包まれた室内を満たしていくのを感じながら俺は彼女が泣き止むまで只、優しく抱き続けた……。

彼女が泣き止むのに少し時間がかかったが泣き止んだ彼女はもうやら疲れたらしくまた眠ってしまった。そんな彼女の様子を見て、俺は自分の寢床である場所に寝かした毛布をかけてやった。

「何時も、傷つくのは無力な子供だ……。」

この子のように、ISの登場にもがき苦しんでいる子供がこの間にも世界のどこかで生まれ続けている……。

ISの登場によって、救われた人間もいればこうやって苦しむ人間も同時に生まれていく。何度見てもやるせない気分になってしまふ。そして、それと同時にどんなに強くても護れないものがある。自分は、本当に無力なものだと改めて痛感した。

「今の俺に出来ることは彼女を支えてやることだな……。」

俺は、泣きつかれ赤子のようにスッキリとした顔で寝ているボーデヴィツヒの銀色の髪を撫でた。ジャンヌさんとまた違ってまたこれもとてもいい触り心地をしていた。

「……あなたの教え子、今までかなり苦労したみたいですね。織斑先生。」

俺は先程から入口の物陰から感じる気配に向かって語りかけた。しばらくすると入口の影から案の定織斑先生がでてきたのだ。

「……………いつから気づいていた？」

「先生がこの部屋に入ってきてから直ぐに。」

「そつか……………」

織斑先生はそう俺に返ししながらボーデヴィツヒの寝ているハンモックのすぐ傍に歩み寄った。

「……………似てるんです。彼女は、昔の俺と。」

「どづいつことだ？」

俺の言葉に彼女はボーデヴィツヒの髪を優しく触りながら問いかけてきた。

「大切な物を取り戻したくて必死になって不器用だから傷ついていく……………昔の俺もそうでした。」

「……………そつか。」

俺の言葉聞き、彼女はそう言い絶えずボーデヴィツヒの髪を優しく触り続けた。そして、彼女のその表情は普段の彼女が見せないとても慈愛に満ちた物だった。彼女は強く、そして何より生徒思いなのだ。だからこそ、これも、彼女なりの優しさの表現の仕方なのだろう。

「ボーデヴィツヒ、お前の気持ちに気づいてやれなくてスマなかつた。」

「けれど、お前は私のようにならなくていいんだ。」

「お前は、ラウラ・ボーデヴィツヒとして生きていけばいい。」

彼女はボーデヴィツヒを見つめそう言いながら、少しの間ボーデヴィツヒの傍に居続けた。俺は、何も言わずに織斑先生の震えている肩にさっきのボーデヴィツヒの時にしたように優しく手を乗せた。

そして、その時にボーデヴィツヒの閉じた目蓋からは一筋に雫がその笑顔で満ちた赤い頬に流れ落ちていたのであった……。

Side end

その後、織斑先生は書類の整理があるらしくしばらくするとオルグの部屋から出ていった。そして、オルグはボーデヴィツヒが起きるまでずっと彼女の傍に寄り添っていた。そう、父親が自分の子供にするように彼は彼女の傍にその夜は眠らずに寄り添い続けた。自分のように悪夢を見ないで済むように……。

翌日、ラウラが起きたら自分の寝ている傍に、オルグが立ったまま腕を組み、顔を俯かせて寝ているのに気づいた。そんな時、彼女の心の中では変化が起きていた。戦いしか知らない彼女にとってそれが全てだったが、オルグの言葉によってそれが揺らいでいたのだ。

今の彼女は以前、自分が軍にいた頃に部下から聞いた「父親」と

いう存在にオルグが見えていたのだ。自分の優しく包み込んでくれた、彼の背中を彼女から見るととても大きいように見えていた。

「苦しまなくていいんだ。」、そう言われたことを思い出すだけで何故か胸が暖かくなるのを彼女は感じた。さらに、今まで怒りの感情で埋め尽くされていた自分が嘘のように消えていたのだ。そんなことを考えるうちに自然と体が動き、気がついていたら彼の背中に自分の顔を埋めていた。初めて、感じた温もりをもっと感じたいと思ったからだろう。

そして、そんな彼女の行動に気づき眠りから覚めたオルグは、しばらくただその場を動かずに行っているのだった。かつての自分が変わったように、彼女も変わろうとしているという事実をその背中を感じながら……。

時が少し経ち、学園では学年別のISでのタッグトーナメントが行われていた。一夏はシャルルと組み参加することになっている。オルグとラウラとの一件があったところ一夏たちもペアを決めるのにいろいろの意味で大変だったそうだ。そんな中、オルグはラウラと組むことになっていた。

何故、オルグがラウラに組むことになったかという彼女本人から頼まれたのだ。しかも、「もし、織村一夏に勝つことができれば

私のお父様になってもらう！」「というなんとも理不尽な条件付きで。しかも、仁王立ちしてドヤ顔で」>(^、^、^、^)<「とされながら言われたのだ。

注(一瞬、その姿に何この小動物、可愛いとオルグは思ってしまった。)

正直、オルグも気が引けたのだが彼女が変わろうとしているのだと思ひ、条件のことはとりあえず考えないで引き受けることにしたのだ。

そして、彼らは運がいいのか悪いのかトーナメントの一回戦で当たることになったのだ。

S I D E 3人称

試合開始のブザーが鳴ってから、どれくらいの時間が過ぎたのだろう。俺たちは互いに、ISを纏って上空で静止したまま動かないでいた。いや、正確には動けないと言ったほうが正しいのかもな。今回は各国からの代表などがこのイベントを見るために招待されていた。無論、裏ではオルグが言っていたようにオルグと俺のISの戦闘を記録することが目的だろうな。しかし、今このアリーナを支配しているのは観客からくる歓喜ではなく、恐ろしいぐらいの静寂だ。

「……………一夏、動けないよ。」

「わかってる、けど今動いたら確実にどっちかがやられる。」

そう、何故彼らが動けないのかと言うと目の前にいる人物に対し

て下手な攻撃を仕掛けた場合確実にやられるからだ。

一夏たちは以前、箒、セシリア、鈴、シャルルの五人対オルグと模擬戦をして一回も被弾させることなく負けたという苦い経験があるのだ。

「ラウラ、一夏の事はお前に任せる。思いっきりやれ。」

「……約束は、忘れてないですよね？」

「まずは、お前が勝つてからだろ？ほら、行ってこい。」

そうオルグが彼女に言い、背中をぽんと押した。そして、その返事を聞いた彼女は前とは違ってどこか普通の女の子がするように「パー」と笑顔を浮かべ、一夏の前へと躍り出た。ここ数日、ずっとオルグと行動を共にしていたため少しか成長したからであろう。彼女が笑顔を見せるようになったのは。

「織斑 一夏。」

前とは違い直ぐに、彼に噛み付くような素振りは見せず、彼の瞳を真っ直ぐに見つめる。

「これまでの愚行を、まずは謝罪する。……スマなかつた。」

彼女の口から発せられた意外な言葉に、一夏は思わず目を見開いて驚きの表情を浮かべたのだ。一夏だけではない、オープンチャネルだったのでシャルルにも聞こえていたため彼女も一夏と同様に驚いていた。

「しかし、今の私は、ラウラ・ボーデヴィツヒとしてお前と戦う。私のためにお前との決着を着けるために。」

そう言い終わると、ラウラはシャバルツエア・レーゲンの装備である両腕のプラズマ手刀を展開して身構える。

「……わかったぜ。俺も、織斑一夏として今はお前と本気でぶつからしてもらおうぜ。」

一夏も、始めはラウラの突然の変化にかなり動揺していた。ここ最近、彼はラウラと話すこともなく今日に至っていたので当然のことだろう。

けれど、オルグの方を向いてみると彼はただ動かずに彼女と自分の様子を見ていることに気づき、彼が何か彼女に齎したのを見て取れたのだ。そして、ラウラの意思に応えるため、自分の姉や、篝たちの思いのために、彼は雪片を展開して身構えた。

「行くぞっ!!」

「来いつ、ラウラ!!」

そして二人は、互いの思いを自身の得物にこめ、ブースターを全開にして突っ込んでいった。

「え〜と、オルグはどうするの?」

上空で一夏とラウラの戦いが繰り広げられており観客のボルテージも一気に上がる中、そのやり取りを見て取り残されてしまったシャルルは、同じく取り残されたオルグに向かって問いかけた。

「ラウラの邪魔をさせないためにお前の相手をする。」

オルグはそう告げると右手に薙刀を展開して彼女の正面に背中を翼をはためかせて行く。

「そ、そうだよね……。それじゃあ、僕も今出せる全力でオルグの相手をするよっ!!」

すると、シャルルもアサルトカノンの「ガラム」を展開して、オルグに向かって発砲しだったのであった。

「喰らえっ!!」

「グッ!!」

一方、一夏とラウラは互角の戦いを上空で繰り広げていた。激しい攻防が続いていたが、一夏の武装は未だに雪片一本のみだったので火力は段違いだった。ラウラのレールガンとワイヤーブレードによる巧みなコンビネーションに加え、ラウラのISにはISの動きを封じるための装備、AIC（慣性停止結界）があるため、一点集中の一夏の戦い方との相性は最悪だった。シールドエネルギーはどんどん削られていき、徐々に追い詰められていく。

「どうしたっ!!お前の実力は所詮その程度なのか!!」

「くそっ!!」

部が悪いと思った一夏は、ラウラと距離を取ろうとブースターの出力を調節しながら上手く距離を開けていく。しかし、ラウラもそれに負けじと、一夏の後に食らいついていく。

「どうする？白式のシールドエネルギーはもう100しかないってのに……」

一夏は、ラウラの激しい追撃を避けながらこの状況を打開する策を必死に考える。

「一夏!!加勢に来たよっ!!」

「シャルルかつ!助かるぜ!!」

すると、一夏の前方からシャルルのラファールがガルムをラウラに向かって発砲しながら突っ込んでいった。

「つく!!こんなもの!!」

ラウラは、ガルムから放たれる弾丸をAICで防御しながら一旦後ろへと後退していく。

「一夏、大丈夫?」

「なんとかな。でも、シールドエネルギーがそろそろやばいな。そう言えば、オルグはどうしたんだ?」

「え〜とね、一応、あれは倒したうちにはいつているのかな?」

そういうと、彼女はアリーナの端の一角を指した。

「……………な、何があつたんだ？」

「あ、アハハハ。」

一夏は、その状況に内心呆れつつ、シャルルは苦笑いを浮かべていた。アリーナの壁に、オルグの上半身だけがツツコミ下半身だけが突き出て残念な状態になっている。そう、簡単に言えば壁に突っ込んで動けない状態になっているのだ。

「えくとね、オルグが僕の方にブースター全開にして突っ込んできたんだけど……………」

シャルルが言うには、一夏が戦っているときにシャルルもオルグと戦っていたのだが途中、飛龍式のブースターが突然暴走して制御不能になって壁に突っ込んでしまったらしく、それと同時にシステムが一時ダウンし暫くは動けないのだ。

余談であるがオルグが突っ込んだ時に、観客席にいたメガネをかけた水色の髪の女子が「……………ご、ごめん……………なさい。」と呟いていたらしい。

「彼奴、災難だな。」

「でも、これってチャンスだよ。一夏、筈たちと練習したアレを使ってみようよ。」

「……………試してみる価値はありそうだな。」

そう言いながら頷き合い、ラウラの方へと目をやる。彼女は、今、アリーナの壁に突き刺さったオルグを必死になって引き抜こうとしている最中だった。

「ラウラ、俺は自分で何とかする。お前は、戦いに戻れ。」

「し、しかしっ!?!」

「早くしろ、お前は、彼奴に勝ちたいんだろ。」

「.....」

「くだつたら、早く行け。」

如何せん壁に突き刺さったままラウラにそう言ったため普通ならかっこいいことを言っているのだが締まらないオルグであったが今のラウラにはその言葉だけで十分であった。彼女は、オルグに向かって頷き再び一夏たちの前へと躍り出る。

「さあ、続きと行こうぜっ!?!」

「二対一で悪いけど、勝たせて貰うよっ!?!」

「ふっ、たかが一人増えようと私のISの前では無力だ!?!」

再び、互いの交える三人。一夏とシャルルが揃ったことにより二人は幕たちとの特訓で生み出し当初計画していた対ラウラ用の戦法を使うことにしたのだ。

まず、一夏がラウラに向かって雪片を構え突進していった。もちろん、その攻撃はラウラのAICによって止められてしまったがバババババツ!!!

その隙にすかさず、シャルルがガルムをラウラに向かって発砲した。しかし、その時にラウラはAICを発動することができず被弾してしまったのだ。そして、被弾したラウラは、一夏たちをワイヤブレードによって引き剥がし一旦距離をとる。

「くっ!!!」

「やっぱりな。そのAICって装備は挟撃や一对多に向いてないみたいだな。」

そう、この戦法はAICの弱点を突き、同時にシャルルのISと一夏のISの特性を生かしたコンビネーションアタックだ。

Side end

Side 篇

「あの戦法はっ!!!」

私は一夏たちの戦闘を見てそう叫ぶ、現在、私はまだ自分の試合まで時間があるので観客席から鈴とセシリアと共に一夏たちの試合を見ている。

「一夏さん、練習道理にちゃんと出来ていますわね。」

「AICは、一つの攻撃の無効にかなりの神経を使うからな。同時攻撃には弱いのは当然だ。」

「当たり前よ、あたしが教えたんだから!!」

「鈴さん、私じゃなくて、私達ですよ!!」

「ふんっ!! あんな、難しい数式言っただけで一夏が分かると思っ
てんの!!」

「鈴さんこそ、感覚で掴めなんて難しすぎますわっ!!」

「……お前ら、少しは静かにして見れないのか？」

私は、隣でぎゃあぎゃああと騒ぎ火花を散らせている二人に向かつて呆れ半分に言った。この二人は、この前のラウラとの戦いのせいでISにかなりのダメージを負い今回の行事に参加できないためずっと試合を見ているのだ。

（しかし、オルグの奴、一体どうしたのだと言うのだ。）

そう、確かに一夏たちのことも気になるのだが私は現在、アリーナの壁から必死になって出ようとしているオルグの方へと目をやる。

私は、あの男の強さに純粹に惹かれている。圧倒的な力による戦闘、もし私のあれ程の力があれば、一夏の傍にいられるのだが、といつも考えている。

（力があるのに、何故あんなことを……。）

以前、一夏とデユノアたちのコンビネーションアタックの練習を終えた私は、オルグのもとに行き訪ねたことがある。私は強くなつた。けれど、到底オルグに追いつけるものではなかった。だからこそ、

「教えてくれっ！！どうやれば、お前のように強くなれるのだ！！」

私は、自分の心の叫びを奴に向かって叫んだ。奴には、一夏絡みのことではいると相談していたので私の叫びに答えてくれると信じていた。私は、無人機の襲撃を受けたときに私の愚行のせいでこいつに傷を負わせてしまい自分の無力を痛感した。だからこそ、もうあんな思いをしたくないのだ。そして、奴は私の肩に手を乗せ私の目を正面から見て言った。

「…、力を欲し焦る気持ちはわかる。だからこそ、今は耐える時だ。」

「…自分の爪を研ぎ続け、来るべき時までその力は温存しておけ。」

「…お前は、もう十分強いんだ。元に専用機持ち、代表候補性を量産機で互角に渡り合っている。それは、とてもすごいことだ。」

「…けど、その力に、自惚れてはダメだ。もし、そうでなければお前は掛け替えのないものを全て失うことになるぞ。一夏や友達、そして自分さえも。」

「…今は、分からないかもしれないし、この解答ではお前は満足し

ないかもしれない。} }

「へへけど、この言葉を心の何処かにと止めておいてくれ。」 }

「へへそして、もしも、専用機（力）を得たとしても何時も忘れるな。」 }

「へへそれが、いずれ君の助けになる。」 }

私の言っただけで欲しかったことは少し違いますが私の叫びを正面から受け止めてくれたから少しは気持ちが悪くなった、奴の言葉の意味は何時もその時にならないと分からないことが多い。しかし、奴は今まで間違ったことは言っただけで来ていないのだ。元々奴の教えで私は量産機のISで専用機持ちたちと互角に渡り合えるようになった。

しかし、その時のオルグの雰囲気は何時もの優しさではなく何処か儂さを感じさせていたような気がした。まるで、私の様子を何処か自分と照らし合わせていたかのように……。

「オルグ、お前は一体どんな過去を経験したと言うのだ……。」

私は、そう一人考えながら未だにアリーナの壁から翼が引つかかり抜け出せず情けない格好をしているオルグを見た。

しかし、彼女は、いや、彼女だけじゃない。一夏たちは近いうちにいずれ知ることになる。地獄で生きてきたオルグの、聖火（咎人）の悲しき過去を……。

Side end

Side 三人称

「一夏、僕もシールドエネルギーが少なくなってきたよ。」

「俺も、零落白夜があと一回打てるかどうかだ。」

俺は、シャルルとコンビネーションアタックをラウラに向かって仕掛けていたのだが直ぐにあいつは俺たちと距離をとってワイヤーブレードや大型レールガンでの遠距離攻撃に切り替えてきた。流石に、軍にいただけはあるな。俺たちは、さっきからあいつの攻撃に突き放されて接近することができなくなっていた。

「どうする？俺の武装は、雪片しかないしな。」

「……そうだ！！一夏、僕に考えがあるんだけどいい？」

俺たちは、ラウラの大型レールガンでの追撃を必死に避けながらこの状況の打開策を考えていたがシャルルの奴が何か閃いたらしくその顔がさっきまでとは違って自信に満ちた顔だった。

俺たちは、しばらくの間逃げ続けたが途中シャルルが向きを反転しラウラのいる方へと近接ブレードの「ブレード・スライサー」を構え突っ込んでいった。流石に意表をつかれたラウラはブースターを急停止させかろうじてAICを発動させた。

そのおかげで、シャルルの攻撃を止めることができ、シャルルはラウラの前で無防備になってしまう。

「まずは、貴様を始末するっ!!」

そう言い、肩の大型レールガンを放とうとしたが、

「甘いよ、ボーデヴィツヒさん!!」

しかし、シャルルのその言葉と彼女の表情を見たときにラウラは自身の背中に嫌な汗を感じた。そして、それと同時にラウラのシユバルツェアの背中の装甲に強い衝撃が襲った。

不意に後ろを見ると、そこにシャルルのISの装備である重機関銃「デザート・フォックス」を発砲させた一夏の姿があった。

「まさか、IS装備の使用許可を出していたのか!!」

ISの装備は敵に奪われたときに使用されないように搭乗者以外は使用することができないが、搭乗者自身が使用許可を出せば他のISを纏っていても使用が可能なのだ。

先ほど、ラウラの追撃を避けているドサクサに紛れて自身の装備の使用許可を出したシャルルは「デザート・フォックス」を一夏に渡していたのだ。

「どこを見ているの。」

しかし、その瞬間AICから逃れたシャルルが一気にラウラの懐へと入り込む。

「ぐっ!!」

「この距離なら外さない!!」

そして、シャルルはラファールの膝の装甲をパージしてパイルバンカーの「シールドスピア」をラウラに食らわせる。

「グアーーーーー!!!!!!」

ラウラは悲痛な叫びを上げながら、その攻撃を腹の装甲に直撃し上空へと吹っ飛ばされる。今の、攻撃でラウラのシールドエネルギーは殆どが削られ、最早AICが展開できなくなっていた。それを見計らった一夏が背中のブースターを全開にして刀を前に出し白式の零落白夜を発動させて突進していく。

「くっ!!」

黄金の光が彼を包み込み、ラウラへと向かっていく。今までは、大切な姉が自分を守ってくれていた。だから、今度は姉のように誰かを自分の大切な物を守ってやりたいと思った。けれど、オルグという姉とは違う人間に出会い守ることの難しい現実を知った。だからこそ、自分の思いを例え辛くても貫きたかった。もう、力が無くて自分の仲間が傷つくのが見たくなかったからだ。彼の思いが強くなっていくと同時に白式は黄金の光に包まれていき、その姿にこの場に居るものが皆見惚れていた。

「これで、終わりだーーーーー!!!!!!」

そして、一夏（白騎士）の零落白夜（思い）は、見事にラウラ（黒兎）のIS（思い）に届いた。

「守ってやるよ。」

どうしてだろう。オルグの時とは、また違った暖かさを感じる。それに、とても胸が熱い……。

「そうか、これが時めいたというものか。」

織斑　一夏、惚れてしまいそうだ……。

そして、暗い空間は光に満たされていった……。

光が収まり、中からISを強制解除させられたラウラを抱えた一夏がゆっくりとシャルルの方へと降りていく。

「勝ったぞ、シャルル。」

「ボーデヴィツヒさんは？」

「気絶したみたいだ。けど、大丈夫そうだけ。」

「よかった……。」

シャルルは安心したのか思わずため息を吐きながら言った。

「……………一夏、シャルル。」

すると、一夏たちの後ろからISを解除したオルグがこつちに歩み寄ってきた。

「勝ったぞ、オルグ。」

そう言い一夏は、ラウラを抱えたままオルグの方へと近づき、彼女をオルグに渡した。

「よく頑張ったな、ラウラ。」

そう言い彼は、ラウラの頬を撫でながらそう言った。そして、それと同時にオルグは自身のISが使えなくなつたと審査員の織斑先生に伝えた。

勝者、織斑、デュノアペア！！

一回戦からの死闘を見た観客のボルテージは既にMAXに達していて、溢れんばかりの歓声が一夏達を包んでいく。一夏たちは、勝利を喜び、オルグはラウラの満足そうな表情に彼女は変わったのだと思ひ安心していた。

そして、特に何事もなく一回戦は終わり続けて二回戦が行われる。
.....

「そう簡単に、守るといつ言葉を口にしない方が宜しい
ですよ、織斑 — 夏君」

ハズだった。

突如、アリーナに響く不気味な声にアリーナに居る全員が反応する。

「あなたは知らないのですよ。他を守るといふことの厳しさを……」

その声が響く刹那、上空のシールドがけたたましい音を上げ砕け散り、前回の無人機同様にアリーナの地面に衝突し爆炎が上がる。

「くそっ!!!!」

「一体、どうしたの!!!!」

「ちっ!!!!」

一夏とシャルルはISを纏っていたので辛うじてその衝撃に耐えられたのだが、生身のオルグはラウラを背負ったまま爆風に飲み込まれていく。

「オルグっ!!!!」

その様子を見た一夏がそう叫ぶがオルグは爆炎の中なのでよくわからない。

非常事態発生、トーナメントの全試合は中断、生徒、来賓の方々は教師の支持に従い直ぐにアリーナから退避してください。》

アナウンスがアリーナに響き混乱する観客席内は防御シールドによって覆われていく。

「織斑 一夏君」

爆炎の中から不気味な声が一夏に向かって囁きかける。

「貴方に教えて差し上げましょう。」

煙がだんだんと晴れていく中、その声の不気味さに思わず身震いしてしまう一夏。そして、その声の主の全体図が段々と露になっていく。そして遂にその姿が露になった瞬間、一夏や、シャルルはそこに居たものに対して言葉を失ってしまった。

「守るといふことの本当の辛さを、絶望という極上のスパイスと共に。」

そこにいたのはISではないにか、全高はゆうに20メートルを超えており背中に巨大な背びれを付け、機械で出来た顔を持ちその形相は正にワニのようだった。

彼らは知らない、この兵器がどのように呼ばれているか。しかし、オルグは知っていた。この兵器の名を。そして、その登場者の名を。

そう、その兵器はかつてオルグが生前に破壊したはずの機体、そして自分の母親を殺した者、

第五世代 Z T スピノサウルス T P タイフ ブラド

搭乗者のコードネームをハンニバルと言った・

・
・
・
・
。

黒兎の思いと狂気の申し子の襲来（後書き）

如何でしたでしょうか？

次回から、オリ展開です。

そして、いよいよ聖火の過去の一部が明らかになっていきます。

感想をくれた方、何時も読んでくれる方本当に感謝感謝です。

スピノに関してはまだ武装を考え中です。

何か意見がありました感想欄の所に気軽に書いてもらえればありがたいです。

では、次回の更新でまたお会いしましょう！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6106v/>

I S v s D T 咎人よ龍であれ（仮）

2011年12月8日00時46分発行